首巻き春貞
松平春貞一代記
新風
八
松田純一
mactechlab.jp

首巻き春貞（八）

松平春貞一代記　新風

表紙デザイン　junichi Matsuda

・松平春貞
通称首巻き春さん。本名は松平春貞。尾張藩三代藩主徳川綱誠が市井の女に生ませた子。尾張第六代藩主徳川継友、第七代藩主徳川宗春とは腹違いの兄弟。尾張柳生新陰流免許皆伝。

・永井幸江
春貞の妻。尾張藩江戸上屋敷、江戸家老永井主水の一人娘。柳生新陰流の遣い手。理子は春貞との間にできた娘。

・沙代
春貞の乳母で育ての母

・小川笙船
小石川養生所初代肝煎。本道(内科)の医者。江戸の町に住む貧しい病人の現状を目安箱へと訴え出たことが八代将軍吉宗の目に止まり、小石川養生所開設が命じられたが早々と息子丹治（隆好）に肝煎を譲り隠居したはずだったが…

・小川隆好
笙船の息子。養生所二代目肝煎
・弥三郎
養生所に吉宗自らが送り込んだ腕利きのお庭番。後に春貞の屋敷で働くようになり、春貞の軍師的存在
・米道格左衛門
尾張御連枝松平家時代の春貞の友。春江館館長。夏穂の夫
・夏穂
太子堂長兵衛の一人娘で剣の虫。春貞夫婦の養女となり米道格左衛門と夫婦になった。
・堀田万之助
尾張藩江戸藩邸剣術指南役および江戸家老永井主水の用人だったが春貞の屋敷に加わる。田宮助左衛門の娘秋子と祝言を挙げた。春江館師範
・留吉
春貞らに命を助けられたことから屋敷の下僕として働くことになったが奈美と祝言を挙げた

・田宮助左衛門
御納戸同心だったが上役に裏切られて浪々の身に。妻は亡くなり娘秋子と二人暮らしだったが、縁あって春貞に仕える
・田宮秋子
田宮助左衛門の一人娘。堀田万之助と結ばれる
・田宮（石川）奈美
木更津の代官、石川賢之介の弟仙之助の娘。父の敵を討つことが出来、春貞の屋敷で田宮助左衛門の二人目の娘として生きることを決意。留吉と所帯を持つ
・およし
六歳のとき女衒に売られ吉原の遊女に。留吉の妹。春貞に身請けされる
・井之上新界
小田原の廻船問屋の息子。長崎に遊学し阿蘭陀医学を学び小川笙船の門を叩く
・伊丹鉄太郎
南町奉行所、定町廻り同心で春貞の親友。一刀流の遣い手
・深雪
養生所に眼病で入所していた後家。伊丹鉄太郎の幼なじみで伊丹鉄太郎と夫婦

になる。

・八重

小石川養生所の賄中間だったが伊丹・深雪に請われ、深雪の世話人として伊丹家に奉公する

・徳川吉宗

徳川第八代将軍

・徳川宗春

尾張藩第七代藩主。松平春貞は腹違いの兄にあたる

・徳川宗勝

尾張藩第八代藩主。幼名代五郎。御連枝川田久保松平家時代に米道格左衛門と共に成長し春貞を兄として慕っていた

・定吉

小石川金杉水道町を縄張りにする地元四代目の十手持ち

・政五郎

室町一丁目長濱町高砂新道沿いに鳶の店を張る「い組」の頭

・岩次郎

須田町で十手持ち兼金貸しの二足のわらじを履く

- 長兵衛

日本橋元鳥越仏壇仏具商／太子堂の当主だったが隠居

- 相模屋清右衛門

日本橋両替商相模屋の隠居

- 山田浅右衛門吉時

公儀御試御用を勤める一方で斬首刑の執行を依頼されたことから人斬り浅右衛門、首切り浅右衛門などと呼ばれた。吉時は二代目だが山田浅右衛門家では事実上の初代として扱われている。源蔵は息子で後の吉継

- 浅草弾左衛門

関八州の穢多（えた）身分を支配し、下級刑吏による治安維持、死んだ牛馬処理と革製品製造販売はもとより燈芯の専売や遊女屋、芸能民、非人をもその支配下に置いた強大な力を持っていた

首巻き春貞（八）　新風　目次

第一章　笙船の決意　九頁

第二章　徳川宗春への忠言　四十一頁

第三章　向島診療所開設　六十二頁

第四章　徳川宗勝来訪　一一四頁

第五章　新しい風　一四六頁

第六章　惜別と衝撃　一七八頁

一

元文三年（一七三八年）が明けた。
春貞の屋敷は例年通り賑やかだった。
特に昨年秋から滞在している小川笙船の存在は春貞たちにとって父親が戻ってきたかのような安堵感と喜びを増していた。
なにしろ春貞は小川笙船によって命を救われ、笙船が目安箱に訴えた庶民の医療事情をきっかけにして小石川養生所ができ、春貞はそこで生き甲斐を見いだしたのだ。
そして養生所を縁として尾張藩江戸家老の娘幸江と知り合い結ばれ、いまや十歳になる娘理子を授かった。
また南町奉行所常廻り同心の伊丹鉄太郎とも知り合い、無二の親友となったし公

儀御庭番の弥三郎はいまでは春貞の屋敷になくてはならない一人だった。
新玉の朝餉のため大広間に集まった一同を見回した春貞は、
「新年おめでとうござる」
と挨拶した後、
「しかしこうして一同に介すると我が屋敷も随分と賑やかになったものですな母上」
と感想を述べた。
「さようですな。
国元から慣れない江戸のこの屋敷に移ってきたときには春どのはほとんど寄りつきませんでしたから、閑古鳥が鳴いておりましたのに…」
沙代がそう言いながら思い出し笑いをすると春貞は、
「母上、そうした昔のことは思い出してくれますな。冷や汗がでますでな」
と笑った。
小川笙船は少しの酒で赤くした顔を向け、
「そうじゃったのう。春さんは、わしには出目や名はきちんと教えてくれたが、己は風来坊だというてな、まさかこうした立派な屋敷があろうとは夢にも思わん

かったぞ」
と真顔で話した。
「先生、母上。そう俺を責めないでくだされ。若気の至りというやつでした」
春貞も笑いながら応じたが一同の表情は皆晴れやかだった。
「どうだ、およしさんや。その後体調は」
膳をつまみながら笙船は留吉の妹であるおよしに話柄を向けた。
「先生、おかげさまでとても気分がよいです。皆様になにかご恩返しができるとよいのですが」
と呟くと笙船は、
「ともかくじゃ。いまおよしさんが心する一番のことは病気の完治だ。すでにほぼ直っておるでこのままでいけば春になれば皆と一緒に花見が出来るじゃろう。直ればおのずと次の道は開けるものぞ。のう春さんや」
「そうですな。急がず焦らずでよい。
きっとな、およしに合った生き方が見つかるに違いない」
盃を仰ぎながら春貞は答えた後にまた話柄を変えた。
「そういえば秋子と奈美は父に算盤を習っているそうだな」

「はい。ここのところ父上のお役目が重なるときがございますので少しでもお役に立ちたいと思いまして」
奈美がそういうと秋子も頷いた。
「確かに助左衛門の役目は広く重くなっている。それに商家との金のやり取りなどでは遅延無く計算を必要とするでな、是非是非二人とも励んでくれ」
一息入れた春貞は、
「助左衛門」
と田宮助左衛門に声をかけた。
「はっ」
箸を膳に置いて助左衛門は春貞に体を向けたが、春貞は、
「助左衛門。食べながらで良い。これまでお主が使ってきた算盤ひとつではなにかと不自由であろう。お主の目に任す故な、実用的な算盤を二つ求めておけ。それとな、お主のお役目は細かな文字を見なければならぬ。見ているとお主も歳だ。そろそろ近間が見えにくくなっておろう。どこかで眼鏡を求めておけ」
と命じた。

「ありがたいことでございます。承知いたしました」
助左衛門がそう答えると留吉が、
「しかし、あんな数珠玉みたいなやつでよく算術ができるものですな」
と感心し皆が笑った。
母幸江と春貞の間に座していた十歳になった理子はいつのまにやら笙船の隣で遊んでいたが、
「父上、わたしにもお役目を与えて下さい」
と願った。
理子は昨年から身長も伸び、幸江によく似た美しい少女に育っていたが、相変わらず一日の多くは竹刀や木刀を振っていたものの夏穂曰く近頃ではその姿が様になってきたという。
とにかくじっとしている時がないほど動き回っていた。
「そうよなあ。理子はいましばらく弥三郎爺と留吉の手伝いをしてな、庭の掃除と畑の世話を心懸けよ」
父春貞にいわれた理子は不服そうな顔をしつつも無言で頷いた。

桜が開花する季節になると小川笙船からおよしは完治したとのお墨付きが出た。もともと労咳は初期だったこともあったが、春貞に吉原から身請けされた後、屋敷の畑で栽培していた高麗人参や山田浅右衛門宅で製造している人の肝から作ったといわれる高価な人胆丸などを処方されただけでなく、たまたま春貞の屋敷に長逗留することになった笙船の的確な治療により、死の病と言われていた労咳を克服出来たのだった。

当のおよしも力仕事はともかく庭の掃除などができるようになったので表情に明るさを帯びてきて、兄の留吉に言わせると吉原で出会ったときとは別人のようだとからかわれていた。

二

屋敷の門前から五町ほど進めば竹屋の渡しがある。それは隅田川対岸の山谷堀口と三囲神社の大鳥居前までを結んでいる渡し船であった。

その名は山谷堀側にある竹屋という船宿に由来したが、花見の季節になると普段はあまり人の気配がない向島一帯も賑やかになってくる。
およしが門前を掃き掃除していたとき、
「喧嘩だあ」
「人殺しだあ」
騒ぎと共に大勢の悲鳴があがった。
およしと共に邸内を掃いていた弥三郎もその騒ぎを聞きつけ老人とも思えぬ速さで飛びだした。
およしも思わず箒を持ったまま小走りで後を追った。
船着き場の付近で酒に酔った体の侍二人がすでに抜き身を振りかざしており、本身から血が滴っている。
すでに誰かが斬られたようだ。
「一人も二人も同じ事。武士を舐めるとどうなるか教えてくれるわ」
そう怒鳴りながら男が刀を振り回した。
弥三郎は隣にいた商人に、
「どうなされた」

と小声で問うた。
「へい。船賃を払うとか払わないとかで揉めだたけでなく舟に同乗の女衆に悪さをしようとして咎められたのを怒ったらしいです。
同乗の客が切られ、二人は大川へ放り出されたとかでいま助けているところのようです」
と震えながら教えてくれた。
弥三郎は追いついたおよしに、
「およしさん、その箒を貸しておくれ」
と手にしてつかつかと二人の侍に近づいたために周りから悲鳴があがった。
「なんだジジイ、なにか文句があるか」
「中村、ついでだ、こいつも殺ってしまえ」
赤い顔をした男と返り血を浴びた男二人が躊躇もせずに弥三郎に斬りかかった。
思わずおよしは悲鳴をあげて目を瞑ったが、
弥三郎は竹箒の柄の先でひとりの喉を破りつつ飛び上がり、二人目の男の足を払って転倒させた刹那、鳩尾を突いた。
「ぎゃあ」

「うわわ」
と声を上げ二人はあっけなく悶絶していた。
その時、数人の男たちによって大川に落とされた二人が引き上げられたが水を飲んでいるようだった。
「およしさん、斬られた六人を回りの人たちに手伝って貰い、屋敷に運び込み笙船先生に治療を願え」
と叫びつつ、水から上がった二人に近づいた。
およしは袖に忍ばせていた手ぬぐいを数本縦に裂き、出血している人たちの手足の血止めをしつつ、
「お願いでございます。そこの松平春貞の屋敷までお運び願えませんか」
回りにいた数十人たちに声をかけ、手際よく運んでいった。

溺れたうち若い男は苦しそうに噎せたものの意識を取り戻したが、女の方は仰向けにさせて胸を押すと少し水を吐いたが意識が無かった。
弥三郎は女の顔を横にしてさらに胸部を強く圧迫し、気道を塞がないように注意をしつつ口から息を吹き込むことを続けた。

四半時もしたとき女は呻いて意識を回復したものの体は水浸しで体温も下がっていた。
そのとき屋敷から格左衛門、万之助、留吉らが戸板などを持ち駆けつけてきた。
一方斬られた者はすでに屋敷内に運び込まれていた。
やっと誰が知らせたか八丁堀の役人らが駆けつけてきたが、気絶している二人の侍に縄をかけ引き立てていった。
うち一人の岡っ引きは春貞の屋敷を知っているようで、
「ありがとうございました。後で旦那方がお屋敷に伺い怪我人の身元などを調べますのでよろしくお願いします」
と頭を下げて去って行った。
弥三郎たちが急ぎ八人を屋敷内に運び込むと春貞が、
「様子がわからんから取り急ぎ皆道場内に運び込め」
と指示した。
道場内にはすでに薄縁が敷かれ、斬られた六人が寝かされ笙船が孤軍奮闘していた。
「斬られたのはこれで全てか」

小川笙船の声が響くとおよしがすかさず、
「八人のうち斬られたのは六人で後の二人は溺れて水を飲んでます、先生」
と答えた。
「およしさん、焼酎と晒しを頼む。晒しがなければ手ぬぐいでも良い、皆で斬られた者の血止めをやってくれぬか。それから留吉さん、おるか」
笙船の声に、
「ここにおります」
留吉が答えると笙船は溺れた二人に処置を施しつつ、
「済まぬが傷口を縫わなければならぬ者がおる。養生所まで走り、村山先生を連れて来て下され。手術の道具も忘れずにな」
「承知」
そう答えた留吉は屋敷を飛び出して行った。
「先生、およしさんが現場で血止めをしたそうで、出血は多くないようですが、腹を刺されている者が気がかりです」
万之助が叫ぶと、
「よし、わしが見てみよう。こちらの溺れた二人は横向けのまま寝かせてくれ。

仰向けにしないようにな」
「わかりました」
「先生湯が湧きましてございます」
「おお、ありがたい。水を飲んだ二人の体は早く乾かしたい。手分けして着替えさせてくれ」
「承知しました」
意識が回復しつつ朦朧と咳き込んでいる女の方は秋子と奈美が担いで道場に続く控えの部屋に連れて行った。
さすがに大勢の前で女の裸をさらすのは憚れたからだ。
一方男の方は格左衛門と弥三郎で手際よく体を拭き、幸江が用意した袷に着替えさせて横に寝かせた。
問題は斬られた六人だった。
一応の血止めはしたものの、暴漢を取り押さえようとしたのか男二人が腕をかなり深く斬られて呻いているし別の男二人は足を斬られ、渡し舟に乗っていたという年増の女が肩を斬られて気絶していた。
また腹を刺された商人風の男は見るからに死が迫っているように思えた。

「残念だが、いまここで処置できることは知れておる。しかしできることはやらねばならぬ。
およしさん、焼酎を口に含み、六人の傷口に吹きかけ消毒してくだされ。男たちは患者が動かぬように押さえ込むのじゃ。よいか」
「わかりました」
万之助、格左衛門、弥三郎そして春貞までもが傷口を露出させ動かぬように押さえ込む中、気丈にもおよしは焼酎を次々に傷口へ吹きかけていった。
「ぎゃあ」
それぞれの悲鳴があがり、血が混ざった焼酎が飛び散り道場は修羅場と化した。
「先生、消毒が終わりました」
「よし。晒で取り急ぎ傷口を覆っておけ。縫わなければならぬ傷は四人ほどじゃがこれは道具がなければどうにもならぬ。とにかく手足の傷は心の臓に近い場所を縛り血止めに注意を向けてくれ、およしさん」
「承知しました」
半時ほど過ぎた頃、小石川養生所の外科医村山元格が駆けつけてきた。
村山元格は道場の式台の前で、

「これは…」
と絶句した。
「村山先生、挨拶は後じゃ。こちらの二人はわしが縫う。道具をな、貸してくだされ。そしてそちらの二人は傷も深いようじゃから先生にお頼みしたい」
笙船は村山元格と視線を合わせて頷いた。
「よし、どなたか手伝ってくれませぬか」
村山元格がいうと真っ先におよしが、
「お手伝いさせてください」
と声を上げた。
「ふむ。あなたは血を見ても大丈夫のようじゃな。それは助かる」
およしは綺麗な晒を太めに巻いて裂き、それをそれぞれの患者の口に咥えさせ、
「少しの間ですから辛抱してくださいね」
と声をかけた。
隣の小川笙船が元格に視線を送ってにやりとした。
半時の後に斬られた六人の処置が終わった。
「村山先生、助かりましたぞ」

笙船がそう元格に声をかけると、
「いやはや、およしさんと言われたな。気丈なので助かりましたぞ」
と笑顔を向けた。
笙船は、
「春さん、相談じゃがのう。向こうの溺れた二人はこれから再診するが、ここに寝かせておくわけにもいかん。どうじゃろう、男女別に寝かせる部屋はあるかのう」
心配そうに問うた。
「先生、母屋なら三部屋ほど空いてますが慌ただしいでしょう。いつまでもということではないでしょうから我々の離れを一時的に診療所としてお使い下さい。俺たち夫婦と理子は母屋で過ごしますでな。母屋には先生も母上もおりますしな」
春貞がそういうと幸江も、
「そういたしましょう先生」
と同意し、理子は、
「わっ、それなら理子は婆様と一緒に寝られますね母上」

と喜んだ。

早速春貞たちが暮らす離れが病棟となった。部屋も四部屋あるので男女を分け、一室は診察や薬の調合などに使うことになった。

寝かされた者は男が六人で女が二人だったが、全員意識はあったものの腹を刺された男は重傷だった。

およしは意識がある内にと男部屋と女部屋を回って名と住所を聞き出していた。

「春さんや、およしさんは物怖じしないばかりか血を見ても平気じゃ。気も回る。医者の助手に向いているかも知れんぞ」

と笙船が呟いた。

「そうですか。およしは多くを語りませぬが、それなりに修羅場を多々見てきたはずですから肝が据わっているのかも知れませぬな」

春貞はそう答えた。
夕闇が迫った頃、南町奉行所常廻り同心の伊丹鉄太郎が定吉親分を連れてやってきた。
笙船は治療の目処をつけ村山元格と共に母屋の居間に春貞らと座していた。
「春さん、世話をかけた。しかし笙船先生がおられたおかげで多くの命が助かりました」
鉄太郎は春貞と小川笙船に頭を下げた。
「斬られたり溺れた者たちの身元は分かっているそうですな。どんな具合で…」
鉄太郎の問いに村山元格は、
「万一のことがあると所在など不明になるからとこちらのおよしさんが全員に名と所在などを聞き取ってくれましたので分かっております。しかし腹を刺された男は今夜が峠となりそうで危ないですな」
そう言いながらおよしが書き取った奉書を鉄太郎に差し出した。
「そうですか。死人が出るとなると奴らの罪もより重くなりますな。無論八人もの怪我人を出した奴らですからただでは済みませんがな」
「伊丹さん、渡し賃で揉めたと聞いたが」

春貞が問うと鉄太郎は、
「それもあったらしいが、酒癖が悪い奴らで舟の上で同乗していた女に悪戯をしようとして咎められたのが暴れた切っ掛けのようだ。どうしようもない奴らよ。いま調べているが、どうやら素性の良くない町道場に出入りしている奴ららしいがな」
憮然としながら言い切った。
そのとき村山元格が、
「犯人はお奉行所にお任せするとしていまひとつ問題がございます、春さん」
と口を開いた。
「ふうむ」
「あの八人ですが少なくとも斬られた六人は今日明日に動かしては容体に問題がでます。しかしそれはそれとしていま養生所に入所枠がまったくないのです。ご承知の通りお上より入所人数は決められておりますし、現在も入所待ちの者が七十名ほどいるありさまでして…」
村山元格は申し訳ないといった顔で頭を下げた。
「となると養生所に運び込むのは無理ということか」

伊丹鉄太郎もため息をついた。
そのとき沙代が亜耶と共に茶と菓子を運んできた。
「まあまあ、伊丹さま。ため息などおつきになっていかがされましたか」
鉄太郎がその理由を簡単に説明すると沙代は春貞の前に座し、
「春どの。まさか生き死にの境にいる方々を放り出せるわけもございますまい。取り急ぎ八人の方はしばらくお預かりするとして幸いわが屋敷には笙船先生がいらっしゃいますし、これは婆の思いつきでございますがな、近々使用人たちの住居の横にでも診療所を作りましょうぞ」
と凜として言い切った。
「……」
「重ねて申しますが笙船先生がいらっしゃるのは正しく天の配剤。前々から思っていたことですが、この地域に残念ながらお医師がおりませぬ。今回のような騒ぎはともかく人助けになることは間違いございませぬぞ」
沙代は珍しく強い語調で持論を述べた。
格左衛門が腕を組みながら、
「それはよろしいですが金も人も必要ですな」

と言ったが当の小川笙船は無言だ。
「春どの。幸いわが屋敷は生計に不安はございませぬし田宮さまが日々蓄財と金の出入りを管理してくれています。
これは大げさでなくこの婆の遺言と思って聞いてくだされ。
お金を貯めていたところで何になりましょうや。
わが屋敷の一同が暮らしていけるだけのものがあれば後はおのれたちで稼げばよいし、事実格左と万之助どの、夏穂さんが出稽古で稼いでおいでです。また畑からの収入も増えておりましょう。
春どの。あなたの良き所はとことん人の為に働かれるところではありませなんだか。
常々あなたが申す通り、小石川養生所があったればこそ、小川笙船さまというお方があったればこその春どのの人生。
であるなら金は使ったらよろしいではありませんか。
それが地域の人たちの為になるならこれほど有意義な使い方はございますまい」
沙代は冷めた茶で喉を潤して続けた。
「先般、上様がお見えになったおりにわが屋敷周りの土地を大幅に広げてくださ

いました。
その土地もなにかに使わなければご奉公には成りますまい。
小規模でも良いですから診療所を建て畑も広げるべきと思いますがな」
それまで黙って聞いていた春貞は笑みを浮かべながら、
「母上のお言葉、身にしみてありがたく受け止めまする。しかし、さてさてどのように手を着けたら良いのやら。
ともあれ一番の大事は笙船先生のご意志でありまするな」
と思案顔をした。
それまで無言でいた小川笙船がおもむろに、
「ご一同。わしを頼りにしてくれるのは嬉しいし一度は庵に閉じこもって風流三昧に暮らそうとしてみたが、娑婆の風が恋しくてこうして厄介になっておる。
それに医者が長逗留させてもらうのであればできる恩返しはひとつしかあるまいよ…。
大奥さまが申す通り、許されるものなら残りの人生、俳句を捻りつつまた医療に力を注ぐのも良いかも知れぬ。
ただしわしも歳じゃ。昔ほど大規模なことは出来ぬ故、できるだけ入居者は取ら

ず通いの文字通りの診療所にしてもらえんかのう」
と、一同を見回しながらそう提案した。
春貞は無言で頷いている。
「しかし、この屋敷は…貴方たちはなんという人たちなんだ」
静かに耳を傾けていた伊丹鉄太郎が感心とも呆れたともとれる声を発した。
側で一部始終を聞いていた定吉は感激し涙ながらも、
「ではあの八人は在所に帰れるまではこちらでお預かりいただけますので」
と問うた。
「まあ、仕方あるめいな」
春貞は幸江と顔を見合わせて笑った。
そのとき、およしが駆け込んできた。
「先生、刺し傷の為三さんが苦しみ始めました」
「よし、すぐにまいる」
笙船は腰を上げながらも落ち着いた声でいった。
しかし笙船らの努力も虚しく、浅草の乾物問屋の手代だという為三はその日の未明に亡くなった。

そんな騒ぎがあったことで春貞たちに花見の余裕はなかったが、早くも馴染みの棟梁勝五郎たちの威勢の良い姿が行き来するようになった。
新しい診療所を建てるためである。
設計は小川笙船が嬉々として考えたものだ。
基本的に入所患者は扱わないものの、今回のような場合に対処できるようにと男女別に二つの部屋、そして診療部屋と待合部屋、薬や道具類を置く部屋、そして小さな居間といった具合の設計だった。
棟上げの日、山田浅右衛門の息子である源蔵が角樽を下げてやってきた。
春貞と挨拶を交わした後、
「今日は診療所の棟上げと伺いましたので形ばかりのお祝いです」
と角樽を差し出し、
「お忙しいところ恐縮ですが、笙船先生に少しお時間をいただけましょうかな」
と聞いた。
「なにかお具合でもよろしくありませんかな」
春貞が問うと源蔵は、
「いや、俳句について笙船先生にご教授いただきたいことがございましてな」

と照れた。

源蔵は父山田浅右衛門の跡継ぎとして御様御用（おためしごよう）のお役目を始めたが、罪人が斬首される際に辞世の句を詠む事があってもそれを理解する素養がなく書き写すことさえできないことを恥じた。

勿論、辞世を読み解くのは浅右衛門達の役目ではないが、自分たちの手で命を失う囚人に無礼であろうと思い俳句を習うことを決意し、たまたま春貞の屋敷で出会った小川笙船に師匠となる俳人を紹介して欲しいと願った。

結果山田源蔵、後の三代目山田浅右衛門吉継は俳号を持った最初の浅右衛門となったのである。

先走るが吉継の辞世の句だが「一ふりの枕刀や時鳥（ほととぎす）」という句が石碑に刻まれている。

「そうでしたか。それならいま笙船先生は棟上げの準備にと敷地の奥におりますのでお呼びしましょうぞ」

春貞がというと源蔵は恐縮し、

「いや、お許しいただければそれがしがそちらに向かいましょう」

と願った。
山田源蔵が診療所の棟上げの場所に近づくと棟梁勝五郎が広げた図面を笙船とおよしの二人が覗き込んでいるのが見えた。
源蔵に気がついた笙船は顔をほころばし、
「源蔵さんお一人のようじゃが、だとすると俳句のことじゃな」
と声をかけた。
「ご多用の所恐縮ですがご教授いただきたいことがございましてな」
「ほう。しかしここは埃っぽいで、わしの部屋に行こうかのう」
笙船が言うと、
「図面をご覧になっていたようですが先生がおられないと事が進まないのではありませんかな」
と源蔵が心配した。
笙船は、
「いやちょうどわしの出番は一区切りついたところじゃ、あとはおよしに願っておいたで旨く話しを進めてくれるじゃろうて」
そう言いながら源蔵と肩を並べて母屋に向かった。

実は先の騒動でおよしが怪我人の傷や血を見ても動揺せず冷静沈着なのを身をもって知った小川笙船は春貞に診療所における自分の助手として勤めてもらいたいと願ったのだ。

「ほう。確かにいくらなんでも先生お一人ではお困りだと考えておったのですが、およしがお役に立つなら是非よろしくお教え下さい」

春貞は頭を下げた。

「春さんが頭をさげることではないじゃろうが」

笙船が笑うと春貞は、

「いや、お陰様でおよしの労咳は完治しましたが物心ついてからこの方、知っておるのは吉原でしかないおよしです。

己自身、自分には世間の常識どころか炊事洗濯もできぬと常々落胆しておったのです。

もし先生の助手となり、多少なりともお役に立つなら他ならぬおよし自身が喜び、自信を持つに違いないと思いましてな」

春貞と笙船は頷きあって破顔した。

そのとき、

「ごめんくださいまし」
と門前に声がした。
およしが取次に出ると、
「手前は浅草で乾物問屋を営んでおります前田屋福治郎と申します。先般こちらさまで手前どもの手代がいたくお世話になりましたので、遅ればせながら御礼に参りました。笙船先生はご在宅でございましょうや」
五十になろうとする歳で恰幅がよく、いかにも人の良さそうな男が小僧一人を連れて頭を下げた。
およしから話しを聞いた春貞は、自分が出て行くより笙船に直接会ってもらった方が良いと判断し、
「先生。怪我人の処置をしたのは笙船先生とおよしです。俺がしゃしゃり出るより直接先生にお会いいただいた方がよろしいでしょう。源蔵どのには申し訳ないが少し待っていただきましょうぞ」
と指示した。
すぐに前田屋福治郎は客間に通され小川笙船と対面したが、そこへおよしが茶を運んで来た。

「およし、お前もここへお座り」
笙船の命でおよしも座した。
挨拶が終わり、福治郎が顔を上げたとき笙船は、
「おや、もしかしたら前田屋さんとは小石川養生所で一度会ったことがあったかのう」
と破顔した。
「はい。覚えていただき恐縮でございます。二三度お買い付けいただきました品をお持ちしたことがございます」
前田屋福治郎は嬉しそうに答えた。
「なるほど、残念だったがあの為三さんは前田屋さんの使用人だったか」
「はい。大番頭の命で出かけた矢先でございました。
結果はどうあれ、お役人様からこちらでいたく親身になりお世話をいただいたと聞き及びまして。葬儀も片付きましたので御礼に伺いましてございます。
先生、これは失礼ながら心ばかりの御礼、是非是非お受け取りいただきとうございます」
前田屋福治郎はそう言いながら小僧から風呂敷包みを受け取り笙船とおよしの前

に広げた。
それは桐箱の菓子折りと二十五両の切り餅二つだった。
およしは驚きの顔で思わず笙船を見た。
笙船は意外にも破顔し、
「これはこれはありがたいことです。
実は向こうの土地にな、医者にかかれぬような人たち向けに診療所を建てるところなのじゃ。
分限者の前田屋さんのご行為、ありがたくその費えに使わせてもらいましょうぞ」
と答えた。

前田屋福治郎が帰って行った後、笙船は春貞や幸江と対面していた。
「春さんや、養生所時代のわしならこうした金は突き返しておったがな。そもそも養生所は承知のように町奉行所の管轄じゃ。下手に金品を受ければ袖の下となる。しかし今ではわしは居候じゃ。いやいや、冗談だがな。
ここは春さん、お前さんの屋敷だ。

診療所となればかなりの出費となるでな。
したがってな、払える者からはいただきましょうぞ。その分貧しき者たちに奉仕できればよいと考えてな、前田屋から受け取ったのじゃ。納めてくれんかのう」
笙船はそう言いながら五十両の金子を春貞に向けた。
春貞は頷きながら、
「ありがたく使わせていただきます先生。およし、この金子をな田宮助左衛門に事情を話して渡してくれ」
と命じた。
助左衛門の離れから戻ったおよしを春貞と笙船が待っていた。
「およし、あらためてお前に願うことがある。
まずはそこに座れ」
春貞が改まって言うと何ごとかとおよしは緊張気味に座した。
「聞いての通り、向こうの土地に通院の患者を診る診療所を建てることにした。
勿論お医師は笙船先生だ。
そこでだが、およしに笙船先生の助手を願いたいのだがどうだ、やってくれまいか」

春貞が笑顔でいうとおよしの表情がぱあっと明るくなった。
「あ、ありがとうございます。私でお役に立つものでしょうか」
と聞いた。
「先般の騒動でもな、およしさんは怪我人の血を見ても気丈に立ち振る舞っておった。
村山先生も褒めておったではないか。
また運び込まれた者たちの名や住所を聞き取るなど大切なことに気がつくお前さんだからこそのお役目だと思ってな、春さんにわしから願ったことなのだ」
笙船も破顔してそう説明した。
「多大なご親切を身に受けながら何もできない私でしたが、もしお手伝いできることなら是非是非やらせてください。
笙船先生の邪魔にならぬよう頑張ります」
およしは両手を突いて頭を下げた。
「よし決まった。およし、助手に留まらずにな、女医者になれるよう励むことぞ」
春貞が喜んだ。

笙船の助手は決まったが、診療所開設となれば建物だけの準備で済むはずもなかった。

医療器具、着衣、薬品類は勿論、それらを整然と収納できる場所や道具も多々必要となる。

春貞は笙船が書き付けたそうした物品の買い付けを田宮助左衛門に命じた。

「中途半端な知識しか無い俺が中に入るとややこしいことになるやも知れぬ。でな、苦労を掛けるがお主と先生で直接細かな点はよく話し合い、必要なものを揃えてくれ。

薬にしろ道具にしろ笙船先生が使うものだから良いものを選んでくれ。そして買い付ける御店選びも頼んだぞ」

春貞は助右衛門に商人達との交渉をすべて任せた。

翌日から助左衛門の離れには商人たちが行き来する姿が目立つようになった。

そして笙船自身は武蔵国金沢瀬﨑（せがさき）村（現・横浜市金沢区）の己の庵にある幾多の医に関する書物を送ってくれるよう、管理保管を頼んでいる村役に文を書いた。

一

六月中旬、診療所も形になり竣工式の日取りを決めなくてはと慌ただしい日に突然八代将軍吉宗が十数の騎馬を引き連れて屋敷に現れた。
勝手知ったる客間の上座にどかりと座した吉宗は悲壮な表情をしていた。
「春貞。今日は願いがあってやってきた…」
挨拶も済まないままに吉宗は春貞に言った。
「ははっ。なんなりと」
平伏をした春貞はそう答えたが、間怠っこしいと思ったのか吉宗は座を立ち春貞の前に座り直した。
「どうやらまずいことになりそうじゃ。いや、宗春のことよ」
そう言ったきり吉宗はしばし無言で俯いていたが、

「春貞。お主には不本意のことかと思うがな、急ぎ宗春に会い、あやつの真意を問うと共に己の責務をしかと考えるように諭してはくれぬか。
奴はいま江戸藩邸上屋敷におるでな」
と早口で言った。
「はっ、ご無礼ながらなにかございましたので」
春貞が静かに問うた。
吉宗が話し出したことは確かに一大事であった。
六月に入りすでに宗春は参勤のために江戸入りしているというが、その留守を狙い御附家老竹腰正武を始めとする重臣たちが宗春の失脚を画策したのだという。
竹腰らはすでに尾張藩の実権を握り、宗春の藩主時代に下した命令をすべて無効とし、宗春藩主就任前の状態に戻すとの宣言を発したらしい。
これは吉宗の側近である老中松平乗邑主導で進められたことという。
為にいま尾張藩は大混乱となっており、宗春の去就次第では御三家筆頭格の尾張藩とは言え穏便に済ますわけにはいかなくなってしまうと吉宗は苦慮していたのだった。
「宗春はご公儀による度々の注意叱責を無視し、時には上様の治世を批判までし

ておりましたが、相変わらずでしたか」
春貞も次の言葉が出ずに黙り込んだ。
「余がどう思うかといったことはこの際どうでもよいのじゃ。
前にも申した通り余はあやつの能力を買ってはいるが…」
「しかし、やり過ぎましたな。いや、やり方が拙かったですな」
「そちもそう思うか。
あやつが掲げる民を幸せに…という目標は誰にも異存はあるまいが、問題はそのやり方よ。
幕府には幕府の威信があり面目もあるでな」
「御意。宗春が当屋敷に来たときも尾張とて大海の中の金魚鉢であり、大海が上様のおかげを持ちまして静かに納まっているからこその金魚鉢であり尾張であると諭しましたが無駄でしたかな」
「残念よのう。そこでじゃ、最後の通告になるやも知れぬがこの際老中共が出向いたところで奴の方にも面目があろう。したがってやすやすと矛先を曲げるわけにもいくまい。
しかしそちであれば聞く耳を持つであろうと思ってな」

吉宗は苦渋の表情で春貞を見つめた。
「宗春はともかく、それがしにはご承知のように寵臣たちとの確執がございます。この混乱に乗じてそれがしの命を奪おうとする輩がいるかも知れませんが…」
春貞が言い終わらぬうちに吉宗は、
「万一そのような者があれば誰彼かまわず躊躇なく斬り捨てい。余が許す」
と言い切った。

それから二日後の朝、春貞は正装して尾張藩上屋敷へと急いだ。供は米道格左衛門と堀田万之助だった。
尾張藩上屋敷は妻幸江の実父で当時江戸家老だった永井主水に会いに度々出向いた場所ではあったが、懐かしさを感じている余裕はなかった。
「春さん、素直に宗春さまは会いますかな」
格左衛門は首を傾げた。
「本人は拒まないと思うが、周りの連中如何だろうな」
春貞も会えるという確信は持てなかった。

万之助が、
「力尽くで押し通るわけにもいきませぬしな」
というと春貞も、
「そうよ、まさか上屋敷の数百人と斬り合いするわけにもいくまい」
と苦笑した。
上屋敷の開き門の前で春貞は、
「松平春貞、上意により徳川宗春どのに面会にまいった。開門せよ」
そう大声を出した。
しばらくすると門が開き、そこには十数人の武士達が並んでいたがうち二人が一歩前に出て春貞らに頭を下げた。
「おお、そなたらは大道寺五郎と中尾虎吉ではないか。一別以来だが立派になったな」
春貞が破顔すると。
「十年ぶりになりまするか。その切はお世話になり申した。早速それがしたちがご案内いたしますのでどうぞこちらへ」
大道寺五郎が先導して広大な敷地内を進んでいった。

格左衛門が、
「どうですかな、腕をあげられましたかな」
一時、春江館で稽古を付けていたからと声をかけると大道寺五郎は悲しそうに無言で首を横に振った。
広大な敷地の奥へと春貞らが連れて行かれた眼前には見馴れない建物があった。
「ここに宗春がおるのか」
春貞は意外だという顔で問うた。
それは藩主が落ち着く場所としてはとても狭く、庵かお堂といった趣の小さな建物だったからだ。
「はい。それがしたちは中に入ったことはございませんが、殿はこちらにお籠もりになり、日々祈られておると聞かされております」
中尾虎吉が寂しそうに呟き、閉まっている扉を軽く叩いた後、
「殿、松平春貞さまとお伴の方お二人をお連れいたしました」
と声を上げると、
「まいられたか。こちらへ」
聞き慣れた宗春の声が聞こえ扉が開いた。

促されるままに薄暗い部屋へ入るとそこには琉球畳が敷かれ、正面には祭壇が設けられ火が焚かれていた。
そこが祈祷の場所であることは明白だった。
「春貞どの、お久しぶりですな」
眼前に座っていた宗春の声はあくまで平静だったが、その顔は些かやつれていた。
米道格左衛門と堀田万之助は周囲に気を配りながら春貞の左右一間ほど後ろに座したが周囲に殺気は感じられなかった。
「殿、おやつれになられましたな」
春貞が静かに言うと、
「春貞どの。お手前が『尾張とて大海の中の金魚鉢』と申された意味がよく分かり申した。
いまや余にできることはこうして鎮護国家の祈願をすることしかできませんのじゃ。寵臣たちも離れていったでな」
宗春は寂しそうに呟いた。
「御附家老の謀反はともかくあの星野織部はいかがされましたか。

殿のご寵愛を一身に受けておりましたが」
春貞が話しを向けると、
「隠居願いを申し出たそうな…」
宗春がぽつりと言った。
「何と不甲斐なき役立たずの男よ。こうしたときこそ寵臣として殿の盾となり働かなければならない立場と存じますがな」
春貞が思わず口に出した。
宗春は、織部を藩の重臣らに対抗できる片腕として五千石の家老格にまで引き上げた。しかし、所詮は寵臣でしかなく、権謀渦巻く藩政の中では非力であり、世間知らずであった。
歴史にもしもは禁句というが、もし宗春の寵臣星野織部が海千山千の老獪な人物に育っていたなら、もし常々御附家老たちの動向を注視して策を練っていたら、主君追い落としの策謀などには合わなかったに違いない。
「いや、春貞どの。余の藩政が幕府の反感を買うことは百も承知でした。語弊がある物言いですが、幕閣はともかくある意味上様も暖かく見守って下さったと信じております。しかしこうも足元から掬われるとは…是非もない」

「殿。上様とて何もかも思い通りにできるほど幕政は単純ではございますまい。
殿は上様に甘え過ぎましたな。
しかしいまはその話ではございませぬ。
それがしが何故ここにいるかを考えてくだされ。
それがしは上意を持ってこの場におります。
ということは上様のご意志です。
殿のお考え次第、ご発言次第ではことが納まるやも知れませぬ。
失礼ながらこのように神仏を頼りにしている場合ではございますまい」
春貞は諭すように言った。
「余に邪心など毛頭ござらぬ。
余は民がいかにしたら幸せに暮らせることができるか、それだけを考えていました。他のあれこれはどうでも良きこと。
ただし、春貞どの…藩主は飾り物であることを痛感いたしました。
幕府の意のままになる者なら余である必要はないということも痛感いたしました。となれば後は祈ることしかできまい。

そうではありませぬか、春貞どの」
宗春は焚かれている炎を見つめながら淡々と胸中を語った。
「しかし、余は釈明はもとより謝罪の気持ちなど毛頭ありませぬ。
いや、春貞どのにわざわざお越しいただき恐縮なれど事は手遅れ。
であるなら幕政に正面から異を唱えた御三家藩主が一人くらいいても良いではありませぬか、のう春貞どの。
気に食わぬなら余の命を奪うのも良し…。
しかし尾張藩を潰すわけには…いかに老中松平乗邑とていかぬであろう。
またこれ以上余がこの地位にいては朝廷の立場をも危うくする…。
引き時であろう、春貞どの」
と続けた。
しばし無言で座していた春貞は宗春に向かい平伏し、
「おさらばでござる」
その一言を残して立ち上がった。

春貞ら三人が祈祷所を出ると大道寺五郎と中尾虎吉が待っていて頭を下げた。
「春貞さま、殿はいかがでございましたか」
気になるのか恐る恐るといった感じで中尾虎吉が問うた。
「すでにお覚悟が出来ておられた。後は幕府の沙汰如何よなあ。
俺は何の役にもたたんかったは」
「はあ…」
「どうした。如何に混乱の中にあるとはいえ尾張藩の若者がそう覇気のないことでは困るぞ」
春貞がそう叱った。
「空しさを感じまして。
ご覧のように殿の行く末を考えてか、どなたも殿を案じるどころかお声すらかけませぬ。
第一その御身を我らのような若輩者に任せようとすることに正直怒りさえ感じま

す」
大道寺五郎が言い切ったとき、正面に忍び姿の五人が降ってきた。
「何者ぞ。藩邸内において狼藉は許さん」
大道寺五郎が早くも刀を抜いた。
春貞は大道寺五郎を右手で後退させつつ、
「こやつらはそれがしが目的だ、手をだすではないぞ。
格左、万之助、油断するな」
と言いつつ珍しく腰の大刀を抜きはなった。
「これが最後の機会よ春貞。お主のおかげで沢山の仲間が散った。仇を討たしてもらう」
頭目と思われる一人が籠もった声でそう言い切った。
「尾張の忍びは馬鹿者揃いか。幾多の戦いは我らが仕掛けたことではないわ。身の程を知らぬ奴らよ」
覆面装束の五人が春貞ら三人を包囲しつつ右周りに回転し始めた。
春貞たちは動かない。
刹那忍びは二人ひと組になり、格左衛門と万之助へ交差しながら飛びかかり、頭

目はその動きを目くらましとでもするかのように春貞めがけて斬りかかった。
大道寺五郎と中尾虎吉は思わず目をそむけた。
「うぎゃああ」
叫び声で目を向けると忍びの五人は血の海の中で絶命し、頭目の上体は半間ほども吹っ飛んでいた。
しかし春貞ら三人の立ち位置はほとんど変わってはいなかった。
大道寺五郎と中尾虎吉は血ぶりをしつつ、何ごともなかったように進む三人に
「す、すごい」と呟き身震いしながらも頭を下げた。
振り返った春貞は、
「世話をかけた。大道寺五郎、中尾虎吉。落ち着いたらわが屋敷に遊びにこよ」
と笑顔を送った。

二日後、春貞は例によって弥三郎と格左衛門を連れて久しぶりに登城することにした。
過日宗春に会った際の報告を吉宗にするためだ。
徳川紋を染め抜いた裃で正装した三人だが、今回春貞は屋敷から乗物を使って江

戸城まで進むことにした。
「登城は久しぶりですな春さん」
格左衛門が乗物の中の春貞に声をかけた。
「そうだな。喜び勇んで向かう場所ではないがこれまたお役目だ。なあとっつあん」
「さようですな。何度足を向けても思い女が待っている場所に行くのとは訳が違いますなあ」
弥三郎も減らず口をたたいた。
「ほう。とっつあんでも思い女がいるのかい」
春貞が問うと、
「こりゃあ、わっしとしたことが失言でしたな。まあ昔のことですよ」
弥三郎が苦笑した。
江戸城は相変わらず厳重な警備だったが、さすがに何度か登城を重ねてきたこともあり、中雀門に至るまでは乗物から降ろされることはなく三人は白書院へと通された。
四半時ほど待っていると大股で将軍吉宗が入ってきた。

「春貞、大儀である。例のことだろうな」
そう言いながら座した。
「御意」
平伏を解いた春貞は宗春と直接会った際のことを淡々と報告した。
しばらく春貞の話しに無言で耳を傾けていた吉宗は、
「そうか。宗春は腹をくくったか」
と呟いたが春貞は、
「上様。大変僭越なことではございますが、宗春のご処置、どのようなことになりましょうや」
思わず口に出した。
「さあてな。こればかりは征夷大将軍の余でも横車は押せぬ。重臣達が御定法に則った裁きをするであろうが、事は御三家筆頭格だ。簡単には決まらぬであろうよなあ…。
また余自身が表にしゃしゃり出ては個人的な確執と世間は騒ぐであろうゆえ、策も必要なのだ春貞」
吉宗も苦渋の決断をしなければならない覚悟はあってもまだ迷っていた。

「上様」
「うむ」
「お叱りを覚悟で申し上げたき議がございます」
「申してみよ」
「宗春は、いや宗春様はお上より多々叱咤や責問があったにも関わらずこうした結果となりましたこと、言い訳もできまいと存じます。
しかし二人の御附家老の宗春様への仕打ちは見方を変えれば主君を裏切った反逆とも受け取れまする。
だからと申す訳ではございませんし、それがしごときが口を出すことが許されることではございますまいが、是非是非宗春の命だけはお助けくださいませ」
春貞は吉宗を睨みつけるように言い切った。
「春貞どの、その物言いはご無礼であろう」
控えていた目付が初めて声を上げた。
「だまらっしゃい。それがしは畏れ多くも上様にお願い申し上げたこと。お主こそお役目を弁えろ」
春貞は声を荒げた。

「まあまあ、両名とも待て。いいか、ここだけの話しぞ」
そう言いながら吉宗は少し声を落とし、
「余自身も春貞、お主と同じことを感じたことは確かじゃ。主従の絆は大切。しかしことは御三家筆頭格である尾張藩の命運がかっているだけでなく余の治世の是非がかかっていることじゃ。
御三家だからというて甘い沙汰で済ませるわけにも行かぬだろうし、御附家老たちの行為を咎めてはそれこそ御附家老の存在、何の為の御附家老かというだけでなく幕政のあり方が問われてしまうのじゃ。
これが常々余が言う御政道というものよ春貞。
それにな、宗春にはこれまでに幾たびも軌道修正の機会を与えてきた。
無念ではあるがこれまでじゃ。
しかし余はいまでも彼奴が好きぞ。命まで取るつもりはない」
「ははっ」
春貞は平伏するしかなかった。
「大儀であった」
その一言を残して吉宗は退席し白書院から姿を消した。

帰り道も春貞は乗物に乗った。
「しかし春さん、上様も私心と御政道の狭間で苦悩されておるんですな」
弥三郎がぽつりと言った。
「そうよなあ。それを少しでも宗春が理解しておれば今回の不幸は避けられたかも知れん」
春貞が乗物の中から呟くと格左衛門も、
「そもそも御附家老という存在をしっかりと把握しておかなかったことが一番の失策ですな。きっと宗春様は家老たちより寵臣らと話しを進めて藩政をお進めになっていたように思いますな」
と言った。
春貞は、
「そういうことだ。要は藩主といえども重要な事を取り決め実行するためには根回しが必要なのだ。
俺はそうしたあれこれが嫌で御連枝を飛び出したが、宗春はやはり周囲が見えていなかったことに尽きるな。残念な事よ」
しばらく沈思した後、

「それにしても問題の根源がすべて宗春にあることは明白としてもだ、見方を変えれば、御附家老も星野織部も主君を売ったことになる。何とも気に食わんな」
と続けた。
弥三郎が、
「そうですな。幕府からの付家老、お目付け役という立場からすれば、上様というか幕閣らの意向に沿った正当な働きと褒められ、もしかすると褒美までいただけるかと思いますが、どうにも後味は悪いですな。
また寵臣の織部殿も宗春様を最後まで庇って腹切るほどの気概を見せて欲しかったですな。
即刻己の保身をと隠居願いするなど、やはり気に入りませんぞ」
と表情を曇らせた。
「確か、御附家老竹腰正武は実弟が幕府中枢にいるという。そうであればその実弟が老中松平乗邑との連携で画策し兄の竹腰正武を動かしたのかも知れん」
春貞も思っていたことを吐きだした。
「しかし、春さん。宗春様あるいは尾張への沙汰はいったいどういったことになるのでしょうかな」

格左衛門が心配そうに呟いた。
「そうよなあ。俺たちも尾張とは縁がある…縁があったわけだから気になるよなあ。どうだとっつあんの意見は」
と春貞は弥三郎に話を振った。
「わっしごときにこの先が分かるお話しではございませんぜ春さん。ただしまさか宗春様にお腹を召せといったことはないと思いますがな。また尾張藩そのものは藩主を代えて存続を図るに違いありません」
弥三郎が言うと、
「やはり藩主の首をすげ替えて安泰を図るということになるのかな」
春貞も乗物の中で腕を組んだ。
「あくまで宗春様の個人的な行状許しがたしといったことで事を収められるのではないでしょうかな」
弥三郎がいうと春貞は、
「ということはそれだけ宗春への沙汰は厳しい物とならざるを得まいな」
と呟いた。
思い出したように弥三郎が、

「春さん、過日宗春様にお会いした後で忍びに待ちぶせされたと聞きましたが、そちらの方も…尾張との戦いもこれで終息ですかな」
と問うた。
春貞は、
「そうありたいものよなあ。
首謀者が宗春の寵臣星野織部だとするなら奴も隠居願いを出して受理されたというから、まさかこれからは忍びを動かすわけにもいかないだろうよ」
そう言いながら思わずため息をついた。
格左衛門も、
「春さん、あのとき頭目らしき奴が『これが最後の機会』とかほざいてましたので、これっきりではありませんかな」
と期待を込めて言った。
しかし尾張の行く末はもとより、春貞がいかに宗春のことを心配したところでこれ以上春貞にできることは無かったし、急ぎ幕府からの沙汰もなく月日が流れていった。

一

夏の日射しが弱まった頃、普請を進めていた診療所が開所の運びとなった。
ただし診療所に来る人々に母屋や道場への道を通させるのは憚れるということで新たに三囲神社側から診療所への近道を作った。
それなら例えば竹屋の渡しを利用してやってくる人たちにも分かりやすいというおよしの案を春貞が支持したからだった。
小川笙船は新しい診療所で真新しい医療器具や薬草類に囲まれ現役時代と見紛うほど元気だった。
「笙船先生、仰せの医療器具やらは日本橋の駸々堂から、そしてお薬は薬種問屋蓬莱屋から取り寄せましたが、不足不備がございましたらお申し付けくだされ。
そういえば蓬莱屋のご隠居活太郎さまが『孫のなみが春江館でお世話になってい

ますがまさかお薬のお取引先になられるとは』と感激され『どのようなことでもお申し付けください』とのご伝言をいただきました」
田宮助左衛門が書き付けた一覧と照らし合わせて確認しながら笙船に報告した。
「いやはや、ありがたいことじゃ。
養生所よりずっと新しい最新の医療道具を整えてもらい、なにやら開業時の思いが宿ってきたようじゃ」
と破顔した。
およしが近づき、
「先生、お薬類の分類ができましたが一度お確かめいただきとうございます」
と声をかけた。
およしは小袖の上から真っ白な作務衣を羽織っていたがすでに様になっていた。
「おお、早いではないか、助かる」
またまた破顔した笙船はおよしの求めに応じて薬品棚のある部屋へ入っていった。

その日の夕餉どき、一同の顔が揃っていたが、笙船は春貞に、

「春さんや、診療所開所についてじゃが、大事なことを決めておかなければならぬ」
と言った。
「なんでございましょうや、先生」
「この診療所は不特定多数、いわば飛び込んで来た者は誰でも診るという場所のつもりじゃが、診療代はどのように考えたらよいかのう。
前にも少し話したが、単純に誰でも無料ではいささか示しもつかんじゃろうて」
酒を口に運びながら問うた。
「母上の言が切っ掛けとなりました診療所です。僭越な物言いながら小石川養生所が通いの患者を診れなくなったその補いの一端でも担うことができたらと考えてのこと、金を取るわけにはまいりますまい」
春貞がいうと沙代も、
「さようでございますとも」
と即座に頷いた。
しかし笙船は、
「その志は尊いものじゃが、人間という者は複雑でな。タダ、無料というだけだ

と有難味が薄れるだけではなく行為そのものを軽んじる者も出てくるものじゃ。春さんはよく知ってのとおり、あの小石川養生所でさえ開所時には人体実験されるとか薬は安物で効かないなどという噂を信じた者が沢山おったではないか。そこでじゃ。

寸志といえば不遜かも知れぬが、払える者からは受け、払えない者からは取らぬということにしておきましょうかな」

一同を見回しながら言うと皆が頷いた。

「そのさじ加減は先生にお任せするしかございませんので宜しくお願いします」

沙代が願った後で、

「それと笙船先生。診療代はそれとしても先生をただで働かせるわけにはまいりませぬ。

失礼ながらなにがしかの給金をお受け取りいただけませぬか」

沙代が凜とした姿勢で願った。

「ありがたきことじゃ。しかしな大奥さま。わしは生きていけるだけの金はありますのじゃ。ましてやここで衣食住の世話になっておるだけでなく診療という生き甲斐まで与えてもろうておる。

それで十分過ぎるというもの。
お気を使わんでくだされ」
と沙代に頭を下げ、
「ただし、わしがいうのも生意気じゃがな、助手のおよしさんには給金をな考えてくだされ」
そう笙船がいうとおよしが驚き、
「わたしはこれまでのご恩をお返ししたいと思っておりますだけでお給金などとはとんでもないことです。衣食住のお世話になっているだけで十分でございます」
と慌てたが、春貞は、
「およし。笙船先生は特別じゃが、ここではそれぞれの働き、お役目に応じて皆給金を受け取ってもらっておる。したがってお前も同じだ。
先生をお助けしてな、励んでくれ」
そういうとおよしは箱膳を脇に押して両手をついた。
「そういえば先生、もうひとつ懸案がございましたな」
「ふむ」

「診療所の名はいかがしましょうかな。
剣術道場とは違い、分かりやすいように表札などを掲げたいと思いますが、ただ診療所というのではどうも…」
春貞がそういうと、
「それはもう小川笙船診療所に決まりではございませぬか先生」
格左衛門が口を出すと笙船は苦笑いしながら、
「いや、ありがたい申し出じゃが個人の名を出すのはどうもな。
それにそもそも養生所の肝煎りを辞すときにな、大岡様らに強く留意いただいたが、わしは体が動く内に医師の他にやりたいことがあると大風呂敷を広げておる。
そのわしがまたまた医者を始めるというのも正直後ろめたい気持ちもあるのじゃよ。
まあ、その大岡様も寺社奉行になられたからよいが、これまでどおり町奉行であられたら叱られるところよ」
と笑いながら躊躇うと留吉が、
「それなら先生、あの小石川養生所は小石川にあったからの命名ですな。であれ

ばここは向島診療所というのはいかがでしょうか」
と言った。
「うむ。ごろがよいな」
「なるほど」
「よいのではありませぬか」
賛意の声が上がった。
「よし、それでは向島診療所としよう。しかしいつもよいところは留吉に持っていかれるな」
春貞がそういうと留吉と奈美が嬉しそうな顔をした。
翌日、弥三郎が削り出した簡素な板に小川笙船自らが「向島診療所」と書き入れ、診療所の入り口と三囲神社から続く小径の端に掲げることになった。

「向島診療所」の開所は事前に小石川養生所の肝煎、小川隆好らにも知らせたが開所前日には江戸の町に瓦板が出た。
無論読売屋浅太郎の手によるものだが、医師が不在だった向島のこの地にあの小石川養生所初代肝煎だった小川笙船の診療所が開所だということで話題になった。
その浅太郎が摺ったばかりの瓦板を届けに来た。
「浅太郎さん、診療所開所といったネタでは読売は売れまいな」
春貞の磊落な物言いに浅太郎は、
「はい、売れませぬな。
しかしたまには日ごろのご恩をお返ししませんと江戸っ子の恥でございますのでな」
と額を手のひらで叩いた。
「とは言ってもな、患者が来なくても張り合いがないし、来すぎても承知のよう

に医師は笙船先生お一人だ。手が回らぬからそれも困る」
春貞は苦笑いしながら言った。
「そうでもございましょうが、怪我人や病人に日時を決めておいで下さいとはいえませんぜ旦那」
浅太郎が突っ込んだ。
「違えねえ。しかしな、いわゆる商売なら簡単なんだ。高いにしろ安いにしろ金があるなしがつっかえ棒にならあな。しかし慈善を目的とした途端に難しくなる…」
春貞が言うと浅太郎も、
「さようですな。近隣の同業者からは目を付けられるし、治療など必要ではない野郎ども…いやこれは失礼…人たちまで押し寄せることになりがちですからな」
そんな埒もないことを話していると、
「こちらが向島診療所ですかい」
と叫ぶ声が聞こえた。
浅太郎は、
「開所一番の患者様ですかな」

と言いつつ、腰を上げて帰っていった。

見れば職人風の男に抱かれて入ってきたのは五、六歳くらいの男の子だったが額から血を流している。

早速笙船は診療部屋に呼び込んだ。

「どうされた」

笙船が問うと男は、

「ちょいと目を離した隙に、向こうの三囲神社の境内で遊んでいたと思ったら転んでどこかで額を打ったらしいので。幸い近くに診療所ができたと聞き連れてきたんだが診てもらえるかい」

と心配そうに話した。

「お前さんの子か」

「へい、六歳になる一人息子ですが、大丈夫ですかい先生」

「名は何という」

「佐助です。あっしは父親の吉蔵といいやす」

父親といった男は笙船とおよしが手際よく治療の準備をするのを覗き込むように

している。
「まずは離れて、そうそこいらに座っておれ。治療の邪魔になるからのう。
およし、まず傷口を見てから消毒じゃ」
「はい、先生」
そう返事をしたおよしは、
「佐助ちゃん、これから傷の手当てをいたしますからね。大丈夫よ、早くよくなりますよ。そのためには少し滲みるけど我慢して頂戴。男の子でしょ」
佐助と呼ばれた子供は気丈にも頷いた。
石段の角にでもぶつけたのか大きくはないものの傷口からはかなりの量の出血がある。
笙船は、
「額や頭は出血が目立つものじゃが、この程度なら縫う必要はあるまい。
およし、消毒後には洪寶丹（こうほうたん）でよいじゃろう。酒で練った物を晒（さらし）に塗り幹部に当ててな、包帯で固定しなされ」
と指示した後、父親の肩を押しつつ診療部屋を一緒に出てから小声でいった。

「傷は大したことはない。すぐに出血も止まるじゃろうからな。
ただな、頭を打っておるから些か心配じゃ。帰ったら丸一日は静かに寝かせておきなされ。
そう、吉蔵さんや、家はどこじゃ」
笙船が問うた。
「下谷です」
吉蔵が答えると笙船は、
「そうか。いや、大丈夫だと思うが万一の場合を申しておく。
もし傷ではなく頭痛がしたり吐き気を催すようなことがあれば命に係わることもあり得る。その場合は夜中でも良い。静かにな、なるべく揺らさないように連れてきなされ。よいな」
そう言って再び診療部屋に入ると佐助はすでに額に包帯を巻かれて横になっていた。
「先生、おぶって帰りますがよろしいですか」
吉蔵が問うと、
「まあ、それしか仕方あるまいな。具合がよくなってももう一度来るのじゃぞ」

と答えた。
「あのう、先生。急なことでいま金を持っていないが、いかほどかかるのかな」
吉蔵は心細い体で呟いた。
「心配するな。このまま何ごともなければ金は必要ない。ちゃあんと寝かせておくんじゃぞ」
笙船が言うと吉蔵は深々と頭を下げ、佐助をおぶって帰って行った。
「先生、お疲れ様でした」
とおよしが声をかけると笙船も、
「練習の甲斐があったようじゃの。包帯の巻き方が様になっておったぞ」
とおよしを労った。
「先生、先ほどのお薬は何というおくすりなのでしょうか」
およしが問うた。
「おお、そうじゃな。あれは天花粉といってな、ウリの一種じゃそうだがその根、それから白芷（びゃくし）、すなわち鎧草の根、そして芍薬（しゃくやく）と鬱金（うこん）の根で出来ておってな、今回のような怪我による出血はもとよりじゃが、火傷や打撲にも効くんじ

や。
先ほどのように酒で練るのも良し、茶で練るのもよいが火傷のような熱を帯びた傷の場合は酒ではなく茶が良いとわしは教わったがな」
小川笙船が腰を伸ばしながら説明するとおよしは筆と紙を取りだして書き付けた。
「感心、感心。そうだおよし。患者の診断書を残しておいておくれ」
笙船が願ったそのとき、
「どなかた、いらっしゃいますか。娘が熱を出しまして」
粗末な態をした若い女が乳飲み子を抱えて飛び込んできた。
「わしが医者じゃ。まずはそこへ寝かせなされ」
一歳になるかならない幼児が赤い顔をして呼吸を荒くしていた。
笙船は脈を取り、着衣の胸を開いて耳を当て、額に手を置き、さらに瞼を指で開き、最後に口を開けて覗き込んだ。
「いつからこうなった」
笙船が母親に問うた。
「今朝起きたときに飯を食べなかったのでおかしいと思ったんですが、熱が出て

きたのはそれから半時ほど後のことで…」
「そうか、わかった。そなたは向こうに座っていなされ」
母親が心配そうに子供から離れると笙船は、
「およし。手ぬぐいを水に濡らしてよく絞ってな、おでこと両方の脇の下に押し込んでくれ。熱を下げようぞ」
「先生。これは流行（はやり）風邪ですか」
「いや、幸い普通の風邪だと思うが、熱が高い。しかしよく知っておるな」
「吉原では一時期随分と流行風邪で亡くなった仲間を見てきましたので」
「そうか。今となっては良い経験ぞ。知は大きな宝よ、しかし体験はその最も母体となるものぞ」
そんな会話をしながら二人は子供の診断と治療に専念した。
「およし、湯は沸いておるか」
「はい」
「では体を手早く拭いてくれ、わしは薬を用意しようか」
およしは小ぶりの盥に湯を分け、水を少し加えて温度を調節した後に手ぬぐいを

濡らして固く絞り子供の体を手早く拭き終え後に手ぬぐいで乾かした。
「代えの衣服はいま持ってはおらんだろうな」
笙船が母親に問うた。
「はい」
「子供は大汗をかいておるでいま体を拭いたが、濡れた着衣では体に良くない。取り急ぎ大人用だが寝間着を着せておく。次に来るときに戻してくれ。よいな」
「ありがとうございます。わかりました」
「後は頭を冷やして寝かせてな、時々湯冷ましを飲ましなされ。そしてこれから渡す薬を一日三度飲ませるようにな。もし明日になっても熱が下がらんようならまたおいで」
「あのう、先生お代は…」
「おお、心配せんでも良い。ここはな、金が余っている者からしか取らん」
笙船は破顔した。
母親の姿は見るからに医者にかかる金などないその日暮らしの親子に思えたが、安心したようで深々と頭を下げ、大きい寝間着に包まれた子を抱きしめて帰って行った。

およしは、
「先生、いまのお薬は丸薬でしたね。いろいろな形があるのでしょうか」
と後片付けをしながら笙船に問うた。
「そうよなあ。一番知られている薬とは生薬を煎じて飲むことだな。これを『湯』と言っているが、他にこれを乾燥させ薬研（やげん）で粉末にした物が『散』だ。また蜂蜜などでまとめ丸薬にしたものを『丸』。そしてな、散に油を加えて軟膏にした物を『膏』というのじゃ。
それにな、今の場合じゃが丸薬の方が幼児には飲ませやすいと思ってな」
「わかりました。こんど機会があれば薬研なども使わせてください」
およしは相変わらず笙船の言ったことを書き写しながら言った。
「そうしよう。ただな、養生所のときはほとんどわしらが薬研を押して『散』等を作っておったが当然のことながら手間がかかる。
極々一部じゃがわしが考案工夫したものは別にしてここの多くは日本橋の薬種問屋から買っておるのじゃ。
春さんがな、多少値が張ってもここは人手もないから買って済むものはそうしろ

と言うてくれるのでな、まあ甘えておる。
それにな、本来高価な高麗人参はここの畑で栽培しておるので自由に使わせてもらえる。
聞けばもともとは公方様がいまの尾張藩主徳川宗春様に下しおかれたものを春さんに分けてくれたものらしいわい。
ともあれおいおいと教えるが、それぞれの薬棚の中が無くなる前に書き付けてな、田宮助左衛門どのか秋子さん、奈美さんに言ってくれればすぐに仕入れてくれるでな」
小川笙船はそう言いながら湯で手を洗った。そして、
「およしも手を洗うように」
と命じた。
ちょうど母屋から秋子が来て、
「先生、およしさん、昼餉のお支度ができてます。この間に食して下さいとの大奥様のお言葉です」
と食事の時間だと伝えに来た。
およしは端材に書いた「食事中の為休診」の札を診療所の戸に掛けた。

昼餉には井伊掃部頭家へ出稽古に出かけている堀田万之助と伴の留吉以外の顔が揃っていた。
食事が終わった頃、
「先生、初日そして初診はいかがでございましたか」
幸江が問うた。
茶を飲みながらの笙船は、
「そうよなあ。おかげでな、養生所のときのように診療以外の肩の荷がないのでな、診療治療に専念できるのはありがたいことじゃ。
しかし、その養生所で多くの貧しい者たちの現実を見てきたが、まだまだ医者へ行くどころかその日の食い扶持もままならぬ者が多いことをあらためて知った思いぞ。なんとかならぬものか…」
小川笙船はそう言いながら茶を飲み下した。
「幕府も財政難。これ以上養生所運営に力を入れることは難しいでしょうしな

あ…」
米道格左衛門が呟くと笙船は、
「無論、病気や怪我の治療をと考えれば格左衛門さんが申すとおり養生所といった施設を多々作ってという話しも出てくるじゃろうが、わしが危惧しているのはそういうことではないのじゃよ」
「……」
「怪我のことは置いといてな、病気じゃが、病気になるには相応の理由もあるのじゃ」
「ほほう」
「勿論、血縁に由来する生まれつきといったこともある。また貧しさ故の病気という理由もあるがな、しかし庶民の多くに欠けている最大の問題は病気を防ぐための知識の不足じゃ」
「知識の不足でございますか」
沙代が問うた。
「そうじゃ。金があれば病気にならぬと思う人もおろう。確かにそうした傾向はなきにしもあらずじゃ。

しかし人は金持ちでも貧乏人でも皆死ぬ。
生きている限り、いかに健康でいられるかは日々生活のしかたとその環境にかかっておりますのじゃ、大奥様」
「なるほど、大切なのは治療を受けずに済むにはどう生活したらよいかという知識というわけですな」
「春さん、そうなのじゃ」
笙船は頷いた。
「そういえば先生、『養生訓』という書物がございましたな」
田宮助左衛門が言った。
「おお、助左衛門さんは物知りじゃな。貝原益軒という福岡藩の儒学者が正徳二年（一七一二年）に表した書じゃが、長寿を全うするため身体の養生だけでなく、心の養生も説いておる実用書よ。
その書名は一般にも知られているが小石川養生所がその養生という名を付けたのも『養生訓』からだそうじゃ。
ともあれ小石川養生所はもとより、この向島診療所にやってくる者たちの多くは文字が読めんし読書どころではない毎日じゃ。

こうした者たちにこそ養生訓を読み聞かせ、毎日に生かす知識と知恵を与えたいと思ってきたが、一介の町医者ではどうにもならんかったわい」
と笙船は苦笑いした。
「いや、先生、『養生訓』はそれがしも目を通しましたがとても分かりやすく諭すような文でございますな。
　人の身は父母を本とし天地を初とす　天地父母のめぐみをうけて生まれ
　又養はれたるわが身なれば　わが私の物にあらず
という総論の書き出しでしたかな。
書き出しから読む者の心をぐっと掴みますな」
助左衛門が言い切った。
「そうよ、またこうもあったな。
　命みじかければ天下四海の富を得ても益なし　財の山を前につんでも用なし
とな。身にしみるわ」
と笙船が笑った。
そのとき、

「医者はまだおらんのか」
怒鳴り声が聞こえた。
「やれやれ、招かれざる患者かな」
笙船が言いながら腰を上げ、およしと一緒に診療所に向かった。
見れば侍一人と町人の男女がひと組待っていた。
「どなったのはお主か」
笙船が侍に向かって言い切った。
「おうよ。必要な時に居ない医者など意味がないではないか」
まだ二十歳を超えたばかりか、生意気盛りの若い侍が応じた。
「そうかい、そうかい。であればこのまま帰りなされ。ここはお前のような偉ぶる武士の来るところではない。帰りな」
笙船はそういいつつ、町人の男女に、
「待たせたな。こちらにお入り」
と声をかけた。
およしが二人を誘うと侍が怒り出した。
「武士に向かって無礼であろう」

「ほう、どこの藩の若造か」
笙船も負けてはいない。
「近くにある水戸藩下屋敷の川端又兵衛だ。御三家水戸藩を知らぬとは言わせんぞジジイ」
一端頭に血が上った侍は刀の柄に手を掛けた。
「水戸殿なら医者は沢山おろう。屋敷になぜ戻らぬ」
笙船が言うと、
「医者ごときに理由を問われる謂われはない。診るのか診ないのか」
侍は今にも刀を抜くようにして威嚇した。
「診ないな…」
笙船は事も無げに言い切ったそのとき、侍の背後から格左衛門が、
「馬鹿者が、止めとけ」
と声をかけた。
振り向いた侍は相手も武士と見て抜刀した。
格左衛門は、
「こいつは本当の馬鹿者ですな先生。頭をかち割って診た方が宜しいかもしれま

せんぞ」
といいつつ、刹那間合いを詰めたと思ったら手刀で侍の刀を宙に飛ばしていた。
「嗚呼」
「お前さんが二十人かかってもこのご仁には勝てぬ。諦めろ。格左衛門さん、後を頼む」
笙船はそういいつつ診療部屋に入っていった。
「どうした。斬り合いをしようというほど元気な奴が何の為にここに来た」
「……」
「そもそもここはどういう場所か知っておるのか。馬鹿者めが」
母屋の脇からは夏穂や助左衛門、秋子、奈美が面白そうに見つめている。
「お前なあ、水戸水戸と偉そうにいうがお前が偉いわけではあるまいて。それになここは松平春貞さまのお屋敷よ。
現尾張藩主の徳川宗春さまの腹違いの兄様じゃ。さあ、どっちが偉いかな」
格左衛門は面白可笑しくいたぶった。
「ま、松平春貞さまといえば、ここが上様もいらしたという屋敷か」
水戸の下屋敷は近くだけにその程度の知識はあったようだが、診療所との繋がり

は知らなかったようだ。

「家臣が無礼を働いたとなればだ、さて…まだご幼少の藩主宗翰（むねもと）さまに上様からどのようなお咎めがあるか、考えてもみよ」

水戸藩五代藩主徳川宗翰はこのときわずか十歳であった。

宗翰は享保十三年（一七二八年）七月二十九日、水戸藩第四代藩主徳川宗堯の次男として生まれたが、享保十五年（一七三〇年）に父の早世により三歳（満年齢一歳）で跡を継ぐことになった。為に吉宗により御附家老中山信昌ほか家老が呼び出され、幼君の輔育を直接命じられていた。

格左衛門の物言いに川端又兵衛は顔面蒼白になり、震えが始まった。

がばっとその場で土下座し頭を下げ、

「知らない事とはいえ申し訳ありませんでした」

と声を出した。

「知らないこと…というがな川端又兵衛とやら。ここがただの町医者なら狼藉を働いてもよいと申すか」

格左衛門が怒鳴った。

[illegible]

びくっとした川端又兵衛は慌てて、
「いえ、決してそういうことではございません」
とまたまた頭を下げた。
「まあよい。土下座はよいから立て。そしてなぜここに来たのか知らんが見れば刀を抜けるほど元気ではないか。出直してこい」
格左衛門は優しく言葉をかけた。
立ち上がった川端又兵衛は頭を下げ、一間ほど先に飛んだ己の抜き身を仕舞いながら逃げるように立ち去った。

一方、診療室では小川笙船の問診が続いていた。
「こちらはお前さんの女房どのか」
「へえ、とみといいやすが、ここのところ癪(しゃく)が続くのが心配でして。ただ、あのう…行きつけの町医者にはこれまでの借金もあって戸を潜れないんでさあ」
と次第に声が小さくなった。
癪とは胸から腹部にかけて突発的に強い痛みが生じる病であった。

男の場合には疝気（せんき）と呼ばれていたが、いまでいう胃潰瘍、胃痙攣、十二指腸潰瘍、虫垂炎、胆石や膀胱炎そして女の場合には生理痛に至るさまざまな疾患であったと考えられる。

しかしそうした病が癪とか疝気とひとまとめにされていたので原因の特定は難しかった。

「ふむ、どのあたりが痛くなるのか指先で押さえてみてくだされ。

なるほど、痛みの間隔ははどれほどじゃ」

笙船は問いを発しながら脈を取っていた。

「ところでお前さんたちにはお子がおるのかな」

「いえ、おりません。小一年前に流産しちまいまして」

旦那が残念そうに呟くと女房が悲しそうに俯いた。

「そうかい、分かった。それは残念じゃったな。

女房どのの経過は問題なかったのかな」

笙船は優しい声で問い続けた。

「俺は気にするなと言ってるんですが、こいつは申し訳ない申し訳ないと気にし

すぎまして、一時はもっと痩せてしまった時期がありました」
夫がもっぱら喋っていた。
「よしよし。これから薬を出すでな、朝晩飲んでみなされ。
十日、いや二十日くらい飲み続けても変わらないようなら必ずまた来なされよ。
薬を変えてみますからな。
それにな、金のことは心配せぬともよい。ここはな、あるとき払いの催促無しじゃ。だからな、また気楽においで」
笙船が言うと、
「ありがとうございました」
若い夫婦はお互いを労るように帰って行った。
それを眺めていた格左衛門は、
「ここにいると普段とは違う世の中を覗いているようで身につまされますな」
と笙船に声をかけた。
「しかしな、格左衛門さんや。ここ春さんの屋敷が特別でな、あれが庶民の普通の姿なのじゃよ。残念ながらな」
「いかにも…」

格左衛門は夫婦が戻っていく姿を振り返って眺めた。
「そういえば格左衛門さんや、先ほどは助かった」
水戸藩の侍だという男を追い返した格左衛門に笙船は礼をいった。
「先生、あんなのがこれからも多々やって来るんでしょうかな」
格左衛門が言うと笙船は、
「先ほどの侍もな、きっとまたやってくるに違いないわい。わしには何か曰くがありそうに思えるのでな」
そういいながら手を洗った。
格左衛門が首を捻ると笙船は、
「もともと徳川家は、初代権現様が医術に造形が深かったことは知られておるじゃろう。ご自身で薬研を押されたくらいじゃからな」
「はい」
「そうした影響もあってか水戸徳川家も光圀公（水戸黄門）のお考えもあり伝統的に庶民の病苦からの救済と健康維持を政務のひとつに取り上げているくらいなのじゃ」
事実光圀の命で元禄六年（一六九三年）に藩医の穂積甫庵は、庶民向けの医薬書

「救民妙薬」を刊行している。
これは入手しやすい薬物を用いて三百九十七にも及ぶ漢方処方が紹介されているものだ。
「その水戸藩の侍がどうやら己の為ではなさそうだが、焦った様子でここに来て何やら相談しようとしたことがちょいと気になるのだ格左衛門さんや」
笙船が一息入れると、格左衛門は無言で頷き会釈して診療所を離れていった。
今度はおよしが近づき、
「先生、いまの患者さんの癪とはどのような病気なのでしょうか、郭の中にも癪で苦しんでいた朋輩が多々おりました」
と笙船に問うた。
およしは何でも吸収しようと努力していた。
「そうじゃな。残念ながら原因は沢山あるように思えて正直よく分からんのじゃよ。我々医者が分かっていることなどほんの狭いことだけでな。
ただしあの女房の場合は胃の腑が悪いのではないかと思って薬を調合したのじゃ」
「胃の腑ですか」

「胃の腑は気持ちのあり方ですぐに具合が悪くなる典型的な臓器だといわれておるのじゃ。
我々もな、大変な心配事が重なったり続いたりするとこの辺りが痛くなるが、あの女房は流産で気落ちしただけでなく旦那に悪い事をしたと自分を責めておる。したがってな、胃の腑がやられたのではないかと診断したわけじゃ」
およしは驚いたように、
「お医師は患部の処置だけではないのですね」
と問うた。
「そうじゃとも。我々本道（内科）の診断は一般的に四診といわれる漢方の診断法に頼っておる。
患者の顔色、舌の色。肌の艶、肉付きなどを見る『望』がひとつ。
患者の臭いを知る『聞』が二つ。
手や指で患者の体に触れて脈などを見る『切』。
そして四つ目は『問』といってな、本人や家族のこれまでの病歴や経過、状況を尋ねることじゃ。
これらを知り、相互に関係するであろう体の働きを知るのが医師の勤めよ」

笙船は窓から差し込む心地よい日射しを頬に受けながら答えた。

四

未の刻が過ぎようとするころ、堀田万之助と留吉が戻ってきた。
「遅くなりましたがただいま戻りました」
万之助は春貞が座していた居間で報告した。
「ご苦労でした。特に変わったことはなかったかい」
「はい。ただし相変わらずでございますが、熱心に稽古をする方は僅かでございますな」
万之助が苦笑いしながら呟いた。
「戦のない世故、剣術に精を出すより皆金勘定の方に忙しいのだろうよ」
春貞も笑った。
「そうそう、ひとつ留吉さんの株が上がりましてな」

万之助が口火を切ると留吉が、
「万之助さま、恥ずかしいから止めにしてくださいまし」
と願ったが万之助は、
「なにが恥ずかしいものか。我らは出稽古に出向いております。したがって留吉さんのしたこともその一貫となりましょうぞ」
と言い切った。
万之助が藩道場で十人の藩士たちに稽古をつけている間、留吉は庭で持参している赤樫の棒を振り回していたのだという。
すでに留吉の棒術はいっぱしのものになっていたからか、通りかかった奥女中たちの目に止まり珍しがられたのだという。
「ほう」
春貞も面白そうにしている。
「そのうちのお一人であるお女中頭というお方が、自分たちの薙刀と戦ってみたいと言い出しましてな」
「留吉の棒術と戦ったのか」
春貞も膝を乗り出した。

「はい。それがしの稽古が一通り終わりましてから道場をお借りして留吉さんと女中頭の沢田さまというお方が棒術と薙刀の試合をすることになりました。さすがに井伊家のお方といえばよろしいのでしょうかな」

万之助がいうと、

「結果はどうなったのだ」

春貞がどちらが勝ったのかを急かした。

万之助は笑いながら、

「生憎といってよいのでしょうな、相打ちという結果になりました」

「ほう、相打ちな…」

「はい。薙刀の方が長いのですがそれを一本の棒と見立てれば留吉さんはその動きが手に取るように分かったに違いありません」

「ふむ。それなのに相打ちか」

春貞はあくまで拘ったがその表情は笑顔だった。

「留吉、まさか手加減したのではないだろうな」

春貞がいうと留吉は畳みに両手を付けて頭を下げた。

「申し訳ありませんでした」

「春さん、僭越ですが叱らないでください。一瞬の迷いがそういう結果になったとそれがしは見ましたが、本来なら留吉さんは勝っておりました」
万之助ははっきりと言い切った。
「申し訳ありません。初めてのお方、それも女衆ということで最初に頭をかすめたのは怪我をさせてはならないということでして。
なによりもその沢田さまという女衆は薙刀では他の女衆には負けないという自信を持っていることはすぐに分かりまして、ここであっしが打ち負かしたら怪我をさせるのは勿論、その自信を打ち砕くことになってしまいます。
そんなことを考えておりましたら相打ちになってしまいましたので」
春貞は意外に機嫌良く留吉の話しを聞いていたが、
「今回は叱らぬ。しかし俺が気になったのは相打ちになったことではない。留吉が勝たなかったことではないのだ。
女と見て手加減しなければならぬと気を遣ったお前の優しさを危惧しておるのだ。
俺の女房どののようにな、女衆でも凄腕はいくらでもいよう。これが本当の戦いの場だったらその優しさが仇となり、お前は命を失うことにもなってしまうこと

を心配しておるのだ」
春貞が優しくいうと万之助も頭を下げ、
「本来ならそれがしが、そうした余計なことにならぬよう注視しなければならなかったのです。試合となってしまったのはそれがしの落ち度でもございます。申し訳ございません」
と詫びた。
「いやいや、俺は怒っているのではない。それでその沢田とかいう女は大人しく引き下がったのか」
春貞が問うと留吉は、
「困ったことに、次の機会に白黒の決着をといたく熱心でございまして…」
本当に困った顔で言った。
万之助が、
「留吉さんが今後行かないとしても、その沢田さまからは催促があるのではないでしょうかな」
と苦笑した。
「留吉。相手を見ることが肝心よ。

その沢田某は熱心なあまり、あるいは回りがちやほやしているのか負けることを知らないのではないか。
お前が完全に負けを認めれば別だが、中途半端なままでは納得せんだろう」
春貞が言うと留吉は、
「旦那。あっしはお侍ではないからかどちらかというと商人のような考えになってしまうんですよ。
例えば井伊家のお屋敷から嫌われれば万之助さまのお役目に支障がでるのではないかと、まあそんなことも頭をよぎりまして」
正直に言い切った。
「わかった。では次に試合の機会があれば思いきり打ちのめせ」
春貞がきっぱりと言うと留吉は、
「怪我をさせてもよろしいので」
と上目遣いに問うた。
「まあ、なるべく薙刀を飛ばす程度でやんわりとやるんだな」
春貞が答えると、
「それでは堂々巡りではございませんか旦那。後生だからどうしたらよいか教え

てくださいよ」
と慌てた。

向島診療所が開所して十日も経つ頃になると春貞や笙船が予想していた以上の患者が押し寄せた。
医者を増やすわけにはいかないが治療の効率を少しでも上げようと、混雑している時はおよしの他に奈美が助手として加わることになった。
待合部屋には常に四、五人ほどが順番を待つのが普通になったが、無料で治療と投薬をしてくれることが次第に知れてきたからか誰も文句をいう者はなく大人しく順番を待っていた。
「次のお方、お入りなさい」
およしの呼びかけで診療部屋に入ってきたのは開所初日に来た若い夫婦だった。
「ちゃあんと来たな、おとみさん。どうだ癪の具合は」
笙船の問いにとみは、
「おかげさまで薬をいただいてから一度も痛んでおりませんが、その薬がなくなりましたのでやってきました。続けて頂戴できますでしょうか」

と申し訳なさそうに願った。

「おお、薬が効いたようじゃな。後な、少なくとも一か月ほどは飲み続けてくれ。それとな、あなたの病は気の病じゃ。流産したことを考えすぎたために胃の腑が悲鳴をあげたのじゃよ。

よいか、およしさんや。おまえさんという女房がいてそこなる夫が元気ならまたお子はできよう。だから過ぎたことはな、早く忘れることじゃ。よいな」

笙船が諭すようにいうとおよしは夫と顔を合わせながら頷いた。

「また薬がなくなったころにおいで。経過を見たいからのう」

若い夫婦は嬉しそうに仲良く肩を並べて出て行った。

次の患者は見るからに浪人者だった。

月代も伸び放題で刀は脇差しを帯びてはいたが笙船は竹光ではないかと看破していた。

「いかがされたかな。まずはお名を聞かせてくだされ」

笙船が問うと浪人は、

「拙者は滝川五郎太と申す。ここは無料で診てくれると聞いたが本当であろうか」

と心配そうに聞いた。
「さよう。金のない者からいただくつもりはござらんので金のことは心配いりませぬぞ。で、いかがされた」
再び笙船が問うと粗末な着流しの左袖をめくった。
その二の腕には幾筋もの傷と皮膚が広くむけていた。
「浪人暮らしをしておりますのでな、長屋の連中に仕事を紹介され普請の屋根瓦を梯子で上に持って行く作業中に慣れないものでして一枚を腕に落としてしまいこのありさまなのだ。
だらしないがないことに痛みが次第に強くなるようなので参った次第」
滝川五郎太が我ながら情けないという顔で説明した。
「よしよし。奈美さんや、金創膏でよいじゃろう。
傷の範囲が少々広い故、晒しに塗って患部に当ててな、その上から包帯を巻いておくれ」
その間にもおよしは薬だけ取りに来た患者らに親切に対応していた。
一人の男の子がおよしに向かって、
「先生、ありがとう」

と声を上げて出て行ったが、およしは、
「わたしに先生とは恥ずかしいです」
と呟くと笙船は、
「先生と呼ばれてな。なにも感じなくなると医師として驕りが出てきたころと思いなされ。
最初は皆恥ずかしいと思うものよ。しかしな、次第に当たり前になってくる。問題は先生と呼ばれるに値する知識と経験そして治療の実績をな積み上げていくことが大切じゃ」
と笑みを返した。
「さて、滝川さんとやら。これで大分楽になるじゃろう。様子を見てな、二、三日後にまた経過を見せてくだされ」
そう言って浪人を送り出した。
「先生、娘の咳が止まりませんで」
次から次へと患者の列が途切れること無く続くように思えた。

翌月の二十日、堀田万之助は留吉を伴として再び井伊家上屋敷に出稽古に向かった。

万之助の役目に粗相があるはずもなかったが、留吉が待っている間にと得意の赤樫の棒を振り回し棒術の稽古をしていた姿を奥女中の沢田という女衆が見て自信がある己の薙刀と勝負しろと迫っていることが気がかりだった。

留吉としては大事なお得意様の女衆に怪我をさせてはならないと思いつつも勝負に手心を加えたり、ましてやわざと負ける等と言うことはあってはならないことを師匠の弥三郎から叩き込まれていた。

ではどうしたら奥女中は諦めるか。

春貞に問えばそれは怪我をさせないまでも徹底的に痛めつけることだと聞かされたものの、気が重い道のりだった。

「万之助さま。今日はあの女衆、病気か何かで寝ているとよいのですがな」

「馬鹿を申せ。誰であろうと病気になった方がよいなどと考えてはならぬ」

万之助に窘められつつも留吉は足が重かった。
「でもねえ万之助さま。相手は上得意先の女衆ですぞ。怪我などさせて出入り禁止となればあっしのせいでこれまで万之助さまがご苦労して培った信用が丸つぶれとなってしまいますぜ」
「留吉さん。まずな、その得意先という物言いはいかがなものかと思いますぞ。出稽古は先方から依頼されてのこと。
確かに年間数百両の金をいただいておることは確かですが、これまた女衆とはいえご本人の求めに応じた尋常の勝負の結果に難癖をつけるようなことが万一あれば、井伊家だろうがどこだろうが春貞さまは即刻出稽古をお断りなされましょうぞ。つまらぬ心配をされてはなりません。
ただし、勝負にせよ稽古にせよ、それがしがいない場所ではやってはなりませぬぞ。よろしいな」
そんな話しをしながらも二人は井伊家上屋敷の門を潜った。

一方、向島診療所に開所初日に怒鳴り込んできた水戸藩下屋敷の川端又兵衛が再びやってきた。

しかし過日とはまったく違い、しおらしく順番を待っていただけでなく四十歳前後と見られる明らかに上司と一緒だった。
「次の方どうぞ」
およしの声に診療所に入った又兵衛と中年の武士はそこに座している小川笙船に深々と頭を下げた。
「おお、やはりこられたな。まあまあそんなに堅くならずともよい。お主を診察しろというのではないことは分かっておる。まずは話しを聞かせてくれ」
と川端又兵衛に言った。
すると連れの武士が口を開いた。
「先生は小石川養生所の初代肝煎りであり、上様にも覚えが目出度いお医師と知りお伺いした次第。
前回はこの又兵衛が功を焦ったか、あるいはお家の大事に頭が逆上したか大変ご無礼を働いたと聞き申した。遅ればせながらお詫び申し上げる」
と再び頭を下げた。
「それはもうよい。過ぎた事じゃ。まずはお手前の名と用件を伺おうぞ」
笙船の物言いに、

「これまた失礼いたした。それがしは藩主宗翰様が鶴千代様と申されたときからの御守役、朝比奈久兵衛と申す」
朝比奈久兵衛は名乗った後に診療部屋に他の者がいないことを確かめるように当たりを見回し声を落として話しを続けた。
「笙船どの、それがしたちがここにいることも藩の者どもには知られたくないのです。その点をお酌み取りいただき話しをお聞きいただきたい」
と願った。
ちらりとおよしに目を向けたが、笙船に、
「このおよしはわしの大切な助手じゃ。およしに話せぬ事ならわしも聞くことはできぬ」
そう言われて朝比奈久兵衛は頷いた。
続けて笙船は、
「それにここはただの診療所だ。したがって誰であってもその者の秘密というか内情を外にもらすことはないから安心しなされ。
ただしわしはただの老いぼれ医者じゃ。藩の大事を知らされたところで役に立つこともできんぞ」

笙船は釘を刺した。
朝比奈久兵衛は懐から紙入れを出し、その奥深くにしまっていた小さな紙包みを取りだし笙船に差し出した。
「先生。取り急ぎのお願いですが、この中の薬らしきものが毒薬であるかどうかを知りたいのです」
小川笙船とおよしが顔を見合わせた。
「ふむ。わしに分かるものであれば見て進ぜようが、水戸藩には大勢の優秀な藩医がおるではないか。なぜわしのところに持ち込んだのだ」
笙船の問いに朝比奈久兵衛は苦渋の表情を浮かべながら、
「尤もなお言葉です。
実はこの紙包みは宗翰様お付きの女の懐から奪ったものでしてな、経過は省きまするが、我々は誰かの命を受け宗翰様のお命を縮めようと計ったのではないかと疑ったのです」
そう言い切った。
「なるほど。ということはこの紙包み以前にもそうした気配はあったのかな」
笙船が問うと朝比奈久兵衛と川端又兵衛が同時に頷いた。

朝比奈久兵衛は、
「毒薬かどうか、犬猫にやる餌に混ぜればわかるだろうとこの川端はいうが、笙船先生、もしそうならこれは大事な証拠品。なるべく量も損なうことなく真実を知りたいのです。
それに余計なことですがそれがしは動物好きでしてな、犬猫とて命を奪うのは憚れまして…」
と柄にもなく優しいことを口にした。
「分かった。
いまは事情は聞くまい。早速見てみるでお主達は少し離れておくれ。
およし、念のためだ。鼻と口を手ぬぐいで覆いなされ。そしてな、風の流れを作らぬよう窓を閉めてくれぬか」
笙船はそう言いながらおもむろに薬箱の上に紙包みを置いて静かに広げた。
顔を近づけた笙船は、
「ふむ、間違いなくこれは石見銀山じゃな」
そう言いながら指先に粉末を少量を付けて己の舌に乗せた。
「せ、先生。毒くすりを大丈夫なんですか」

「ごく少量じゃ。また若い頃から数え切れないほど同じ事をしているでな、大丈夫じゃよ」
舌で味わった笙船は確信を持って石見銀山の毒薬だと言い切った。

同じ頃、井伊家上屋敷の剣術道場では堀田万之助の出稽古が無事終わったが、奥女中の沢田のたっての希望で己の薙刀で万之助の伴である留吉の棒術との試合が始まるところだった。
万之助の稽古を受けている一番の年長者である池上弥二郎が、
「それでは、僭越ながらそれがしが審判を相務めまする。今回は前回とは違い、それがしが止めの声を上げるまで続けよ。よろしいな」
その声に押され、沢田は襷を掛け薙刀を小脇に抱えて道場の中央に立った。
対して留吉は小袖に袴姿のまま愛用の赤樫で作った棒の中央を右手に持って沢田と三間ほどの距離を置いて立った。
万之助は留吉の表情からどうやら迷いが吹っ切れたようだと推察していた。
「はじめ！」
池上弥二郎の声が道場内に響き二人が構えの姿勢に入った。

留吉は棒を己の前に垂直に立て、そのほぼ中央を両手で掴んで動かなかった。
対して沢田は勇ましくも薙刀を上段に構えて打ち込もうとした刹那、最も攻撃的な構えとされる八相に変え、
「やあっ」
の掛け声と共に切っ先を留吉に突き出した。
「カーン」
と硬質の音がして留吉に跳ね返され、どうしたことか薙刀は沢田の手を離れて左に飛んだ。
意外だという表情の沢田は薙刀を取り直して半身に構え、元手を後ろ足の付け根あたりに置き、切先を相手の鳩尾を狙う位置に構えた。
この中段の構えは薙刀の基本的な構えでもあり、攻撃にも防御にも転じやすいと言われている。
対して留吉は棒を両手で回し始めた。
沢田は鋭く切っ先を一杯に突き出したが寸毫躱されたと見るや薙刀を回して石突で払いにかかった。
と、立ち位置を微動だにしない留吉の棒に阻まれたが、瞬間沢田は少し飛び下が

って見えたその体が床を蹴ると同時に切っ先で再び撫で切りした。
「ほう」
万之助が感心する素早くも理屈に合った動きだった。
しかし、
「あっ」
と声を上げたのは沢田だった。
切り払ったと確信した刹那、留吉は棒を床に突き立て、反動でその身は高く跳び、沢田の頭上を越えて背面に立つ瞬間、棒の先端で沢田の肩を後ろ側から押さえた。
「それまで」
池上弥二郎が声を上げた。
項垂れた沢田は一瞬唇を咬んだように思えたが、正面に笑顔で立っている留吉に近づき、
「少々わらわは自惚れていたようじゃ。ありがたいことに叩かれ突かれるのでは無く押さえてくれたおかげで支障も無くお役目を続けられます。
しかし留吉どの、これからも機会がある度に試合、いや稽古をつけてくれませぬ

か」
と願った。
「沢田さま。勝負は時の運と教わりました。あっしこそよき勉強となりました。また相対しましょうぞ」
と頭を下げた。
帰り道に万之助が留吉に問うた。
「お見事でしたが、最初からこう動こうと考えていましたのか」
留吉は首を左右に振りながら、
「いや、あっしも棒を立てて飛び上がることなどこれまで考えませんでしたが、沢田様の薙刀は…前回もそうでしたが、上下の動きより左右の攻撃が多ございますので咄嗟に体が動いたのでしょうな」
と答えた。
「いやはや、上出来でした」
万之助が満足そうに言った。

一

年が明けた元文四年（一七三九年）正月早々大変な情報が弥三郎からもたらされた。

最初は吉宗が病気かと心配させる出来事があった。

それは将軍吉宗が恒例の行事を代理に任せて奥に引き篭り表に出なくなったというのだ。

しかしそれがあの徳川宗春に対する処罰にかかわることらしいと分かりある意味安堵したが、尾張藩の混乱から半年も過ぎてやっと徳川宗春に正式な沙汰が下った。

正月十一日、老中松平乗邑は尾張藩の家老たちを江戸城に呼び出し、宗春に対し蟄居謹慎の内命を申し渡した。

翌十二日になると宗春は、将軍吉宗からの隠居謹慎命令を広島藩主浅野吉長、水戸藩御連枝陸奥守山藩主松平頼貞、同じく水戸藩御連枝常陸府中藩主松平頼幸らにより伝えられ、江戸の中屋敷に、そして後に名古屋城三の丸の屋敷に隠居謹慎させられた。

為に名古屋の町は一日にして勢いを失い、町中がひっそりと息をひそめるように沈黙してしまった。

そうした詳しい情報が春貞の所にもたらされたのはしばらく経ってからではあったが、良くも悪くも尾張の騒動はひとつの決着をみたことは明らかだった。

「そうか。宗春の謹慎がいつまで続くか気になるが、腹を切らなくて済んだその代償とすれば長引くことになりそうだな」

春貞が呟いた。

「はい。謹慎とはそうしたものでしょうが、外出は一切お認めにはなられず、父母の墓参りもお許しが出ないということらしいですな」

弥三郎が応じた。

「ふむ、後は目立った処分はあるのかい、とっつあん」

「そうですな。例の星野織部は知行五千石のうち四千二百石が召し上げられたと

聞きました。
また織部の腹心らは家禄のほとんどを召し上げられ、それぞれの息子は三十人扶持に激減されたそうです。
その他の家臣など三五名ほどが大幅な格下げとなりましたな」
弥三郎が茶を啜りながら言った。
「なるほど。しかし御三家筆頭格尾張藩の藩主謹慎の沙汰としてはだ、宗春の処置は厳しくて当然としても意外と狭い範囲の処分に思えるな」
「はい。大山鳴動して…の感を免れませんが春さん、裏を返せばまあそれほど宗春様側の勢力が弱小であったということでしょうかな」
弥三郎の言葉を受けて春貞は、
「そもそも宗春は政敵を打ち倒すことや自派の勢力の拡大には無関心だったからな。それだけ邪心がなかったとも言えようが、一国一城の主人としてはやはり脇が甘かったということなんだろうよ」
そう言い切った。
「そういえば次の八代藩主は決まったのかい」
「はい。宗勝様だそうですな」

「宗勝？」
「ああ、春さんや格左衛門さんがよくご存じだという代五郎様でございますよ。上様から偏諱の授与を受けて宗勝様と改名されたそうです」
「おお、そうだったか。
代五郎なら庶民の生活というものを肌で知っておる。宗春のような派手さはないがきっと名君になるだろうよ。
となれば参勤でこの江戸に出てくることになるから久しぶりに会えるかも知れんな」
春貞が初めて笑顔を見せた。

尾張藩八代藩主となった徳川宗勝は幼名代五郎といい、春貞が生を受けた後に預けられた川田久保松平家の初代、松平友著の長男であった。
歳は春貞が八つ年上だったため、代五郎は春貞を「兄様」と呼んで慕い、春貞も弟のように可愛がって育った。
ちなみに代五郎の遊び相手として同じく川田久保松平家に預けられたのが代五郎と同い年の米道格左衛門だった。

ただし幼少時は祖母の縁者であった鈴木重兵衛のもとで養育され、その後も身分の低い役人の下で幼年期や青年期を過ごしたため庶民の生活をよく知っていたし、だからこそ春貞と格左衛門との三人で剣術の稽古に名を借り、どこへでも一緒に連れだって悪さをし、春貞の乳母沙代にその尻拭いで苦労をかけた。それだけに春貞、代五郎そして格左衛門の絆は固いものだったに違いない。

九月の二十一日、南町奉行所常廻り同心、伊丹鉄太郎が十手持ちの定吉を連れてやってきたが珍しく神妙な顔つきだった。

「伊丹さん、どうした。まさか深雪さんになにかあったのではあるまいな」

春貞が心配して問うた。

「いや、心配させてすまん。お役目のことだ。お陰様でな深雪は元気よ」

深い呼吸をした後に伊丹は、

「実はな、御奉行が亡くなったのだ」

「うむ。松波筑後守正春様だったな。事故かお病気か」

春貞が思わず問うと、

「前任の大岡様の跡を継ぐ形で元文の改鋳の諸作業や、これまた寺社奉行となっ

た大岡様らと共に『公事方御定書』の改訂に参画するなどの功績があり、我らも思っていた以上にお役目を遂行しやすい御奉行だったし、大目付兼宗門改役に任ぜられて五百石をご加増されたばかりだったがな。

この一日にご病気で亡くなられたのだ。

何しろ奉行というお役目は一般に知られているよりずっと激務なんだ」

伊丹は肩を落とした。

伊丹がいうように町奉行は実際大変な激務だった。

町奉行というと我々は現在の警視総監といった役割を想像するかも知れない。しかし実際にはそれだけでなく都知事、最高裁判所長官、消防庁長官、農林大臣といった職務をすべて包括した役目だったといえる。

町奉行は一月交替で月番と非番となる。月番のときは奉行所の門を開けて訴訟を受付け、非番の町奉行所は門を閉じ、前月受付けた未処理の訴訟を処理し、月番奉行と事務連絡を怠らないようにしていた。

さらに、江戸城へ登城して伺書を老中に提出したり、裁決された書類を受け取ると共に罪を処理したりした。

また月番の奉行は朝四つ(午前十時)の御太鼓前に登城して八つ(午後二時)頃奉行

所に戻り、それから民事、刑事の訴訟の処理吟味にかかるのである。
体を壊す町奉行は多く、事実松波筑後守正春後任の歴代五人は続けて死亡のために離職している。
定吉が、
「伊丹の旦那が気を落とされているのは御奉行もご就任当時からご高齢だったこともありましてな、お亡くなる前にというか是非一度春さんに会わせたいと画策されていたんですが、なかなか多忙なお役目で伸び伸びになってしまっていたその矢先だったものですから…」
そう伊丹の代弁をした。
「そうよなあ。南町奉行に目通りしなければならぬような事態がなかったことは喜ばなくてはならんが、俺もな大岡様とは違って気楽に足を向ける気にならなかったのよ。残念だったな。
で、当然後任の奉行は決まったんだろうな」
春貞が問うと伊丹は、
「ああ、水野備前守勝彦様というお方だが、俺たちもまだどのようなお方かはよく知らぬのだ」

春貞の脳裏に、寺社奉行に栄転した大岡忠相の姿が浮かんだ。

秋風が身にしみる十一月の初日のことだった。
須田町で十手持ち兼金貸しの二足のわらじを履く岩次郎が久しぶりにやってきた。
「これは久しぶりだな、仲人の親分」
春貞がふざけて声をかけると、
「だ、だんな。そんな嫌みな物言いは言いっこなしですよ。すでに随分と前の事ではございませんか」
と苦笑いした。
岩次郎は地元でゲジゲジの親分と嫌われ者だったが春貞と付き合うようになってから次第に阿漕な真似はしなくなった。そして享保の飢饉の際に地域の貧しい者

たちに炊き出しをしたことから信頼を回復していた。
また留吉と奈美の祝言の際には岩次郎夫婦から願って仲人の大役を初めて経験したのだった。
「小耳に挟んだことだが、最近下駄屋だったか若夫婦の仲人をやったと聞いたぜ。すっかり仲人の親分ではないか」
破顔しながら春貞がいうと岩次郎は、
「あのお喋りの読売屋がちくったんでがしょう」
と照れた。
ちょうど畑仕事の区切りをつけた留吉と奈美が母屋に顔を見せ、岩次郎に挨拶をと立ち寄った。
岩次郎は、
「そういえば旦那。診療所をこの奥にお建てになったとか」
と問うた。
「ああ、あの小石川養生所の初代肝煎り小川笙船先生がわが屋敷で住み暮らしてくださることになってな。
例の竹屋の渡しの騒動をきっかけにな治療所をと考えたわけだ」

春貞が簡単に説明すると、
「この辺りはもともとお医師がいなかったが十年前と比べれば随分と住み暮らす者も増えやしたから回りの奴らは喜んでいるでしょうな。
あっ、しかし金を取らないって聞きやしたが本当なんですかい」
怪訝そうに岩次郎が問うた。
「そのとおりだ。払える者からは受け取るが払えない者からは取らねえというのが今度の診療所のやりかたよ」
「それは瓦版にも書いてありましたが、そんなんじゃ患者が殺到しませんかな。金が無くて医者に行けない、薬も買えないという連中がわんさかいるわけですからな」
岩次郎は飲み込めない様子で聞いた。
「確かにそれは大問題だ。だが病人や怪我人がそれだけ多くいるという現実を無視した医療活動など無意味だしそりゃあ偽善だ。てめえたちの都合のよい所だけに目を向けるのはな。
ただし、親分のいうとおり対処仕切れねえほどの患者が押しかけるとなれば緊急を要すると判断した患者を優先し、後は待ってもらうしかねえ」

春貞がいうと岩次郎は、
「それはそうでしょうが、皆自分が可愛い。
俺が先だと混乱するに違いねえと思いますがな」
と心配した。
「そうだな。しかしいまのところ一日に五十人から七十人といったところらしいが、笙船先生がおっしゃるには今の倍くらいにはなるというな。
しかし、患者の数に合わせて医者を増やすことは出来ねえ」
春貞は亜耶が煎れてくれた茶を飲みながら、
「とはいえ、その日の食い物にも困窮している者たちは人の痛みに敏感よ。
どこかの侍みてえに己が己がという奴はほとんどいねえ。
だからきちんと順番を守って大人しく待っているようだが、そうなると待つ場所ももう少し広くねえとまずいようだ」
「まあまあ旦那方はなんでそんなに人様のことでご苦労されるんでしょうかな」
岩次郎もあきれ顔だった。
そのとき開き門の外に大勢の人馬の気配が伝わってきた。
対応に飛び出た奈美が春貞のいる居間に駆けより、

「春貞さま。徳川宗勝というお方が『代五郎が来たとお伝え下さい』とのことでございました」
と慌てて知らせた。
岩次郎も、
「徳川なんとかというお人なら、あっしは失礼しますぜ」
腰を上げたが春貞は、
「親分。よいからそこにな、座っておれ」
と笑った。
春貞は玄関まで迎えに出たが、そこに従者二人と立っていたのはまぎれもない代五郎、いや尾張藩八代藩主になった徳川宗勝その人であった。
「これはこれは、むさ苦しいところへよく足をお運びくださいましたな」
春貞が笑顔で迎えると、
「兄様、久しぶりでございました。参勤で江戸にでてきましたので上様にお断りした上でお邪魔しました」
と磊落に声をかけた。
「奈美、格左衛門を呼んでくれ」

春貞はそう言いながら宗勝の肩を抱くように居間へと誘った。
「なにっ、あの格左がここにおるのか兄様」
宗勝は子供のように喜んだ。
「はい。すでに我らの家族でございますぞ。
どうぞこちらへ」
言われるがままに座した宗勝に岩次郎はどうしてよいか分からず、震えながら平伏した。
「殿、この者は俺が懇意にしている十手持ちです。
邪魔はいたしませぬ故同席をお許しください」
春貞の求めに宗勝は、
「おお、そうでしたか。こちらが邪魔したようで済まぬ。名は何と申す」
と岩次郎に声をかけた。
「は、はいっ。い、い、岩次郎と申します」
しどろもどろに答えると宗勝は、
「よしなに頼む」
といってその場に座した。

そのとき、米道格左衛門が稽古着姿で走ってきた。
「代五郎さま…いや宗勝さま。お久しぶりでござる」
格左衛門の顔が上気しているのは稽古をしていた直後というだけではないようだ。
「懐かしい顔が揃いましたな」
宗勝が格左衛門に近寄り、その両手を握った。
そのとき、静かな足音が近づき沙代と亜耶が茶を運んで来た。
「これはこれは嬉しいお方が目の前におられますな。よくお出でくださいました」
沙代が平伏しようとしたとき、宗勝が一瞬早く、
「沙代さま、その節は分別がなかったとはいえ多々ご迷惑をおかけ申しました」
と両手を畳につけて頭を下げた。
「宗勝さま、いけませぬ。
尾張藩藩主さまがこの婆ごときにおつむをお下げになるなどあってはならぬことです。
すでに昔のよき思い出ではございませぬか。

お手をお上げくださいませ」
沙代がそういうと宗勝は満面の笑顔であらためて一同を見回した。
岩次郎は御三家筆頭格の藩主が沙代に頭を下げている姿を見て混乱していた。
「この屋敷の人たちはどえらい人たちなんだ」
と今更ながら感嘆し震えていた。

続いて幸江が娘理子を連れ夏穂と入ってきたが、さらに弥三郎と万之助、留吉と奈美、田宮助左衛門と秋子が揃い平伏した。
「皆われらの家族でございますが、この奥に診療所を建てましてな、そこでは小石川養生所初代肝煎りだった小川笙船先生と助手のおよしと申す者がおりますが、いま診療中のためご挨拶ができませぬ。お許しを」
春貞がそう願ってひとりひとりを紹介した。
しばし昔話に花が咲いたが、話しが途切れた際に春貞は、
「藩主ご就任はお目出度いことでございますが、この度尾張の騒動は大変でございましたな」
と話柄を変えた。

「兄様はすべてご存じだと上様からお聞きいたしましたが、それがしのお役目は一日も早く尾張の混乱を治めると共に深刻化している藩の財政再建を主とした藩政再建を目指さなければなりませぬ」
宗勝はそう言い切った。
そして、
「決して宗春さまがどうのという訳ではございませぬが、それがしは派手なことはできませぬ。
目立たぬかもしれませんが着実に確実に前に進むしか道はございますまい」
茶を飲んだ宗勝は春貞に向かい、
「兄様。藩主就任にあたり多くのことをこの小さき頭に叩き込まなければならず、時に覚えが不十分かも知れませぬが、上様から尾張と兄様との確執をお聞きいたしました。
なりたての藩主とはいえまずはこれまでの数々のご無礼をお詫びせねばなりません」
と頭を下げ、
「失礼ながらその首の傷が因縁の傷ですか」

宗勝は春貞が首に巻いている椿の柄を染め抜いた手ぬぐいに視線を送りながら申し訳なさそうに問うた。
「はい。お聞き及びかと思いますが、首と右肩をやられました。無論傷は治っておりますが首の傷はいささか目立ちますのでこうしております」
春貞が首を押さえながら答えると、
「なるほど。それで巷では首巻き春貞と言われておりまするのか」
と得心した。
「ただし、この宗勝が藩主となったからには兄様はもとよりこのお屋敷に指一本触れさせぬよう努めます故、以前のとおり良きお付き合いをいただけませぬか」
宗勝は春貞に願った。
「ありがたいことでございます。ご承知かと思いますが我が妻も尾張藩江戸家老だった永井主水の娘、そして堀田万之助も江戸藩邸の剣術指南役でござった。そしてこの十年ほどの戦いも決して我らが仕向けたことではございませぬ。宗勝さまが藩主となられ、尾張の闇の部分が消えたとすれば我らは望外の喜びにございます」
春貞はそう応じた。

宗勝は破顔し、
「是非是非ガキの頃のように我らの思慮不足の点をこれからも兄様に補っていただきとうございます。のう格左どの」
「思慮不足の一因にそれがしも含まれているようですな」
格左衛門が面目なさそうに問うと宗勝は、
「当然ではないか。
昔から格左とそれがしは二人で一人前だと沙代さまに何度叱られたことか」
と笑った。
沙代が、
「そのような失礼をこの婆が申しましたか。申し訳ございませぬ。
それにしても殿、本来ならせっかくの機会ですので膳などご一緒にと思いまするがご家来衆も多々おいでのご様子。
本日はご無理でございましょうか」
と問うた。
「ありがたいことです。
本来なら膳は勿論、酒を交わしながら夜通し馬鹿話をしたいのですがそうもまい

りませぬ。
また機会を作り伺いますし、上屋敷にも是非足を運んでいただきとうござる」
徳川宗勝は磊落に笑いながら名残惜しそうに腰を上げた。
部屋を出るとき、隅で小さくなっていた岩次郎に、
「岩次郎どの。邪魔をしました、お許しあれ」
と声をかけ、またまた岩次郎を驚かせた。
門まで春貞ら一同が送りに出ると乗物の他に騎馬と徒歩の武士らが大勢整然と控えていた。
軽く頭を下げた後、宗勝は藩主の顔となり乗物に納まった。
春貞らも無言で去りゆく行列に頭を下げた。
居間に戻ると岩次郎がまだ小さくなっていた。
「だ、旦那、あっしみたいな者が同じ部屋にいたんじゃあお叱りを受けるかと思いやしたが、殿様はさばけたお人でございますね」
と春貞にいった。
「確かにな。あいつはガキの頃から身分の低い家臣らの中で育てられたから庶民の暮らしや物の考え方がよく分かっているのよ」

「なるほど。しかし尾張の殿様もすげえが、旦那はもっとすげえですぜ」
「ほう、そうかい」
「だって、そのすげえ殿様、御三家筆頭格の尾張藩主さまがですぜ、兄様と呼んで挨拶にお見えになるんですからな」
と岩次郎は上気した顔で言った。
「それはともかくだ。親分に残って貰ったのはまたひとつ頼みがあるからなんだ」
春貞は岩次郎の前に座りながら言った。
「へえ、なんなりとおっしゃってください」
岩次郎が真顔になった。
「いや、こんどはそんなに難しいことではない。診療所を始めたわけだが、近隣の長屋連中はもとより同業者やらの評判を探って欲しいのだ」
「ほう」
「すでに十四年になるか、小石川養生所が開所した際には人体実験されるだの使っている薬は安物で効果がないといった噂が流れてな、それは苦労したものだっ

たのよ。
今回もな、せっかく笙船先生がその気になり、余生を捧げるとまでおっしゃってくれている診療所だ。悪い噂はともかく、邪魔するような動きがどこかにないか急がねえが調べてくれ」
春貞が願った。
「そんなことならおやすい御用ですぜ、旦那」
岩次郎が胸を叩いた。

三

向島診療所は毎日明け五つ半頃から暮れ六つまでと定めていたが、いざ開いて見ると半時ほど前から待ち人がいるといった具合で笙船やおよしは休む日が持てない日が続いた。
言い出しっぺの沙代は笙船らの体を心配し、七日に一度あるいは十日に一度は休

診日を作るべきと提案した。
「先生、ご熱心に日々患者と接して下さるのには頭が下がりますが、それではお体に触るのではございませぬか」
沙代は夕餉の席でそう聞いた。
「大奥様。ご心配をおかけして恐縮じゃが、しばらくはこのまま続けてみようと思っておる。
申し上げるまでもないが、病気や怪我人に休みはありませんのでな。
その上で、休みを設けるべきかを考えてみたいのじゃ。
第一至極忙しいと言っても患者が途切れるときがないではない。
まあまあ、わしなりに気を抜くべきときは気を抜いておるでな。
それに、およしが助手とはいってもすでに風邪や軽い怪我の患者には十分な対応ができるようになっており大変助かっておる。
およしにこそたまには休みを与えたいと思っておるのじゃがな」
隣に座していたおよしは首を横に振り、
「お休みなど思いもいたしません。
わたしは北国しか知らない女子故、笙船先生のお手伝いが楽しくて仕方がないの

です。
病人や怪我人の方を前にして楽しいなどとは不謹慎でございますが、少しでも、多少でも先生のお役に立ちたいと願っておりますので是非このまま続けさせて下さい」
と頭を下げた。
そうしたやり取りを眺めていた春貞は、
「わかった。では今年一杯はいまの形で先生らにご尽力いただきましょうか母上。その頃になればまた状況が変わっているかも知れませんからな。
母上は先生とおよしが万一病気になれば多くの人たちが困るだけでなく、ご自分の発言がきっかけとなった診療所に責任を感じておるのです。
先生、その点はよろしくご高察ください」
そういうと笙船は、
「承知しておる。
大奥様の心強い後押しがなければ到底これだけの診療所など容易に作れるものではございませぬぞ。
感謝申し上げると共に器以上に我ら…といっても数人じゃがな、中身を濃いもの

にしなければならぬと思っておりますのじゃ」
そういうと沙代は、
「なんとも有り難く嬉しいお言葉でございます。よろしゅうお願いいたします」
と頭を下げ、笙船を慌てさせた。
そのときおよしが、
「春貞さま、僭越ながらひとつご相談がございます」
と話しを向けた。
「遠慮無く言ってくれ」
春貞の磊落な物言いにおよしは、
「お叱りを承知で申し上げます。
昨日兄に聞いたところによると今年の甘藷はいつも以上の豊作とか。
お屋敷でいただく、あるいは倉に備蓄される以上のものは町の八百屋などからの買い付けもあるそうですが、飢饉ならともかく米のようには売れず腐らせてしまうのは忍びない。なにか良い手はないかと言っていたのですが…」
「おお、確かに言ったな」
留吉が合いの手を入れた。

「およし、その芋がどうした」
春貞はなぜかおよしの言う先が読めたのか機嫌良く先を急がせた。
「はい。どれほどの甘藷が余るのか、わたしは存じ上げませんがそのお芋を診療所に来られる人たちにお配りする訳にはいきませんでしょうか」
「ほう…」
「笙船先生を差し置いての物言い、大変申し訳ございませぬが、診療所にこられる人々の多くは朝昼晩の食事にも事欠く人たちが多くおります。常々先生からは貧しい食生活が病気第一の原因になると教えていただきました。であるなら牛馬の飼料とか捨てる前にささやかではありますがお一人一本でも診療を受けた患者さんやお子たちに持って帰らせたく思いまして…」
およしは俯きながらそう言い切った。
「およしさん、それはよい。わしが気づかなかったことをよくぞ言ってくれた」
小川笙船が手を打った。
「なるほど。今年の芋の収穫はどのように見込んでいるのかな留吉」
春貞が問うた。
留吉は、

「ほぼ収穫は終わっていますが、申し訳ありません、まだ正確な目方を掴んではおりませんがご指示のとおりの量を倉に備蓄しても百貫目近く残りますな。うち市中から買い付けにくる量がどれほどになりますか。
旦那、いずれにしてもこの数年いろいろと工夫をいたしましたが長期保存は難しいですな」
と言い切った。
「そうか。現実的にはどの程度保存可能なのかい」
「収穫後土をつけたままのよい状態でせいぜい三ヶ月ってとこで。また蒸した後に皮を剝き、すだれ等に広げて冬場の寒い時期に天日で七日間以上干すと乾燥芋ができますが、これでも二か月そこそこです」
留吉が言うと笙船が、
「そうじゃな。後は芋から澱粉を取って加工したとしても食料としては皮付きの芋には敵わんな」
と応じた。
それまで無言で聞いていた沙代がおもむろに、
「それであればお配りするのは無駄にしない良策でございましょうな。ただし誰

彼かまわずにとなれば混乱を招きましょう。
ここはおよしさんの言われるとおり、診療所に病気や怪我でこられた方を対象といたしましょうか。
そしてな、ここが大切なことだと思いますが、押しつけがましく思われたりしては反感をかいます。
したがって診療部屋の片隅に、例えば『ご入用の方はお一人一本お持ち帰り下さい。無料ですが数がなくなったら御免』といった書付でも貼っておくと良いのではありませぬかな…」
そう提案した。
「母上、それはよろしいかも知れませぬな」
春貞が応じると、言い出しっぺのおよしが、
「旦那さま、大奥さま。ひとつだけ懸念がございます。それは食べ物欲しさに診療に来られる人がいるやも知れないことです」
と言った。
「まあ、どのような策を考えたところでなにかしらの問題は生じるものです。
春貞さまのご了承を得られたならまずはやってみることが大事ではございませぬ

か」
田宮助左衛門が言い切った。
「わかった。ではおよし、笙船先生と細かなことをよく話し合った上で留吉や奈美の力を借りてまずはやってみろ」
と笑顔を送った。
「そういえば夏穂、どうだその後子供二人への出稽古は。何ごとも無いか」
春貞は話柄を変えた。
夏穂が、武蔵岡部藩、安部（あんべ）摂津守信平（のぶひら）の姫二人に剣を教えていることを気に掛けたのだった。
「はい。お陰様にて問題となることはございません。
あれから早四年近くが経っており二人の姫様も聞き分けがよくありがたいことに私が月に二度お目にかかるのを楽しみにしているそうです」
夏穂はそう答えた。
「それはよかった。そうか安部の姫様達もそろそろ夏穂が俺たちの道場に顔を見せるようになったのと同じ年齢になるのだからな。それにしても子供は素直で良

いが、留吉は奥女中どのに苦労したようだ」
春貞はそう留吉を茶化した。
「だ、旦那。話しを蒸し返さないでくださいまし。とはいえ万之助さまのお目が常に光っておりますので、沢田さまならずともそうそうご無体なことは申さないと思います」
そう応じた留吉に、
「その後は試合はしていないのか」
春貞は突っ込んだ。
「はい。逃げているわけではございませんが、いまのところは幸いなことにそうしたお話しはございません」
「それはよかった。留吉は万之助とは違い武士ではないのだから好き好んで試合などする必要はない。
奈美を心配させるでないぞ」
春貞がそう言うと留吉と奈美は顔を見合わせ頭を下げた。
そのとき、
「何者」

という声と「ガキーン」という明らかに刀と刀が組み合った音がした。
刹那弥三郎が声や音が聞こえた門前に飛び出すと、山田浅右衛門吉時の息子である源蔵が刀を鞘に収めているところだった。
「山田源蔵さまでございましたか。いかがなされましたか」
弥三郎が心配そうに問うと源蔵は、
「よく分かりませぬがどうやら人違いのようですな」
と呟いた。
一同が座している居間に通された源蔵は笑顔で一礼した後、
「夜分に申し訳ござらんが笙船先生からご依頼の人胆丸をお持ちしました。それにしても油断も隙もございませぬな」
と源蔵がホッとして一息入れた。
話しを聞けば、屋敷の門前まで来たときいきなり二人組の侍に囲まれ無言で斬りかかられたという。
源蔵は後に父吉時の後継者となった腕前だったから初手の攻撃を難なく防いだが、そのとき「しまった。人違いだ」と呟いて闇の中に逃げ去ったという。
「ほう、人違いとな」

格左衛門が思わず呟いた。
「どなたと間違えたのでしょうかな」
留吉が核心を突いた。
「そうさな、闇夜の中だとはいえ姿恰好がまずまず似ていて二本差しであるべきなのは俺と万之助くらいかな。
格左は上背がもう少しあるが何といっても夜だ、決めつけるのは難しいな。しかし理由はどうあれ狙われていることは間違いないか…」
春貞がそう答えた。
弥三郎が、
「失礼ながら、格左衛門さんにしても万之助さんにしても狙われる覚えがございませぬな…」
というと春貞は苦笑しながら、
「ということはやはり俺が目当てか。
まさか、まだ尾張の残党がいるのではないだろうな」
そう言いながら茶に手を伸ばした。
「いや春さん、まさか尾張ではございますまい。ちょいと調べてみましょう」

そんなこともあったが、平穏な毎日を過ごしていた春貞らの元に新たに尾張の藩主となった徳川宗勝の動向が少しずつ伝わってきた。
やはり宗春の規制緩和を軸とした放漫財政は庶民らが喜んだ反面、尾張藩の財政窮乏化はかなり深刻化していた。
このため新たに藩主となった宗勝は、藩財政再建を主とした藩政改革を試みた。
もともと宗勝は幼少時から庶民の苦労を知っていることもあって、自ら倹約を率先して行い、領民を苦しめないために増税を行なわず緊縮財政政策を採用し効果を上げつつあった。
また刑法の整備にも手を染めたが寛容な一面がある一方、盗賊取締りのため死刑制度を復活させるなどの厳しい一面も見せた。
「これで尾張は再生した、いや再生すると見てよろしいのでしょうな。新しい風が尾張に吹き込むとよいですな」
感慨深い顔をして米道格左衛門が呟いた。

一

元文四年もいよいよ師走に入ったが向島診療所は発熱や咳が続く患者で午前中から昼にかけては混雑していた。

「先生、これだけ多くの患者さんが出るということはやはり流行（はやり）風邪でしょうか」

およしが中年の男に薬を処方し診療所を出た後で問うた。

「熱も高い。もしかしたらそうかも知れんな」

小川笙船は手を洗いながら答えた。

「だとすれば、先生やわたしも病気にかかることがあり得るわけですね」

「無論じゃ。およしは病気が怖いか…」

患者の来訪が途切れたからか、笙船はそんな問いをおよしに向けた。
「労咳で寝ていた私ですから病気は怖いです。
しかし昔と違いいまは笙船先生が側にいらっしゃいますので安心して働けます」
およしは事実向島診療所の助手となってから見違えるほど活発で献身的な働きを見せていた。
「それは嬉しいが、わしとて歳じゃ。流行風邪にかかってポックリ逝ってしまうこともありうるぞ」
笙船がそういうと、
「万一先生が寝込まれたら私が看病いたしますのでご安心を」
およしが真顔でそういうと笙船は無言で何度も頷きながら満足そうに薬品部屋に入っていった。
そのとき、
「ごめん。こちらが小川笙船先生の診療所でしょうか」
と声がかかった。
「はい」
およしが玄関に出ると歳の頃なら二十歳の半ばか、儒者髷の若い男が大きめの荷

を背負った旅姿で立っていた。
「患者さまですか」
およしが尋ねると男は満面の笑顔の後で、
「これは失礼。わたしは井之上新界という駆け出しの蘭方医ですが小川笙船先生にお目にかかりたく長崎からの帰路に立ち寄らせていただきました」
と言った。
診察部屋に入ることを許された井之上は薬部屋から出てきた小川笙船に深々と頭を下げて自己紹介をした。
「ほう、長崎へ遊学されましたか。それは羨ましい」
笙船が和やかに答えると井之上は、
「といっても斬った貼ったの外科でございまして、是非本道をも学びたく先生のお噂を耳にして失礼を顧みず罷り越しました」
人なつっこい顔を笙船とおよしに向けた。
ただし詳しい話しを躱している余裕はなかった。
「井之上さんとやら、お話しによれば一日二日を急ぐ旅ではなさそうじゃ。荷を降ろしてな、およしに作務衣を借りて医者としてそこに座っていなされ。で

あれば合間合間に話しができようぞ」
笙船も笑顔で答えた。
その後、診療所を訪れた患者は八人でその日の診療は終わった。
笙船は手早く後片付けをしながら、
「井之上さんや、これから宿を探すのも難儀じゃろう。
この屋敷の主人を紹介するで今夜はここに泊まりなされ。であるならゆるりと話しもできよう」
と誘った。
笙船に井之上を紹介された春貞は自分も十歳のおりに約一年長崎に預けられていたこともあり、井之上の話しに興味を持った。
ということでその日の夕餉に井之上は客として同席させられた。
一同に型どおりの挨拶が済んだ後に膳を囲みながらの雑談となった。
「これは食べたことがございませんが、実に美味しいですな。なんでございましょうか」
井之上が膳を指揮した沙代に問うた。
「お口に合いましたか。それはようございました」

「井之上さん、それがしもはじめて食すものですぞ」
田宮助左衛門も唸った。
沙代は、
「慈姑（くわい）しんきんという料理です。これまた富四郎からの受け売りですが、皮を剝いた慈姑をすりおろし、適度の小麦粉と溶き卵を混ぜてつみれのように丸めましてな、油で揚げます。そしてだし汁にからめたものですよ」
と言いながら自らも口に運んだ。
「長崎に向かわれたのはいつ頃ですかな」
春貞が問うた。
「はい。二年前のことでした。
幼少の頃から医学に興味を持ちひとかどの医者になりたいと思いました。次男坊の私は幸い両親の理解を得て近隣の中尾仁斎という先生の下働きから始めました。
丸一年ほどでしたが残念ながらその間、医療のことはほとんど教えて貰えずたまたま耳学問の末に長崎に行けば阿蘭陀（おらんだ）の最新医療が学べると聞き、稼業の回船問

屋を飛び出して一人長崎に向かったのが二十三の時でした」
井之上が話し始めると沙代が、
「失礼ではございますが、ということはいま二十五歳ですか」
と問うた。
「はい。二十五歳の若造でございます」
「ほう。それで学問の方はいかがされました」
田宮助左衛門が茶を飲みながら聞いた。
「はい。無謀もいいとこで右も左も分からないまま二か月ほど途方に暮れていましたが、幸い阿蘭陀（おらんだ）稽古通詞になりたての吉雄定次郎（後年の吉雄耕牛（こうぎゅう））というお人に出会い、ライネ先生やエンゲルベルト・ケンペルというかつての長崎商館医と医学問答を行ったという先生方の門下生を紹介していただき、様々な方のご尽力を得て何とか阿蘭陀の治療…外科でございますが…の初歩を学ぶことができました」
「それは上々」
笙船が目を細めた。

ちなみに井之上新界が知り合った吉雄定次郎（後年の吉雄耕牛／諱は永章、号が耕牛）は寛延元年（一七四八年）に二十五歳で大通詞となり、その後も年番通詞、江戸番通詞（毎年のオランダ商館長の江戸参府に随行）をたびたび務めた。通詞の仕事のかたわら、商館付の医師やオランダ語訳の外科書から外科医術を学ぶ。

またオランダ語、医術の他に天文学、地理学、本草学なども修め、蘭学を志す者には家塾である成秀館にて教授した。

吉雄耕牛に学んだ蘭学者・医師は数多く、青木昆陽・野呂元丈・大槻玄沢・三浦梅園・平賀源内・林子平・司馬江漢・合田求吾・永富独嘯庵・亀井南冥など当時一流の蘭学者は軒並み耕牛と交わり、多くの知識を学んでいる。

中でも前野良沢・杉田玄白らとの交流は深く、「ターヘル・アナトミア」の和訳を目指して二人が携わった「解体新書」に吉雄耕牛は序文を寄せていることはよく知られている。

無論それはまだまだ先の話であるが…。

「しかし井之上さん。長崎で修行されてきたお主がなぜ笙船先生をお尋ねになっ

たのですか」
堀田万之助が問うた。
「はい。長崎で学んだといえば聞こえはよろしいですが、経験も浅く勉強したことを生かすまでには至っておりません。
それに阿蘭陀医といっても金創や腫れ物の治療がほとんどでして本道（内科）に匹敵するものを学ぶには至りませんでした」
「なるほど」
「しかし日常の患者の多くは金創や腫れ物の治療だけを求めている人ばかりではございませんし、医者として私は半人前にもなっていないことを身をもって感じております。
実は小石川養生所のことは実家の小田原は勿論長崎にも伝わっておりましたが、長崎から戻る途中で笙船先生がこちらに診療所を建てられたことを知り、本道をご教授願いたく矢も楯もたまらずお伺いした次第です」
井之上が言葉を切ると笙船は、
「わしは阿蘭陀の医学をほとんど知らんが、蘭方の立場からすれば漢方は古くさいものと言われておるがのう…」

月卷 吉貞 2_ 修正版 新表紙 hagoromo

と井之上を見た。

「はい。ほとんどの蘭方医と自称する先生方はおっしゃるとおり漢方を批判されますが、僭越ながら現在の紅毛流（こうもうりゅう）医学も学問的裏付けを得たものというより、阿蘭陀医師との問答や見よう見まねといったところなのです。

阿蘭陀の医書を読み理解し、阿蘭陀医師の弟子となって本格的な治療を学んだ方はまずおりませんので若造が申すのも可笑しいですが、大変心許ないものがあるのです」

「口を挟んで申し訳ありませんが、その阿蘭陀国の医術は進んでおるのですか」

およしが問うた。

「さよう。実際の阿蘭陀医術全般には見るべきものが多いと思います。

我が国はご承知のように現在阿蘭陀国のみ長崎にて交易を許されております。しかし阿蘭陀商館医の本来の職務は、商館員の健康管理でございますから館外に出て一般の民を診療したり、交遊することは基本禁じられております。

とはいえそれでもときには貴人を診療されたり、長崎奉行の許可を得て我が国医師たちの質問に答えたりしておるのを見ますと人間の体の真実についての認識に

我々は大きく遅れを取っているように思えてなりませぬ。
ただひとつ救いは公方様が異国の書、特に医術に関わる禁書令を緩和されたおかげで少しずつ蘭書が手に入るようになったことですが…」
井之上はおよしにそう語った。
「なるほど。ということは井之上さんは阿蘭陀の言葉がわかりますのか」
助左衛門が問うと井之上は首を横に振りながら、
「先の通事である定次郎さんの助けを借りて勉学は試みましたがいまだほとんど分かりませぬ。
通事のお役目自体、体系的に阿蘭陀の言葉を学ばれてはおりませんので基本的な意思疎通はできても書は読めません。
それに…あっ、お食事が終わられたのでこういった話しをしてもよろしいですかな」
と断りつつ、
「私は手足や体の金創などを治療し、時に縫うことは多々やってきましたが、人の体の中を見たことがございません」
「ふむ。腑分けのことじゃな」

「はい。そもそも人の体の仕組みを知らずして病気や死因を特定するのは本来無理があると先達から教わりましたが、ほとんど役に立っておりませぬ」
「ふうむ」
「失礼ながら先生は腑分けをご体験されたことがございましょうや」
井之上が笙船に問うた。
「残念ながらこれまでその機会がなかったのう。
無論本道の医師の立場から申せば腑分けをせずとも病理の理屈は知られておるが、承知のように願ったからといって腑分けに立ち会えるものではない。
ともかく噂によれば我らが学んできた五臓六腑のあり方と阿蘭陀の医書にある腑分けの図があまりにも違うと聞いたことがある。
もしかしたら異国の人間と我らとは体の仕組みが違うのかと考えたこともあったがお主の申すとおり、医の道を突きつめるならばじゃ、実際に人の体がどうなっているか、古い書物に頼らず腑分けを体験すべきであろうな」
笙船が答えると沙代が、
「それはまたおぞましいことでございますな」
と声を上げた。

「大奥さま。確かにおぞましいことではありますが、我々は今だ人の細かな働きを知るに至っておりませぬ。
わしも医者のはしくれ、治療や診断の糧となるなら腑分けも経験したかったですな」
小川笙船がしみじみと言った。
「しかし先生、我々の治療方法を阿蘭陀の医者が学んでいくといった例もございます」
と井之上が言った。
「ほう」
「延宝二年（一六七四年）出島の商館医として来られたライネという阿蘭陀医師は痛風治療と鍼灸術を研究して持ち帰ったそうです」
「ふむ。常々およしに申しておるが、医者の知ってることなどほんの僅かよ。それでも様々な知識を集めて己でよく考え、そして実践してみないことには始まらぬ。この向島診療所とて試行錯誤の毎日ですぞ」
「長い間お医師としてお勤めの先生でもそうであるなら私など絶望的ですな」
「井之上さんや。お前さんはその鍼灸術は学んではおらんのかな」

笙船が問うた。

「長崎へは阿蘭陀医学を学びに行ったわけですが、食うために駆け出しの医師として治療の手伝いをいたしました。

とはいえ患者の多くは本道のお医師を求め、時に鍼灸治療を求める者が多ございましたので入り口だけでもと学んで参りました。鍼灸の道具も持参しております」

「それは頼もしい。わしの知識も些か錆が出ておる。順次教えて貰おうかのう」

笙船と井之上新界との話は永遠に続きそうだった。

春貞は、

「井之上さん。笙船先生から本道を学ぶとなればそれこそ一月や半年でどうなるものでもございますまい。

もしあなたがお望みであるなら、そして笙船先生のお許しがでるならしばらく我が屋敷に逗留なさり、日々先生とおよしと共に治療に当たられたらいかがかな」

と声をかけた。

「あ、ありがとうございます。初めてお目にかかったばかりだというのに暖かいお心遣い御礼申し上げます。

もしお許し願えるなら是非そうさせてくださいませぬか」
「よし。それでは今日からわしの部屋で一緒に過ごすことにしようぞ」
笙船が言い切った。
井之上新界は懐から汚れた巾着を取りだし春貞の前に差し出した。
「なんの真似ぞ、井之上さん」
「はい。これは長崎で二年間ささやかですが働き貯め込んだ金子でございます。とはいっても三両にも満たない額ですが、せめて滞在費としてお納めいただけませんか」
井之上はあらためて頭を下げた。
にっこり笑った春貞は、
「井之上さん。お気持ちだけいただきましょう。
これはあなたの二年間のご苦労の賜物。大事になさいませ。
またここの診療所でお働きいただくなら給金も考えます。別途そちらの田宮助左衛門とご相談いただきたい」
と井之上に押し返した。
一同が居間からそれぞれの部屋に散る際に春貞は皆に気づかれぬよう弥三郎に目

配せをした。

翌日朝餉の席でまた一同の顔が揃った。
膳の準備が整う前に井之上が、
「昨日は聞きそびれましたが、こちらのお屋敷は松平春貞さまのお屋敷であることは分かりましたが、いったいどういったお屋敷なのでございましょうか。どこかのお旗本、いや下屋敷かな。それも違うようですな…」
と誰にともなく問うた。
「はじめてのお方は皆それを問われますがな、一言で納得のいくご説明ができないのが歯痒いところです。およしもいまだによく分からないと笑っておりますぞ」
留吉が笑いながら答えると格左衛門も、

「一言どころか一か月滞在してもよく分からん屋敷だと思いますな」
と苦笑いした。
「となればなにか、特別なお役目を仰せつかっているわけですかな。
いや、余計なことで申し訳ありませぬが不思議なというか、どこか長崎で体験した阿蘭陀のお屋敷みたいな感じもいたしましてな」
井之上新界は首を捻った。
「阿蘭陀の屋敷みたいな…というのはどういうことですかな」
笙船が問うた。
「私は商家の生まれですが長崎でお武家の友人も出来、幾多のお屋敷に出入りさせてもらいましたが江戸よりはましだと友人は申すものの堅苦しいことこの上ないのに驚きました。それがお武家の格式だと申すのです」
「ふむ」
「対して阿蘭陀人のお屋敷に一度招かれましたが、家事の仕組みが違うのは当然としても、家族の人たちには常に笑顔があり偉ぶったりする人はほとんどおりませんでした。
特に女子も子供も男子と同じように言葉を交わしますし行動します。

当家もお武家のお屋敷にもかかわらずそんな優しい気風が見受けられたのです」
「なるほど。おっしゃることは分かるが、それがしたちはその阿蘭陀の屋敷を知らぬから何ともいえませんな」
格左衛門がいうと留吉も、
「阿蘭陀云々はともかく、あっしも渡り中間として色々なお屋敷に奉公しましたがな、旦那たちはそれらとはまったく違う態度であっしらに接してくれたのでびっくりしましたぜ」
というと春貞は、
「そうか。まずは褒め言葉と受け取っておこうか、なあ幸江」
「うれしいお話しですこと」
幸江も沙代も頷いた。
食事が終わり、
「さあさあ、それではわしたちは診療所の準備に向かおうかのう。
井之上さんや、今日もどのような患者が飛び込んでくるか分からんが一緒にな、手伝ってくだされ。
およしさんや、診療所のあれこれをな井之上さんに教えておくれ」

小川笙船はそう言い残して腰を上げた。
その後に続き、およしと井之上新界が春貞らに頭を下げて続いた。
三人の姿が見えなくなると弥三郎が春貞に耳打ちした。
「念のため昨晩はあの御仁の一挙一動を見張っておりましたがな、いまのところ不審な言動はございませぬ」
「ご苦労でした。こういう時節だからどのような者が隠れ蓑を使って屋敷に入りくるやも知れぬ。
すまんがとっつあん、しばらくは目を離さないでくれ」
「かしこまりました」
春貞と弥三郎が頷きあった。

向島診療所は通常は三人体勢、すなわち小川笙船、井之上新界、そしておよしであったが混雑時には秋子か奈美が加勢するという毎日が始まった。
確かに井之上が加わったことで診療の効率が見違えるように良くなった。
なぜなら本道（内科）は勿論笙船の専門だが、怪我や喧嘩などによる傷の処置は井之上が担当するという分担が功を奏したからだ。

診療部屋も衝立を置き、一度に二組の患者を診ることができるようにと工夫した。

また向島診療所は開設当時から外科診療に必要な道具類が揃えてあったが、特殊なものは井之上が長崎から持ち帰ったものを使った。

ただし薬に関してはそのほとんどがいわゆる漢方に頼らざるを得なかったが、特に支障は無かった。

また内科の患者も外科治療の患者がいないときには井之上が率先して診察に回った。

それは本道の医療を根本から学ぶためだから真剣味が違ったし、笙船にしても適切な助言と指導はするものの直接手を下すことが半減したので体力的な負担も軽減でき喜んでいた。

その日の開始と同時に飛び込んで来た男は左足の膝から下に目立つ傷と打撲の痕があった。

「お前さんは以前咳が酷いと来られたお人だったな。今日はどうされた」

笙船が問うと三十過ぎと思われる男は頭を掻きながら、

「面目ねえ。昨晩飲み過ぎちまってさ。その上帰りに仲間の喧嘩に巻き込まれち

まってこのざまというわけでして。大したこたあねえと思ったんだが痛くて眠れねいもんですから…」
と訴えた。
「ふむ。上の方の傷は縫った方がよいかな井之上さんや」
「そうですね。では私がやりましょう」
井之上が言うと男は、
「笙船先生。この人初顔だけど大丈夫でしょうな。まだ若いしさ」
と腰が引けている。
笙船は笑いながら、
「大丈夫じゃ。長崎でこうした治療を学んできたお人ぞ。わしより上手いわい」
と笑った。
井之上の指示でおよしは傷を消毒し数針縫う際に手伝ったし薬も手際よく整えた。
帰りがけに男は部屋の端に甘藷が数十本積んであるのを見て、
「先生、これ本当にもらっていいのかい」
と聞いた。

「ああ、その代わり一人一本だ」
井之上の言葉を聞き終わらないうちに男は、
「あ、ありがてえ」
と大きめの一本を懐に入れて飛び出ていった。
続いて入ってきたのは三囲神社の奥にある常泉寺近くに住む農家の嫁だったが荷が崩れて額に傷を負ったと駆け込んできた。
早速井之上が女の前に座し、
「お名前は」
「きくといいます」
「それではきくさん、傷を拝見します」
というと女は、
「あら、いつもの先生とは違って今日は若くていい男だよ。そんなに見つめられては顔を上げられないよ」
と照れた。
「きくさん、よければ甘藷を一本お持ちになりませんか」
帰り際、包帯を巻いた額を押さえている女におよしがそう声をかけると、

「ありがたいけどさ、ただで治療してもらってお土産つきじゃあ罰があたるよ。今日は遠慮しておきますよ」
と頭を下げた。
その頃母屋では、春貞が気がつくと弥三郎の姿がなかった。

明日はいよいよ大晦という昼に須田町の岡っ引き、岩次郎がやってきた。
「旦那、これは江戸前の佃煮なんですが沢山貰ったのでお裾分けです。是非味見していただけませんかな」
と包みを春貞に渡した。
「おお、佃煮は俺も母上も大好物よ。ありがてえ。しかしゲジゲシの親分から土産を貰えるとはな…」
春貞がにやりとしながら言うと、
「旦那、そうそう虐めないでくだせい。
近所の隠居ですがね、あっしがちょいと揉め事に口を挟んでやったのを喜んでくれて沢山持ってきてくれたんでさあ。
それはともかく旦那、今日はちょっと遅くなったが向島診療時の噂をいろいろと

集めてきましたんで」
と言いながら居間に座した。
「それはご苦労だった。
で、どうだ悪い評判や噂はあるか」
春貞も些か心配そうに問うた。
岩次郎がいうには向島診療所に世話になった患者は勿論、その家族や長屋回りといった者の印象は当然とは言えほとんどが笙船先生の診療所に足を向けて寝られねえといっているほどだったという。
これらの人々から悪たれ話はまったくなかったがひとつ気になる物言いがあったという。
「旦那。あっしがちょいと気になったのは、こちらに世話になった患者ですがね、金もない自分らに親身になって診てくれ有り難いが、無料と分かって次回も願うのも厚かましいようで遠慮しちまう…という奴らがいたことでさあ」
岩次郎が春貞の顔を覗き込むようにして言った。
「なるほど、そうした遠慮があるか」
「へい」

「どうしたものかなあ」
春貞も腕を組んだ。
「それはそれとしてだ。同業者らはどんな具合だ」
「まあ、申し上げるまでもなく同業者といっても様々でして。しかし思ったより悪し様にいう者はいませんな。それに…」
「それに、なんだ」
「へい。向島診療所が扱う患者らはもともと金を請求してもまともに払えない連中だと最初から見下してまさあ。だからそうした患者は奴らにはお客さんではないんで」
「だからこちらに通うようになっても良いと申すか」
「だ、旦那。あっしが言ってることではございませんで、流行（はやり）医者らが言ってることでして」
「ふうむ。だとすれば邪魔しようと考えている奴らはまずはいねえということだな」
「へい。そんなところで。

それと、そもそもお医師が養生所初代肝煎りの小川先生だということ、そして後ろに睨みを…いやこれは失礼、後援者が旦那だということが知れてまさあ。誰も手など出しませんぜ」

「ということは、さきほどの話しの…」

「遠慮して来るのをためらう者たちの対処でございますな」

「そうよなあ。躊躇っているうちに病気が悪化してということもあるだろうからな」

春貞と岩次郎は考えあぐねていたが、すぐに妙案が浮かぶ問題ではなかった。

岩次郎が帰ると弥三郎が戻っていた。

「ゲジゲジの親分は随分と使える男になってきましたな」

と言いつつ、

「春さん。井之上さんは信用されて宜しいと思いますな。ちょいと小田原の実家まで調べに走りましたがわしらに話したことに嘘や間違いはございませんでした」

「そうか。ご苦労でした」

春貞が弥三郎を労った。

「それはそうと別件なんですがな」
弥三郎いうには先般門前で山田源蔵に斬りかかり「人違いだ」と逃げた二人は田原町に新当流笠原九一郎の名を掲げた道場に出入りする連中だという。
「ほう、俺に何の恨みがあるのかい」
春貞が弥三郎に問うた。
「どうやら春さんだけを目当てにというわけではなさそうなのが厄介でして」
弥三郎の調べによれば、昨年春先に竹屋の渡しの騒動があったが、刀を振り回して一人の死者と五人の重傷者、そして二人を大川に落とした無頼漢二人がその道場の常連だったらしい。
「ということは、二人の敵でも取ろうというわけか」
春貞が呆れたという表情で弥三郎を見た。
「というわけで春さん、奴らはわっしも含めてこの屋敷の者達に一矢報いようとしているのかも知れませんな。
山田源蔵どのを屋敷の者ではないと知っているだけに我々のことをすでに調べ上げているかも知れません」
と言った。

「しかし、新当流といえばあの塚原卜伝の流れを組むという流派かい」
春貞が問うと弥三郎は、
「春さんには釈迦に説法でしょうがな、そもそも卜伝ご自身は流派などには無関心だったと伝わっていますから卜伝流とか新当流といった名は後世に門弟達が付けたものだというのが相場になってますな。
それ以前に卜伝は『強きとてをのが力に任せつつ柳の枝に雪折れはなし』という首を残されていると聞きますから、あのような無頼の奴らには似つかわしくない流儀で」
と笑った。
「なるほど、流派はともかくろくでもない奴らのようだな」
春貞も考え込んだ。

その日の夕餉時に春貞は小川笙船に岩次郎が持ってきた話しをした。
「そうか。養生所のときのような邪魔ははいらんか。有り難い事じゃ」
と酒を口に運びながら笙船は破顔した。
「懸念はその遠慮して来ないというのが心配なんですが先生」
春貞がそういうと、
「春さんや、それは心配し過ぎというものじゃ。
例えば子が熱を出し喘いでおれば体面やらを脱ぎ捨ててまずは医者に担ぎ込むのが親心というものじゃ。
また己の病気や怪我もな、具合が悪ければ必ず通ってくれるものよ」
と笙船が言った。
「そうですな。遠慮できるのはそれだけ治療の効果が出て、具合がよくなった者の言葉ではないでしょうかな、春貞さま」
井之上もそう言い切った。

「先生方からそう言われればなにか安心できるような気持ちになったが、いかがでしたか今日の具合は」
と話柄を変えた。
「一日の通院患者は、そうだな六十人ほどだったかな」
笙船が言うとおよしが、
「先生、六十二人でございました」
と正確な人数を口にした。
「そうか。わしと井之上さんは分担して治療に当たったが、およしが一番忙しかったに違いない」
「いえ、午後から一時は秋子さまがお手伝いくださいましたので…」
「そうじゃったのう。どうじゃ、秋子さんと奈美さんは慣れましたかな」
およしの言葉を受けて笙船は秋子と奈美の働きを労った。
秋子が箸を置いて、
「診療所のお役目は他のお役目と違いまして誤ると即人の生き死にに関係いたしますので緊張の連続です。
しかしおよしさんは一日中患者さんたちと相対しておられますがなかなか真似の

出来ることではございません」
そう言いながら奈美に同意を求めるように顔を向けた。
奈美も、
「おっしゃるとおりです。それにおよしさんは患者さんに対して常に適切でお優しい言葉を投げかけていらっしゃいます。
病気や怪我で通院される方はそれぞれ大きな不安を抱えていらっしゃるわけですが、およしさんに言葉を掛けられると皆さんほっとしたように平常心に戻っております。
これまた誰でもできることではございません」
と続けた。
当のおよしは、顔を赤くして俯いている。
井之上も、
「いやはや、長崎でも大切なのは患者の不安や焦りを軽くすることだと教えられましたな。
それには医師の態度と言葉遣い、話し方がとても大切なのだと言われましたが理屈は分かっていてもこれがなかなか難しいのです。

その点はたしかにおよしさんは天性の才をお持ちだと思いますぞ」
およしは嬉しそうに、それでも顔を静かに横に振ったが、兄の留吉は嬉しさに感極まりすでに涙目になっていた。
そのとき、和やかに座していた沙代がふわっと箱膳の前に突っ伏し食器が散乱した。
「母上！」
春貞は沙代に駆け寄り腕に抱き留めたが沙代の瞳は宙をさまよい、口から涎が垂れた。
己がどうなったのか戸惑ったようすで手を握りしめ痙攣していた。
「春貞さま、大奥様を揺すられませんように。まずは静かに横にされてください」
井之上が声を上げ笙船を振り返った。
小川笙船は、
「皆の衆。大奥様の座敷に夜具を敷いておいてくれ」
と命じて横にされた沙代の脈を取り井之上に、
「中風じゃな」

と言うと井之上が頷いた。
「母上、母上…」
「婆さま」
「大奥さま、お気を確かに」
取り乱した幸江や格左衛門、夏穂や理子らの声が響く中、沙代は静かに自分の座敷に運ばれ寝かされたが意識はあるように思えた。
「先生、笙船先生、母上を母上を何とかしてくだされ」
さすがの春貞も小川笙船と井之上新界に取りすがるように哀願したが二人の医者は顔を見合わせたものの無言だった。

一

沙代が倒れたのは大晦を前にした夜だった。
「正月の料理をと、お元気に立ち振る舞っておられましたのに」
料理人の富四郎が嗚咽しながら口走った。
夜通し、春貞と幸江そして夏穂が交代で枕元に詰め、小川笙船と井之上新界がこれまた交代で仮眠しながら側に座していたが、沙代は笙船が煎じた薬を何とか飲み下し落ち着いてはいたものの言葉は言葉にならず左半身は麻痺状態だった。
大晦の日、夏穂が実家の長兵衛に知らせ、長兵衛がまた仲間内に知らせたのか江戸の商家の主人達が次々と見舞いに駆けつけた。
しかし笙船らの命で沙代には会わせずに客間で春貞が相対していた。
同席したのは田宮助左衛門であった。

「ご容体はいかがでございますか」
長兵衛が一同を代表するかのように問うた。
「大晦でてんやわんやの時だろうにすまねえ。
中風とのことだ」
春貞は神妙に頭を下げたから一同が慌てた。
「意識はあるが言葉が喋れねえし左半身が麻痺している。
俺たちの言うことは分かっているようにも思えるが反応が乏しいので母上の意志が分からんのが辛い…」
春貞がそう言いつつ、
「とはいえ、承知のようにここには小川笙船先生がおられるし、過日長崎で阿蘭陀医学を学んできたという井之上新界という者もおる。
ここはお医師たちにお任せするしか策はねえわけだが、つくづく俺は親不孝だと思い知ったぜ」
そう言いながら春貞は天井を仰いだ。
「なにをおっしゃいますか。春貞さまの大奥様思いはここにおる誰もが存じておることでございますよ」

相模屋の隠居清右衛門が慰めた。
「ありがとうよ。しかしな、いま思うと俺は母はいつまでも生きているもんだとどこかで思っていたのかも知れねえ。困った倅だ」
春貞が自戒を込めた呟きをした。
越後屋の三井高房が、
「春貞さま、つきなみな物言いでございますが、なにか不足の物、ご不自由などがございましたら何なりとお申し付けくだされ」
と言うと、
「正月だ。あれこれと気が急いてもこればかりは仕方がねえが、万一そんなことがあればこの助左衛門から願うことになるかも知れねえ。よろしく頼む」
春貞が再び商家の旦那衆に頭を下げた。

幸いといっては語弊があるが、向島診療所は大晦から正月三日まで休診としてあったから、笙船と井之上は交互に沙代の側を離れずにいられた。
沙代が寝ている座敷には井之上新界と幸江、そしておよしと秋子、奈美がこれまた交代で付き添っていた。

「若奥さま。大奥さまのご容体がもうしばらく落ち着かれましたら醒脳開竅（いのうかいきょう）の鍼灸治療を試みたいと存じますがお許しを願えましょうか。
薬湯は笙船先生がご工夫なされておりますので私の出る幕はございませんが、少しでも左半身の麻痺が軽減できるのではないかと思っておりますので」
と問うた。
「ありがとうございます。わたしにはどうするのが良いか正直わかりません。笙船先生と井之上先生にお任せいたしますのでなるべく母の負担にならぬようお願いいたします」
と願った。
そんな重苦しい屋敷の空気だったが、元文五年（一七四〇年）が明けた。
春貞の屋敷に出入りの商人やらは状況を知ってるだけに例年のように新年の挨拶は遠慮したこともあり静かな時が過ぎていった。
沙代の容体はほとんど変わらずにいたが、笙船と井之上はもし再度の発作に見舞われれば命を失うだろうと考えていただけにその一言一言は慎重にならざるを得なかった。

三日目の昼、玄関に、
「ごめん」
という勇ましい声が聞こえた。
ちょうど春江館から母屋に入ろうとしていた米道格左衛門が近づくと、来客は尾張藩邸上屋敷の大道寺五郎と中尾虎吉の二人だった。
「これは米道さま。新玉の年、おめでとうございます」
と満面の笑顔で挨拶された格左衛門は後ろを振り返り、
「ようまいられた。しかしな時が悪い…」
「なにかございましたので」
二人は沙代が倒れたことを知る由もなく、やっとこうして春貞の屋敷を大手を振って訪れることができたと喜んでいた。
「昨年末にな、大奥様がお倒れになったのでな、目出度くはないのじゃ」
格左衛門が済まなそうにいうと二人は、
「知らぬ事とはいえ大変ご無礼いたしました。
格左衛門さま、また出直してまいりますので春貞さま、幸江さまに宜しくお伝えくださいませ」

そう言いながら頭を下げて踵を返した。
格左衛門の知らせを聞いた春貞は、
「それは悪い事をしたな。時期を見て再訪してもらおうぞ。
しかし彼らが我らの屋敷に足を向けることができるようになったのは喜ばしいことよなあ」
と呟いた。

二

正月四日から向島診療所は予定通り開くことになった。
沙代の容体を見ながら、治療を続けながらの診療所だったが小川笙船一人だったら至極難しいことになっていただろう。
しかし若い井之上新界が加わったことでなんとか診療所を続けることが出来ていた。

「一端開いた診療所だ。こちらの都合で休んでばかりはいられんだろう」
という春貞の思いもあったが、一時と違って秋子や奈美そしておよしといった女手が増えていたことも幸いであったといえる。
とはいえ春貞はともかく格左衛門や万之助にとっては剣術の稽古しかやることはなく時に丸々一日春江館で汗をかいていることもあった。
一休みしたとき格左衛門は、
「そうだ、今更遅いが先日大道寺五郎と中尾虎吉が来たとき、せめてこの道場で相手をしてあげればよかったな。俺もあのときは心の余裕がなかったのだ」
と後悔の言葉を発すると万之助は、
「まあまあ米道さま、彼らは稽古を喜ぶような奴らではございませぬ。きっと美味い物でも食べたいとやってきたに違いありませんぞ」
と笑った。
「そうかも知れんが、春さんも言っていたとおり奴らが大手を振って我らのところに来られるようになったのであれば喜ばしいことよ。
尾張も宗勝様が藩主になられたことで新しい風が吹き込むようになるに違いあるまい」

格左衛門は木刀を素振りしながら呟くと、元尾張藩上屋敷剣術道場の師範であった万之助も大きく頷いた。

新年早々だったが診療所は混雑していた。

食べ過ぎたという者、熱を出した者、凧揚げで走り転んで膝を怪我した子供がいるかと思えば目が痛いという者、新年早々夫婦喧嘩の末に投げられた茶碗が額に当たったという者などで混雑した。

「市井の人たちも正月くらいゆったりとできんもんですかな」

若い井之上が思わず零すとおよしが、

「まあ先生。正月から診療を開始しているお方の物言いとは思えませぬな」

と笑った。

「次の方どうぞ」

のおよしの声で診療部屋に入ってきたのは水戸藩下屋敷の朝比奈久兵衛だった。

「あら、確か水戸のお方でしたね。いかがされましたか」

およしの問いに朝比奈は、

「笙船先生はお留守でございましたか」

と逆に聞いた。
そのとき、薬部屋から、
「わしならここにおるぞ。そろそろ交代の時刻でな」
と当の笙船が顔を出した。
笙船は朝比奈久兵衛を見て、
「今度もお主自身のことではなさそうじゃな。まあお座りくだされ」
と苦笑した。
朝比奈は笙船の前に両手を突き、
「過日は物騒なものをお見立ていただきありがとうございました」
と言いながら懐から袱紗に包まれたものを取りだして笙船の前に差し出した。
それは二十五両の切り餅二包みの五十両であった。
「なんですかなこれは」
笙船はそう問い返したが事情を知らぬ井之上は何ごとかと驚いている。
「藩の恥はこれ以上申し上げられませんが、過日先生より包みは毒薬だと判定いただきましたことからお陰様にて大事になる前に殿のお命をお守りすることが出来ました。

これは決して口止め料といったものではなく僅かで恐縮ですが心よりの御礼のつもりでございます。お納めいただけませぬか」
小川笙船は躊躇うこと無く、
「分かり申した。ありがたく頂戴し庶民たちへの治療に使わせていただきましょうぞ」
と答えた。
朝比奈久兵衛が一仕事終えたという感じで戻っていくと井之上が、
「先生、事情は存じませんが毒薬の判定で五十両でございますか」
と目を丸くしている。
「お金がない方からは取らず、払いたい方からはいただくというのが当向島診療所の方針でございます。ねえ、笙船先生」
およしがしれっと言うと笙船が高笑いしながら、
「そういうことじゃ。でな、およし。この金はいつものように助左衛門さんに預けてくれ」
と願った。

松も取れた一月二十日の昼時、田宮助左衛門が日本橋や浅草の商人たちと仕入の話しを進めていたとき門前がにわかに騒がしくなった。
ちょうど庭掃除をしていた留吉が開き門まで見に行くと立派な乗物が留まり、騎馬が数十騎とこれまた三十人ほどの武士達が整然と控えていた。
乗物から出てきたのは尾張藩八代藩主となった徳川宗勝その人であった。
薬種問屋蓬莱屋の主人多平が、
「ど、どなた様でございますか」
と助左衛門に問うた。
「どうやら尾張の殿様のご様子ですな。多分大奥様のお見舞いに参られたのでございましょう」
そう助左衛門が答えると商人たちは次の言葉を飲み込んだ。
ともあれ慌てて春貞に知らせた留吉だったが、早々とその後を追って当の宗勝が玄関までやってきた。
「いかがされましたか殿」
春貞も何ごとかと驚いたが宗勝は、
「兄様。母じゃが、沙代さまが倒られたと聞いたでご様子を見に参りました。ご

容体はいかが…」
とこれまた自ら上がり込んだ。
「これはまた驚きましたが、どこでお知りになられましたか」
春貞は沙代の寝ている部屋に案内しながら問うと宗勝は、
「正月早々に藩邸の大道寺と中尾がこちらに伺ったおりにお聞きしたとの話が余に、いやそれがしにも伝わりましてな。
とにもかくにもお見舞いをと伺った次第」
と言い切った。
沙代の容体はほとんど変わらなかったが、苦痛を感じさせない表情をしていたものの相変わらず言葉を発することができずその美しい顔の口元も左側が些か歪んでいるありさまだった。
昼餉を終えて診療時へ向かおうとしていた笙船と井之上の他、座敷には幸江が座していた。
静かに枕元に座り込んだ宗勝は躊躇なく沙代に、
「代五郎でございます。お見舞いにまいりましたぞ」
と声をかけた。

そのとき、沙代はかあっと目を開き、少し動かせる右腕を宗勝に差し出そうとした。
宗勝は一膝進んで沙代の痩せた背と頭を支えて臥所の上でその半身を抱きかかえた。
「沙代さま。いや、母じゃがお元気でございませぬと我らを叱ってくれる者がおりませぬ。お気を確かに…早くお元気になられてくださりませ」
御三家筆頭格の尾張藩主が嗚咽しながら訴えるとその意が伝わったか沙代の瞼が承知とでもいうように一度ゆっくりと閉じられ、再び開かれたその両眼からは涙が落ちた。
静かに沙代を寝かした宗勝は笙船らに会釈をして立ち上がり、春貞を誘って部屋を出た。
井之上新界は立ち上がりながら、
「若奥さま。どなたさまでございますか」
と問うた。
「尾張の殿様でございます」
との答えにこれまた井之上が呆然と立ちすくんだ。

「若奥さま。殿さまは『母じゃ』と申されておりましたが、大奥さまは本当の母様なのですか」
当然の疑問を井之上は問うた。
「宗勝様は代五郎様と名乗られていたご幼少の頃にはご身分の低いご家臣の屋敷で育てられた時期があったと聞いております。
そのおりに春貞さまや格左衛門さまと悪戯が過ぎ、春貞さまの乳母であった義母に随分とお灸をすえられていたとのことです。
しかしやはり母恋しさに幼い代五郎様にとって沙代さまは本当の母親のような存在だったのだと聞いております」
幸江は義母より聞いたことを思い出しながら答えた。

「兄様。正直なところ母じゃのご様子はいかがなので」
春貞の離れの座敷で二人だけの会話だった。
「残念ながらいまのところ回復の手立てはないとのお医師の見立てでございます。またここだけの話しですが再び発作の可能性もあり、であれば今度は命がないと思われます」

春貞は正直に述べた。
宗勝は悲痛な顔をしてしばし俯いていたが、
「兄様。なにかできることがあれば言ってくだされ。そして例え交代で国元にいても何かございましたら必ず、必ずお知らせくださいますように」
と言いながら玄関を出つつ春貞に頭を下げ、
「しばし母じゃの容体を見届けたいものですがそれが許される立場ではございませぬ。兄様、申すまでもなき事を口にいたしますがお大事にされてくだされ」
そう言いながら颯爽と開き門を出て乗物に乗った。
春貞らが静かに見送り、それを離れて眺めていた商人たちが驚愕していた。

向島診療所がいつものとおり開所したのと同様に春江館も二十名の女弟子が稽古を始めていた。

商家の娘達が道場に入門し「女道場」などと呼ばれはじめたのは享保十年五月からのことだった。
それからすでに十四年も経っているわけで、当時からの弟子達は嫁に行ったりとほとんどが道場を去り、現在も続いている者は薬種問屋蓬莱屋のなみと相模屋清右衛門の弟の孫娘幸の二人だけで後はここ数年の間に入門した女衆に変わっていた。
そのなみと幸も実は婿を迎えた後も春江館へ通っていたのだった。
それらの女衆に交じり十一歳になった春貞・幸江の一人娘の理子も一人前の剣士として頭角を現していた。
日々の稽古は夏穂が指導に当たっていたし、古株のなみと幸も若い女衆たちを丁寧に導いていたが時に幸江が、そして格左衛門が見所に座して睨みを利かせていた。
そろそろ十代の女子たちの稽古が終わり、帰り支度をする時刻となったとき異変が起こった。
春江館道場に通じる小径を十人の侍が小走りに入ってきて道場の式台の前で怒鳴った。

「ここが春江館とかいうけちな道場か。最近少々つけ上がっておると聞いたで新当流笠原九一郎門下が天誅を下してくれるわ」
といいながら土足で入り込んできた。
うち一人はその奥に別の建物があるのを見て診療所に足を向けた。
見れば道場には女衆しかいなかったこともあって舐めてかかったようだ。
しかし幸江はもとより夏穂も人知れぬ凄腕の剣客だったし、長い間春江館で稽古を積んできたなみと幸もそこいらの武士には引けを取らない腕を持っていることを侵入してきた者たちは知らなかった。
「無礼者。土足とはなにごとぞ、恥を知れ」
幸江の一言で男たちは抜刀しつつ道場内に駆け込んできた。
夏穂が目配せすると理子を含めた十代の若い女衆たちは道場の奥へと姿を消し、残ったのは幸江と夏穂そしてなみと幸の四人だった。
「ふん。まずは手慣らしで女どもを痛めつけるか」
頭分と見られる髭面の男が抜刀したままつかつかと幸江の前へと間を縮めた刹那、男が「ぎゃっ」と短い悲鳴をあげたと思ったら二間半ほども吹っ飛んで悶絶したが男たちには幸江の動きは見えなかった。

頭に血が上ったか、八人の男全員が一斉に女衆四人に斬りかかった。
幸江と夏穂が手にしていた木刀が「ヒュン」と小気味よい風を切った瞬間、五人が肩と腕を砕かれ転げ回った。
さすがに残りの三人は顔を見合わせて躊躇の体だったが、その隙をなみと幸に突かれ床に這いつくばり、内二人は口から血を流していた。
一方、診療所の待合部屋には四人の順番待ちの町人や農民がいたが、抜き身を下げている武士を見て悲鳴をあげた。
そのとき井之上新界が、
「何のまねだ」
と怒鳴った。
いかにも浪人者といった無精髭の男は無言で逆袈裟に切り上げた。
「あっ」
待っていた男女が思わず声を上げたとき、井之上は寸毫切っ先を右に躱し己の体を押しつけたと思った途端、
「えいっ」
気合いと共に浪人者を腰に乗せて投げ飛ばした。

浪人は石畳に頭を打ち付けたか動かなくなった。
「ほう、井之上さんは柔術もやりなさるのか」
奥から待合人を守る体で顔を出した笙船が驚いた。
「いや、真似事でございます」
井之上は作務衣を直しながら何ごともなかったように診療部屋に入った。
「俺たちの出番がなかったな」
春貞が母屋から苦笑いしながら駆けてきた。
一緒に道場に入ってきた弥三郎と万之助に春貞は、
「取り急ぎ足の立つ奴は縛っておいてくれ。留吉はおらんか」
「へい、ここにおります」
「すまんが南町の伊丹さんに連絡してくれ。賊を引っ立ててくれとな」
と命じると奥の診療所から小川笙船が顔を出し、
「春さん、賊共の治療はやらんでもよいかな」
と笑った。
診療所に続く石畳に倒れている侍を見て春貞は、
「こやつはいかがしました」

笙船に聞くと、
「井之上さんが投げ飛ばしたのじゃ」
と満足そうに破顔した。

一時近くかかったが、南町奉行所常廻同心の伊丹鉄太郎が捕り方を連れてやってきた。
「春さん、遅くなってすまん。
しかし春江館道場を襲うとは、身の程を知らぬ奴らよなあ」
と伊丹は呆れた声を出した。
「伊丹さん。どうやら田原町にある新当流笠原九一郎道場の連中らしい。
すでに一昨年になるが竹屋の渡しで騒動があったその仕返しらしいのだがな。
先日屋敷に来られた山田源蔵どのが俺たちに間違われたのかそこの門前で切りつけられたんだが、刃を向けた奴らは人違いだと言って逃げたというがな」
春貞が言うと、
「あの時の二人は昨年にお仕置きが決まり、一人は斬首で一人は島送りになったはずだがな」

と首を傾げた。
確かにその際の顛末は読売屋浅太郎の手で瓦版になり、春貞の屋敷に怪我人が運び込まれたことや名前は出さなかったものの屋敷の凄腕が刀を振り回した二人を倒し、取り押さえたことなどが書かれていた。
「その新当流道場のなんとかという道場主が命じたことなら我らで取り押さえに向かうが、まずはこいつらを引っ立てて事情を吐かせてみるのが先決だな」
伊丹が春貞の同意を得るように言った。
「そうだな。もし埒があかなければ俺たちが殴り込みに行ってもよいが、それはお役人さまの前で言うことじゃあねえな」
春貞は伊丹と顔を合わせて笑った。
「それはそうと、大奥様がお倒れになったと聞いた。見舞いにも来れずにすまんが容体はいかがなのだ」
真顔になった伊丹が問うた。
「中風の発作というが、元気になるのは難しいらしいんだ」
「そういえば大奥様はおいくつになられたのだ」
「年が明けたから、七十四だな」

「そうか、お歳の割にはいつもお若くお元気だったがなあ」
「というわけでな伊丹さん。母の容体がいつ急変するか分からんこともあって殴り込みにしろ屋敷をなるべく空けたくないんだ。
奴らの調べは勿論だが仕置きを頼めねえかな」
春貞が願った。

その日の夕餉になった。
交代で沙代に寄り添っているひとりである秋子以外はいつもの顔が揃ったが、春貞は井之上に問うた。
「井之上さん、聞かせてくれ。先ほど浪人者を投げ飛ばしたと聞いたがお主は柔術をやるのか」
井之上は照れながら、
「いやあ、お恥ずかしい。
実は以前お話し申し上げましたがわたしは子供のときからどう言うわけか医者になりたいと常々両親に訴えていたそうでして、親父たちも廻船問屋は長男に任せるからと私の我が儘を許してくれました。

しかし少年期に体が弱かった私を心配し、三町ほど離れたところにありました柔術の道場に通わされまして…」

「なるほど。医者になりたいならまず己が元気に…というわけですかな」

弥三郎が口を挟んだ。

「はい。まさか剣術をという覚悟もございませんで結局三年ほどその道場に通いましたが、長崎に行ってからも医者まがいのことを始め、夜遅くまで書を読み、先達の診療の手伝いを続けますと足腰が弱ってくるような気がしましてこれまた懇意になった友人と町道場で汗を流していたという次第です。

とはいえ柔術をどうのという話しではございませんで…」

と頭を掻いた。

「いや、診療所もどのような奴が押し込んでくるか分からん。万一の場合はありがたいことよ、なあ春さんや」

小川笙船は酒を口に運びながら破顔した。

「まったくですな。

井之上さん、承知のように我らの道場がここにはある。それにな、柔術の免許皆伝の弥三郎とっつあんもおる。

手の空いたときにな無理のない稽古をするとよい」
春貞も笑顔で勧めた。
「ありがとうございます」
井之上が頭を下げると弥三郎も、
「またお仲間が増えましたな」
と破顔した。
「そういえば、母が倒れてからこうした料理は誰が富四郎の手伝いをしておるのか」
その問いに幸江は、
「わたしが何もできませんので秋子さんが富四郎さんと亜耶さんの助太刀をしてくれています」
と秋子に笑顔を送った。
「若奥さま。料理と言っても私が食事の用意をするようになりましたのは母が亡くなってからでした。
今になって思えばもっといろいろと教わっておけば良かったと後悔しておりますが、それからはずっと長屋住まい。

こちらのお屋敷のお料理には縁遠いものしか口にしておりませんでしたから、これから富四郎さんたちに色々と教えていただきます」
秋子が答えた。
破顔しながら春貞は、
「料理のことは富四郎に任せておけば良いが、何分人数が増えたからな。気苦労もあるだろうが宜しく頼むぜ」
と秋子に声をかけた。

翌日の朝餉が終わった頃、
「大奥様がっ」
付き添っていた奈美の叫び声が屋敷中に響いた。
縁側から庭で木刀を振っている理子をぼんやりと眺めていた春貞は沙代が伏している座敷に飛び込んだ。
「母上っ」
沙代は一瞬半身を起こそうとでも思ったのか春貞と目が合ったものの体が痙攣していた。

「母上。しっかりなさいませ」
春貞は沙代の頬に己の頬をすり寄せて抱きしめた。
小川笙船をはじめ幸江や理子、格左衛門、万之助、留吉らが次々と駆けつけてきたが誰の目にも沙代最後の時がきたことを覚悟せざるを得なかった。
「な、なんでございますか。母上」
春貞が沙代の口元に耳を向けた。
「あ…なたの…はは…いきて」
「無論です母上、もっと長生きしてくれねば困ります」
春貞は夢中になって沙代の言葉を聞き取ろうとしたが難しかった。
「は……た…のし」
春貞にはそれが「はるどの、たのしかった」と聞こえた。
と思ったら沙代の全身から力が抜けた。
笙船が近寄り脈を取り、瞼を開き、
「ご臨終じゃ」
と肩を落とした。
「母上、母上っ」

春貞の叫びが続いた。
元文五年、桜も散ろうという四月十二日の朝、春貞の乳母沙代はあの世に旅立った。
享年七十四歳であった。

四

通夜には出入りの商人達にも愛された沙代だけに多くの人々が集まった。
ただし徳川宗勝は交代で国元へ立ったばかりのことだったのでその姿はなかった。
とはいえ堀田万之助が文で尾張藩江戸上屋敷の大道寺五郎と中尾虎吉の二人に知らせたこともあって二人は神妙に座していた。
「賑やかなことが大好きだった母だ。是非ご一同、飯を食い酒を飲んでな母の旅立ちを見送ってくれ」

春貞は人目も憚らずに泣きながら願った。
駆けつけた小石川養生所肝煎小川隆好（笙船の息子）、南町奉行所同心伊丹鉄太郎そして金杉水道町の岡っ引き定吉や「い組」の頭政五郎も肩を落とし、読売屋浅太郎、須田町の岡っ引き岩次郎らも泣いていた。
台所には定吉の女房お勢、「い組」の頭政五郎の女房お志津をはじめ伊丹鉄太郎の女房深雪と八重、夏穂の実母お糸、そして岩五郎の女房お梅らが富四郎や亜耶の指示で見事に立ち振る舞っていた。
棺が安置された大広間には商人達に混じり、山田浅右衛門吉時と息子の源蔵、浅草弾左衛門らの顔もあった。
夏穂の実父長兵衛は娘夏穂が春貞夫婦の養女となったことから親族でもあったが、一同を代表するかのように、
「春貞さま。お嘆きはお慰めしようもございませんが、我々にとっても沙代さまは特別のお方でございました」
というと越後屋の三井高房が頷きながらも、
「失礼ながらあの世で親父高平のよき相談相手になっていただきましょうぞ」
と涙を拭った。

春貞は棺の前でしみじみと呟いた。
「俺は自分の意志で、思う通りに生きてきたと思っておったが、母上に死なれてみるとな、大方の俺の生き様は母が見据えてくれた道なことに気がついたぜ」
「……」
「江戸に出てきてから俺が居着かないこの屋敷をずっと守ってくれたのが母上だ。
尾張からの送金を相模屋…そこにいなさる清右衛門さんの御店に預けつつも俺に知らせなかったこともな。もし俺が知ったら、あの時の俺ならあっと言う間に散在しちまったに違いねえ。
幸江と所帯を持とうと思ったときもだ、この屋敷と母上がいてくれたからこそ決心がついたことだ。
母上は俺の言うことに真っ向から反対したことはほとんどねえが、俺は結局母上という釈迦の掌で踊っていただけの孫悟空ということよ」
隣に座していた幸江が春貞の手を握って嗚咽していた。
小川笙船が酒を口に運びながら井之上新界に呟いた。
「医者としてこれまでにも実に多くの人たちが死するのをこの目で見てきたが、

このことだけはこの歳になっても慣れないものよなあ」
「……」
「春さんや。お前さんの悲しみが分かるからこそ口に出すが、この世の生きとし生けるものすべては遅かれ早かれ死ぬ。
これまで死を免れたものは一人もおらんのじゃ。
わしにしても後そんなに生きられぬじゃろうて。
しかしな、限りある命だからこそ尊いともいえようぞ。
お前さんはこの城の主人、城主よ。それもな、お前さんがいうように大奥様の望んだように立派に城を守ってきたではないか。
だからな、酷なことをいうが、泣くのは今夜限りにしようではないか。
我らもな、沙代さまの後押しで診療所が建った。その診療所を休んでは沙代さま、大奥様に叱られよう。
井之上さん、およし。我らは医者じゃ。働くことこそ大奥様の喪に服すと信じて明日から診療を始めようぞ…」
笙船は自分に言い聞かせるように隣に座していた井之上とおよしに呟きつつ、後の言葉は言葉にならなかった。

沙代の初七日を終えた翌々日、伊丹鉄太郎が定吉とやってきた。
「まだまだ気持ちが落ち着かんだろうが、そんなときに役目とは言え済まないが聞いてくれ春さん」
伊丹の話しは過日春江館を襲った十人の詮議についてだった。
それによると彼らは新当流笠原九一郎道場の門人および客分たちだったが、問題はそのことを当の笠原九一郎に問いただしたものの、当道場とは関わり合いのない者達でありそれは当道場を陥れるための騙りだろうと居直ったという。為に即お縄にするということまでには至っていなかった。
「都合が悪くなれば門人や客分までも裏切る人間の屑だぞ奴は」
伊丹も怒り心頭の顔で言い切った。
新当流笠原九一郎道場は門弟二〇〇人と豪語しているが、実際の所は五、六十人で後十人ほどの客分と称した浪人を雇い、時に闇の世界に力を貸しているという。
「道場主の笠原九一郎という野郎は塚原卜伝の流れを組むという新当流を自認しているがな、いまどき流行らん流派というよりこけおどかし野郎だと俺は見てい

るがな」
伊丹は続けた。
「なにしろ襲ってきた一人は抜き身を下げたまま診療所にまで侵入しようとした奴らよ。まかり間違えば罪もねえ患者たちの命まで失う所だったぜ。こりゃあ放っておけねえな、始末をつけるか」
春貞は呟いた。
「殴り込みか春さん。しかし喪に服すときに殴り込みは拙いんではないか。それにな俺たちは加勢できんぞ」
伊丹は苦笑しながら応じると定吉は、
「歯痒いですなあっしらは、旦那」
と口に出した。
春貞は、
「なに、母上が生きていらしたらきっと『思うがままにしてのけなされ』と言ってくれるさ」
その表情は決意を秘めていた。
二日後の昼、春貞は格左衛門と万之助を連れ、田原町にある新当流笠原九一郎道

場と書かれた門を潜った。
「笠原九一郎はおるか」
春貞が問うと道場の奥から、
「おう。わしが笠原九一郎だ。誰だお前は。道場破りか！」
と応じた。
そしてそこにいた二十名ほどの門弟達が春貞ら三人を取り囲んだが誰も手を出そうとはしなかった。
「俺の名か…。俺はお前が門弟達を嗾けて亡き者にしようとした松平春貞だ」
春貞が名乗ると、
「し、知らぬ。わしは何も知らぬ」
笠原九一郎は精一杯威厳を保ったつもりだがその声は心なしか震えていた。
「どう捉えようとも其方の勝手だが、門弟達の我が屋敷への振る舞い、許す訳にはいかぬ。
それを嗾けたのは道場主のお前だと門弟達が自白しておるではないか。
奉行所の調べに素直に謝ればよいものを、些か我らを甘く見たな。
それにここの所俺は些か機嫌が悪い。

二度と不埒な真似ができぬようこの春貞が成敗してくれる。覚悟せい」
春貞は珍しく鬼の形相で道場に掛かっていた木刀を手にし、つかつかと笠原九一郎に歩み寄った。
「ま、待て。道場破りにしても礼があるものぞ。
まずは門弟達と戦ってもらおう…」
笠原九一郎が一生懸命威厳を正し見所に座したまま言ったが、弟子達は皆腰が引けていた。
春貞は首を横に振りながら、
「無法者の口から礼とは失笑千万。
それに取り巻きたちの命をすべて奪うこともあるまいよ。
閻魔に挨拶するのはお主一人でよい」
と言うと覚悟したのか、笠原九一郎はすっくと立ち上がり、
「おのれ、身の程も知らぬ奴。やはり噂通りの天狗のようじゃな。
気が変わったわ。
真剣で勝負して進ぜようぞ。

我が新当流秘剣一（ひとつ）の太刀を受けてみよ」
笠原九一郎は木刀を投げ捨て、腰に差していた刀を抜いた。
「馬鹿者めが。
一の太刀とは鹿島神宮に一千日の祈願をした卜伝が満願となった朝に夢の中で大悟したというもの。
お前のような俗物に鹿島の神が力を貸すと思うてか」
右手に木刀を下げていた春貞も木刀を落とし、腰の刀を静かに抜くとはばきと鍔にある金象眼の葵紋が光った。
それを察知した笠原九一郎が驚愕し、
「な…あ、葵の紋とな。お、お前は何者ぞ！」
その驚きの声を無視した春貞が無防備に思える形で生き死にの間合いに踏み込んだ。
機会と見た笠原九一郎は青眼から大上段に構えを直しつつ裂帛の気合いで斬り込んだ。
米道格左衛門も思わず息をのんだものの春貞の体は残像を残しただけですでにそ

こになく、笠原九一郎の耳に「これが一の太刀ぞ」と聞こえた刹那、血しぶきが上がり、笠原九一郎が春貞の一撃で頸動脈が切り裂かれその場に崩れ落ちた。
「うわあああ」
二十人ほど取り巻いていた門弟達は悲鳴をあげて道場から飛び出ていった。
沙代の四十九日の法要の朝、両替商相模屋の隠居清右衛門がいそいそとやってきた。
仏間に通された清右衛門は一通の書状を春貞に手渡した。
「春貞さま。尾張の殿様から書状と別途香典だとのことで為替が届いております」
と告げた。
書状には徳川宗勝直筆の几帳面な手でお悔やみと共に葬儀に参列できなかった無念の心情が書かれ、せめてもの供養に香典を送ったので霊前に供して欲しいとの文面だった。
一通り目にした春貞は文の一点を凝視し急に嗚咽を漏らし始めた。
「は、春貞さま。いかがされましたか」

清右衛門が慌てて問うた。
肩で息をしながら春貞は徳川宗勝よりの文を静かに清右衛門に差し出した。
「拝見いたします」
両手で押し抱くようにして受け取った清右衛門も最後の花押に目をやったとき、
思わず春貞を見た。
春貞は強く頷いた。
花押の一部に明らかに墨が滲んだ場所があったのだ。
「ありがたいことよ。それは代五郎、いや宗勝様の落とした涙であろう。
母上の霊前に捧げるにこれ以上のものはあるまい。
なあ清右衛門さん」
「いかにも」
春貞と清右衛門が頷きあった。
そのとき、門前で馬の嘶きが聞こえた。
確認するまでもなく大股で入ってきたのは弥三郎に案内された八代将軍徳川吉宗
その人だった。
「う、上様…」

挨拶も間怠っこしいのか吉宗は狼狽しながらも清右衛門が平伏しているのに笑顔を送り、

「残念であったな春貞。余は母御の葬儀には間に合わなかったがせめて仏壇に線香をあげさせてくれ」

そう言いながら仏間に置かれた仏壇の前に座し、一礼してから手を合わせた。その間、春貞と清右衛門そして弥三郎は平伏し続けていた。

しばし瞑目を続けていたが仏壇から座を外した吉宗は春貞に向かい、

「ところで以前、余は『米将軍』と揶揄されておることを話したが、他にもな『無学文盲将軍』と言われたことがあるらしい」

と静かに言った。

「な、なんとご無礼なことを」

思わず春貞は顔を上げて叫んだ。

「それはな、余が和歌を始めとする古来の文化に無関心という批判なのだ」

「……」

「とはいえ、そのことは確かにその通りでな、余の関心は申すまでも無く世が安泰であることよ。

だとすれば和歌を学んだところでその為に何の御利益もないわ。そうであろう春貞」
吉宗は意外に機嫌良く言った。
「御意」
「お主は一時期長崎にいたと聞いた。そして忠相が名付け親だという竜吐水を考えたお主だが、阿蘭陀国の進んだ学問は多々知っておるのか」
吉宗は春貞に問うた。
「滅相もございません。上様のおかげで医術などに関わる書物の禁輸緩和がなったとはいえこの江戸にいてそうしたあれこれを知る由もございませぬ。
第一阿蘭陀の言葉が分からぬでは書物からの知識も得られません。
現在向島診療所に小川笙船先生と共に働いております長崎で蘭方を学んだという井之上新界なる若者も阿蘭陀の言葉が分からないと嘆いておりまする」
春貞が答えると笑みを浮かべた吉宗は、
「内所の話しだがな、余はほんの少しではあるが阿蘭陀の言葉…といっても文字だがな、読めるのだ。知らなかったであろう春貞」
と驚きの発言をした。

春貞はなんと返事をしたらよいかが分からず言葉が出なかったが吉宗はそのまま話を続けた。

「それらはな、年一度阿蘭陀人の商官長が通事と共に謁見に訪れた時などにささやかだが教授してもらったり直接余が問うて知ったことなどが含まれる…」

「……」

「余が関心を持っていることは民の幸せ、それに気象天候なのだ。ささやかなれど小石川養生所運営もそのひとつじゃし高麗人参の栽培しかりじゃ。それらはお主達も存じおろうが、いまひとつの関心事じゃが江戸城内により正確な暦を作るためと天候を察知するため、さらに正確な測量をめざすために城内に作った築山に日月星の動きを見る渾天儀を作らせ、時に余自身もそれを使って測量を行っておるのじゃが、それは知らんかったろう」

吉宗は得意そうに言った。

夏の盛りも過ぎたころ、春貞の屋敷もやっと沙代の死という現実を受け入れ落ち着きを取り戻していた。
屋敷の維持管理のほとんどは田宮助左衛門と二人の娘が担っていたから大きな支障はなかった。
母屋の縁側には春江館で一汗掻いた春貞と格左衛門が稽古着のまま座していた。
「春さん、大奥様がいらしたらきっと『稽古着のままとはだらしがない。早々に着替えなされ』とかなんとか…叱られるであろうな」
格左衛門が菜園を望みながらいった。
「そうだな。いまだにその声が聞こえるようだぜ」
春貞も苦笑いしながら同意した。
「あれもこれも、何もかも一緒にしてはならぬだろうが、前に格左が申したとおり、尾張にもそして我が屋敷にも新しい風が吹く。
好むと好まざるとを問わず、母上に変わり幸江が屋敷の奥向きを納めなければな

らぬし、すでに屋敷の切り盛りは助左衛門を中心に秋子と奈美が務めてくれている。
診療所にしても少しずつ笙船先生のご負担を減らして新界とおよしの活躍の場が多くなっていくであろうよ。
俺たちはとかくこれまでの、肌に慣れ親しんだ風を心地よいものだと思っているふしがあるが、それでは世の中は変わらんのだろうよ。
無論よき方へ風が吹き、よりよき世の中になってもらいたいものだがな」
そんな話しをしていると診療を終えた笙船、新界そしておよしが母屋に戻ってきた。
それぞれが一日の役目を終えて母屋に戻ってくる時刻だったが、いつものように幸江と亜耶が一同の茶を運んで来た。
すると小川笙船が珍しく神妙に春貞の前に座した。
「春さんや、この数日お前さんにいうべきか、黙って胸に秘めておくべきかを考えていたことがある…。聞いてくれぬか」
笙船の物言いは強い意志を持ってこの場に居ることを伺わせたが、何故か隣に井之上新界も座した。

「いかがされました先生。
先生は俺の父親同然のお方。どのようなことでもご遠慮無く口に出してくださ
れ。それが例えお叱りであっても甘んじて受けましょうぞ」
と春貞が笙船の視線をまともに受けて応じた。
「馬鹿を申せ。お前さんに文句などあるはずがないではないか。
実は大奥様、沙代さまのことなのじゃ」
「えっ」
同席していた幸江が意外だとばかりに声を出した。
「わしの聞き間違いか、思い過ごしかと何度も自分の胸に問うたが、ある思いが
次第に大きくなってな。
これは例えわしの間違いであっても春さんに伝えておかねば後で後悔すると思い
井之上さんと相談の上でな、打ち明ける決心をしたのじゃ」
「亡くなった母上のことでございますか」
春貞も見当が付かないといった顔で笙船を見た。
無言で頷いた笙船は、
「春さん、あのとき、大奥様がご臨終の際に一番近くにいたのはお前さんじゃ。

そしてな、いつでも医者として対処できるようにと取り巻いたのがわしと井之上新界さんじゃったが覚えておるか」
意外な問いに春貞は、
「なにを申されようとしているかは分かりませぬが、確かにその通りだったと記憶してます」
再び頷きながら笙船は、
「では聞こう。大奥様が最後に口にされた言葉はどんなことだったかをな」
笙船の意図が分からず春貞は幸江と顔を見合わせながら、
「確か、『は……た…のし』と呟かれ、それを俺たちは…いや俺は『はるどの、たのしかった』と聞きました」
春貞が答えた。
「そうじゃったが、その前にもう一言大奥様は呟かれたな」
「はい。『母はもっと生きたかった』と聞きました。だから俺は『無論です母上、もっと長生きしてくれねば困ります』と願ったことをよく覚えています」
「うむ」
小川笙船は唇が乾くのかしきりに唇を舐め茶を飲みながら己に諭すように話し出

した。
「あのとき、わしは『あなたの…はは…いきて』と聞いた。その意味はそのときお前さんのいったようにわしも受け取ったが、その大奥様の呟きが妙に耳に残ったのじゃ」
「……」
「よいか、春さん。『もっと生きていたかった』とおっしゃりたかったとすればその前の『あなたの…』はどういう意味なのじゃ」
瞬間、居間の空気が凍り付いた。
「お、俺は『貴方の母としてもっと生きたかった』と受け取りましたが先生、母上は別のことを言いたかったとおっしゃいますか」
さすがの春貞も声がうわずった。
「確信があるわけではない。
またもう一度聞き直すわけにもいかぬ。
中風で物がはっきり言えぬ大奥様が今際の際におっしゃったことだ。
最後の最後にお前さんに伝えたいことしか言われぬだろう。
そして『はるどの、たのしかった』というのは間違いないとわしも思う。

しかしな、その前の言葉が『母はもっと生きたかった』ということなら『あなたの…』は変だ、そうは思わぬか春さん」
沈黙を守っていた井之上新界が、
「私も笙船先生から問われ、改めて思い出しますと確かに『あなたの…はは…いきて』と聞き取れました」
「春貞さま…」
幸江が苦しそうな喉から絞り出すような呼びかけをした。
「先生らは何をおっしゃりたいのか。ここまで話しをされたのですから最後まで申されてくれませぬか」
春貞は怖いものでも見るように笙船と井之上を交互に見つめた。
井之上は、
「春貞さま。笙船先生と記憶をすり合わせ、あらゆる可能性を考えてみましたが、あのとき大奥様がおっしゃりたかったことは『あなたの母は生きています』という意味ではありませんか。
私はこのお屋敷で一番の新参者故、春貞さま方の謂われをまだよく存じ上げません。そんな私が素直に聞けばそう受け取れます」

「うーむ」
「なんと…」
弥三郎と米道格左衛門も唸った。
「ち、ちょっと待ってくれ。俺の母は俺が生まれた後すぐに産褥熱で亡くなったと物心がついてからずっと聞かされていたんだ。墓参りにも行った…。それが間違いだったというのか」
春貞が天井を仰いで怒ったように呻いた。
「春さんや。お前さんにしても生まれたばかりで母上の亡骸を見た記憶があるわけではない。回りの者にそう言われて納得しただけの話しではないか」
小川笙船ははっきりと言い切った。
「なぜだ…」
春貞の呟きに格左衛門が答えた。
「思えば成人になった春さんが尾張に命を狙われたのだ。生みの母である、確か…弥生様（やよい）とおっしゃったかな、母御のお名は…。
その実母のお命を縮めようとする輩がいたとしても不思議ではあるまい」

「なるほど。それを案じた徳川綱誠様は御連枝川田久保松平友著様と謀り弥生様が亡くなったとして墓まで建て、その身をお隠しになったということもあり得ますな」
弥三郎が言葉を繋いだ。
「春さんはまぎれもなく尾張第三代藩主である徳川綱誠様のお子よ。ただ跡継ぎを巡って争いの種にしたくないと御連枝川田久保の松平家に預けられた形を取って松平のお子として育てられた。
とはいえ幼少期はそれがしもそうだが江戸の地は踏めず、ずっと尾張の城下で育ったわけだ。
しかし実母の弥生様は武家の娘ではなくどこやの名主の娘だと聞いたことがある。春さんが綱誠様のお子であることを否定されたとなれば弥生様の存在は邪魔でしかないからな」
己も春貞と一緒に育った格左衛門が言葉を選びながら言った。
「茶室でな、一服いただきながら昔話をお聞きしたことが数回あるがのう、春さんの希望通り江戸へ出ることを許された際、当初はあの戸山荘近くにある川田久保松平家屋敷にという話しがあったそうだが、尾張の重臣らから尾張や川田久保

との縁を感じさせるからといって現在のここ、向島の土地を与えられたと聞きましたがな。
もしかしたら実母への疑惑を持たれぬよう春さんを江戸へ向かわせるよい機会だと思ったのかも知れんな」
笙船も話しを繋いだ。
「それに後々『自分が春貞の母であり、実父は徳川綱誠様です』などと言い出されては大事になりますな。それこそお命が狙われても不思議はございませぬぞ」
田宮助左衛門も言い切った。
「ま、ま、待ってくれご一同」
少し冷静さを戻した春貞が口を挟んだ。
「いいか。もし、万一俺の実母が生きていたとすればだ、俺にとってこんな嬉しいことはねえ。いや、顔も知らねえ母だから実感はないがな。そんな言わば吉報なのになんだなんだこの重苦しい雰囲気は…」
いつもの春貞の口調になってきた。
「春さんや。吉報には違いないがもしそうなら、これは尾張にとっても川田久保松平にとっても大事に違いあるまい。

春さんの出方によってはまたまた争い事の火だねになろうぞ」
小川笙船が真顔で言い切った。
「そうだとしても先生。なぜ母上は俺にそのことを隠していたのでしょうか」
春貞の表情は悲しそうに見えた。
「春さん、それは仕方のないことではあるまいか。あの沙代様のことだ。熟考し苦慮した結果のことだろうな。
春さんに知らせれば尾張まで、いやもし尾張に弥生様がおられるとしてだ、そうならあなたはすぐさますっ飛んでいくに違いない。そうではないか春さん。
それでは一大事になるに違いあるまい」
川田久保松平家の事情を知っている格左衛門が問うた。
「……」
「なるほど。もしそんなことになれば、それこそ弥生様が生きておられることは勿論、その居場所も知れることになり、大事になると危惧されたに違いありませんな」
堀田万之助も言うと弥三郎も、
「そうでしょうな。ということは春さん、これはうかつには動けませぬぞ。なに

か事が起きれば春さんと弥生様の問題だけでは済まなくなりますからな」
と唸った。

春貞の乳母であった沙代が春貞の実母の秘密を知っていたとしても不思議はなかった。
春貞の命を預かった沙代のことだ。そして沙代に春貞の乳母を命じ全権を託した松平友著が実母の秘密を打ち明けていたとしても自然なことに思えた。
無論当事者の一人として徳川綱誠も口を閉ざせばお家騒動は避けられるだろうし弥生の命も守れると考えたに違いない。
しかし、その実母である弥生が生きているとすれば、春貞は放ってはおかないだろうこともそこに座している全員が知っていた。
「ふうっ」
大きく息を吐いた春貞は、
「このこと、亡くなった母上の他に誰が知っているかが鍵になるな」
と誰にともなく呟くと、
「これまで秘密は厳重に守られてきたのですからこの事実を知る者は多くはない

でしょうね」
幸江が春貞を見据えて答えた。
「そうよなあ。当事者の父上、松平友著様そして母上はすでに鬼籍に入っている。四十年ほど前の秘密を知る者は多くはあるまいな。
そうだ、代五郎…いや宗勝はこのこと知っておるのだろうか」
春貞が自分に問うように言うと格左衛門は、
「殿とてご存じあるまい」
と言い切った。
そのとき、料理人の富四郎と秋子、亜耶が膳を運んで来た。
「皆さま、お話しは膳を囲みながらいかがでしょうかな」
富四郎がいうと、
「おお、もうこんな時刻になっていたか…」
一同が庭に目をやるとすでに夕闇が迫り、涼しげな風が入ってきた。
「富四郎、秋子の料理の腕は上がったかい」
春貞が笑顔で問うと富四郎は配膳をしながら、
「さすがでございますよ。新しい調理法などもすぐにお手のものとしてしまわれ

ます。助かっております」
と答えた。
当の秋子は、
「まだまだ大奥様の代わりができるはずもございませんが、富四郎さんにひとつひとつ教えていただいております」
これまた膳を揃えながら応じ、
「ささもご用意しておりますのでお話しの続きはごゆっくりと願います」
亜耶も一同に笑顔を送りながら下がって行った。

箱膳を囲み、全員の顔が揃った。
春貞が思い出したように、
「笙船先生。先の話ですが、母上の物言いについて気がつかれたのはいつ頃でしたか」
と問うた。
「いや、医者は常に冷静で平常心を持って患者に向かい合うことを心懸けなければならぬ。またこれまで中風で言葉が不自由な患者も多く診てきたが、なんとい

ったらよいか、わしも耄碌したか、身内同然の大奥様を前にするとやはり他人行儀な対応はできぬのじゃ。つい身内感情が出てしまう…」

「ありがたいことです」

「いや、だから当初はわしも春さんが『無論です母上、もっと長生きしてくれねば困ります』と応じたこともあってな、春さんと同じ理解をしたのだがわしにもまだ医者魂が残っているのか何かが心にひっかかると思ったのはその晩からじゃ」

「ほう」

「しかしわしが気づいたことはある意味突飛なことだ。検証も出来ぬしな。しばらく思案していたが、これは一人で考えていてもどうにもならぬと診療の合間に井之上さんに話しを聞いてもろうたのじゃ」

小川笙船が焼き魚の骨を上手に取りながら言った。

井之上新界は白米を頬張り、咀嚼した後で言葉を挟んだ。

「こちらのご飯はいつも美味しいですな」

と呟いた後、

「いや、失礼。私は先ほども申し上げました通り、当お屋敷の事情について…特

に昔のあれこれを知り得ておりませぬ。
大奥様が春貞さまの乳母になられた経緯やその御連枝、なんと言われましたか…
そう、川田久保松平家のご事情も知りませぬ故、あのとき大奥様が申された言葉の意味を深く考えることができませんでした。
しかしなんと申されたかはこの耳に確かに残っておりましたので笙船先生からお話しを聞き、確かに違和感があることに気づきましてございます」
井之上は笙船と春貞を交互に見ながらそう言い切った。
「なるほど。しかし先ほどは正直狼狽えたが、笙船先生のお気づきがなかったらこのまま何ということもなく忘れ去っていくところでした。
ことの是非はともかく、先生方にあらためてお礼を申します」
春貞は軽く頭を下げたので井之上が慌てた。
「しかし、ことの真偽を確かめることは勿論ですが、もしご母堂がご存命であるなら春貞さま、どうなされようとお考えですな」
田宮助左衛門が問うた。
「そうよなあ、もし本当に生きているならそれこそお命のあるうちに会いてえな」

春貞の語尾は些か震えていた。
「旦那、春貞さま。方法はお考えになるとしてとにかく秘密裏に探らなければことは前に進みませんぜ」
留吉が真顔で言うと、隣に座っている奈美が盛んに首を縦に振っている。
弥三郎はその二人の姿に笑みを浮かべつつ、
「本当の所は春さんが尾張に乗り込んでというのが常道でしょうが、それはいかにも危険。
春さんはともあれ、ご母堂のお命が危のうございますでな。
ここはまずどなたかが先鞭をつける意味で尾張に出向くしか方策はありませぬな」
そのとき、盃を箱膳に戻した米道格左衛門が両手を膝の上に置き、
「春さん、その任それがしに命じてくださらんか」
と言った。
格左衛門は春貞に向かい、
「それがしは尾張ならびに川田久保の内情について春さん同様に知っているつもりぞ。またご存じの通り川田久保松平家で育っただけでなく、畏れながら現尾張

藩藩主宗勝様と気心も知れておる。
さらにそれがしは些か足が遠のいているとはいえ、松平の家や尾張の藩邸をうろついたとしても怪しまれる謂われはござらん。
きっと正しき情報を探ってまいりましょうぞ」
そういうと珍しく春貞に頭を下げた。
「格左、何の真似ぞ。俺の方こそ頭を下げて頼まねばならぬ立場だ。
そうだ、この際夏穂を連れ、夫婦で国元へ旅をするとよい」
春貞が言い終わらぬうちに夏穂が、
「えっ。私も一緒できるのですか」
と顔をほころばせた。
「なにを寝ぼけているのやら。お前たちは歴とした夫婦ではないか。それにな、夏穂がそばにおれば格左の大ざっぱなところを繕ってもくれようし、夫婦旅で国元に帰ったという大義名分も立つではないか、なあ格左」
「ああ、それがしは大ざっぱですか…」
格左衛門が苦笑いしながら頭を掻いた。
「それはよろしいですな」

軍師の弥三郎も破顔した。
それまで静かにしていた理子が、
「理子も一緒に行きたい」
と声を上げ幸江を困らせた。
春貞は続けて、
「それにご苦労だが留吉、お前も格左たちの従者の体で一緒に行ってもらえぬか。お前はかつて尾張まで俺の命を探りに旅してくれた経験があるからな。ただし済まぬが奈美まで連れて行かれては屋敷が困る。今回は勘弁してくれ」
というと留吉が奈美と顔を合わせながら、
「旦那、喜んで同道させていただきます」
そう言い切った。
「格左衛門どの、夏穂さん、留吉さん。申し上げるまでもないことですがこれは密命ですぞ。なにが目的で尾張に、そして御連枝に格左衛門さんらが来たのか、その真意を知られてはなりませんが、お一人だけ事情をお知らせしご協力いただかなくてはならないお方がおります」
早くも食事を終えて茶を飲んでいた弥三郎が言うと、

「代五郎だな」
春貞が即答した。
「はい。ご当主徳川宗勝様だけには事情をお話し申し上げてご協力ご援助をいただかなくては事の成就は難しいと思いますな」
「分かった。俺が事情を文にして事前に送っておくが、万一の事を考えことの仔細は格左から直接話してもらう方がよいな」
「御意」
「よし。格左、夏穂そして留吉、よろしく頼むぞ」
春貞が久しぶりに晴れ晴れした表情を見せた。
「春さん、早い方がよいでしょうが、出稽古先には一ヶ月ほど、いや念のため今年一杯お休みをいただく旨お願いしておきましょうぞ」
米道格左衛門が決意の表情で一同を見回すと、
「夏穂さんの代わりはできませぬが格左衛門どのの代わり、それがしでよければ続けましょうか」
堀田万之助がいうと春貞は、
「万之助。大変だろうが、そうしてくれぬか」

と願った。

時は元文五年（一七四〇年）秋口のこと、旅立ちにはうってつけの季節となっていた。

「首巻き春貞」八巻をお届けする。

この巻はこれまでとは違い、些か脱稿までに時間がかかった。他に用事ができたという理由もあるが、人物群像が複雑になってきたこともありタイトルの「新風」に象徴されるような新しい方向性、展開をと考えたからだ。

ひとつには小川笙船という実在の人物を春貞の屋敷に住まわせるだけでなく敷地の奥に診療所を作り、そこで地域の貧しい人たちへの医療活動を開始させることにした。

その小川笙船という人物は史実の医師だが「首巻き春貞」では最重要のキャストでもある。なにしろ小石川養生所の初代肝煎りだったが幕臣へと誘われたものの固辞し肝煎りを息子に譲り隠居した。しかしその後の足取りはよく分かっていないのだ。

分かっていることは肝煎職を辞した後は武蔵国金沢瀬崎村（現在の横浜市金沢区）に居を構え三年ほど過ごした後に江戸に出て没したということくらいなのである。

笙船が没したのは宝暦十年（一七六〇年）というから八十九歳という長寿を全うしたことになる。

本編ではその笙船の余生は春貞らと共に向島で活躍させようとした。

二つ目は笙船の助手として吉原から身請けされた留吉の妹およしを押し出すことにしたことだ。苦界といわれた吉原の中しか知らないおよしを笙船の右腕に育ててみたいと考えたからだ。

そして三つ目は長崎で蘭学を学んだ外科医、井之上新界という若者を登場させた。井之上新界とおよしの二人が医療現場に加わったことで新しい展開が期待できるはずだと考えている。

四つ目は春貞の乳母沙代が没し、その死に際の言葉から春貞を生んですぐ亡くなったと信じられていた実母が実は生きていたというストーリーを思いついた。

しかし登場人物は作り出さねばならないが、一端設定すると一人歩きする感覚にとらわれることは多い。

例えば、およしが吉原から身請けされたとき小川笙船の助手を務めさせようとは考えもしなかったし、春貞の実母が生きていたのでは…というような展開にして

も考えもしなかった。
皆ストーリーを進めていくうちに次々と思いつくという感じなのだ。
小説とは言え、登場する人物達の人生を紡ぎ出していく面白さはやめられない。

二〇一八年三月　多摩市自宅兼仕事場にて

松田 純一

安藤優一郎「江戸の養生所」
ディアゴスティーニ「週刊江戸　小石川養生所の開設」
酒井シヅ「まるわかり　江戸の医学」
青木歳幸「江戸時代の医学　名医たちの三〇〇年」
菊池ひと美「江戸衣裳図鑑」
菊池ひと美「江戸の暮らし図鑑」
菊池ひと美「江戸おしゃれ図絵」
菊池ひと美「お江戸の結婚」
森田健司「江戸の瓦版　庶民を熱狂させたメディアの正体」
江戸人文研究会「イラスト・図説でよくわかる江戸の用語辞典」
江戸人文研究会「絵で見る江戸の人物辞典」
野火迅「使ってみたい　武士の日本語」
山田順子「江戸の暮らしがわかる本」
稲垣史生「江戸時代大全」

大森洋平「考証要集　秘伝！ＮＨＫ時代考証資料」
人文社「切絵図・現代図で歩く　江戸東京散歩」
立川博章「大江戸鳥瞰図」
柳生宗矩／渡辺一郎「兵法家伝書　付・新陰流兵法目録事」
柳生耕一平厳信「負けない奥義　柳生新陰流宗家が教える最強の心身術」
村山知義「無刀の伝　柳生新陰流極意」
新人物往来社「剣の達人一一一人　データファイル」
人文社「江戸庶民の食風景　江戸の台所」
松下幸子、榎木伊太郎「再現江戸時代料理」
大野恵造「江戸小唄総覧」
江戸風土研究会「地図で読み解く江戸・東京」
NPO法人 宗春ロマン隊「徳川宗春伝」
深井雅海「江戸城御庭番―徳川将軍の耳と目」
若桜木虔「御庭番通史」
高埜利彦「日本の歴史（十三）元禄・享保の時代」
氏家幹人「大江戸死体考―人斬り浅右衛門の時代」

塩見鮮一郎「弾左衛門とその時代」
塩見鮮一郎「資料　浅草弾左衛門」
塩見鮮一郎「江戸の非人頭　車善七」
三谷一馬「江戸年中行事図聚」
永井義男「図説 吉原事典」
塩見鮮一郎「吉原という異界」
山崎光夫「薬で読み解く江戸の事件史」
梅原亮「江戸時代の医師修業　学問・学統・遊学」
貝原益軒（著）／伊藤友信（翻訳）「養生訓」
杉田玄白／酒井シズ(現代語訳)「解体新書」
片桐一男「杉田玄白　蘭学事始」
長尾剛「話し言葉で読める『蘭学事始』」
梅原亮「江戸時代の医師修業 学問・学統・遊学」
歴史群像編集部・編「時代小説用語辞典」

Wikipedia

本書の無断複写・配布は著作権法上での例外を除き禁じられています。

首巻き春貞（くびまはるさだ）　新風（しんぷう）（決定版）
松平春貞一代記（八）

2018年4月1日　第一刷
2018年5月22日　第二刷
2019年2月19日　第三刷
2020年5月12日　第四刷　（決定版）

著者：松田純一（まつだ　じゅんいち）
http://www.mactechlab.jp

表紙デザイン：Junichi Matsuda